

其日十一時頃、^{エルト}准亭郎はアルベルトの其家に歸れるや否やを其僕に問へり、僕は先にアルベルトの馬上にてワルハイムの方に馳せ行くを見しが故に、今其家に在るべきことを告げぬ。准亭郎は直ちに僕に命じて左の手紙を其家に持ち行かしたるなり。

予は旅行せんと欲す、願くは予に御身の所持せる短銃を貸せ、頓首。准亭郎

^{エルト}准亭郎の去りし後、可憐なる^{チャロワット}紗娘は心配の中に其夜を過しぬ。渠の短慮なる行ひは、幾千となき悲しき感情となりて其胸を壓し、思ひ來り思ひ去り、さしも清らかなる心の中にも無恨の苦痛を與へたり。若しアルベルトの歸り來りて此事を聞き知らば、いかばかり其の感情を損じ、又々鋭き非難の聲を聞くべきかと思へば、其恐ろしさも亦一方ならず。渠女は是迄一度も許りを口にせしことあらず、又一度も事の實を隠せしことあらず、されど渠女は此時初めて眞を匿すの必要ありと思へり。暫くしてアルベルトは歸り來りぬ。紗娘は辛やく其容を修め、之を迎へり、之れ實に渠女が不快の念を抱いて其夫を見たる最初の時にてありしなり。渠女は渠が己の泣顔を覺らんことを恐れ、其の苦惱を以

て睡眠の不足なるが爲なりと言ひ曇らせり。されど渠女の著るしく變れる容貌は、遂にアルベルトの注意深き眼光に漏るゝ能はざりし。渠は一封の手紙を開きながら、儼然として紗娘に向ひ、何か新らしき事の起らざりしや、又己れの不在の間に何人か來らざりしやを問ひぬ。渠女は暫くの間躊躇せしが、遂に^{エルト}准亭郎の昨日來りて一時間程居りしを告げぬ。アルベルトは冷笑して曰く、「渠は善き時を擇べり」。斯く言ひながらツト己の室に退きぬ。

跡には^{チャロワット}紗娘只一人、半時ばかり悲しき思ひに沈み居たりしが、やゝありて己も亦アルベルトの跡を追ひて其室に赴き、何物か欲する所のなきかを問ひぬ。アルベルトは冷淡に「否」と答へながら、見向きもやらず、頻りに何か書し居れり。渠女は仕事せんが爲に坐せり、アルベルトは時々其机を去りて室内を歩めり、紗娘は此機に乗じて談話を仕掛くれども、渠は其度毎に之を避けり。此の残酷なる仕向け方は、渠女が耐へ難き憂を包み溢れ出づる涙をせきとめんとする盡力と相加はりて、一層渠女の苦痛の度を増さしめたり。斯の如き苦しき境遇に、凡そ一時間を過ぎたらん時、^{エルト}准亭郎の使來りぬ。ア

ルベルトは其の手紙を読み了り、平然として其妻に振向き、「渠に拳銃を與へよ、予は善き旅行をなさんことを渠に望むなり。」吁、此の命令は紗娘に取りては雷電の落ちたるが如き思ひあるなり、渠女はハツと思へども、勢ひ拒むべきにあらず、轟く胸を押へ、其席を立上れり、歩もまどろに拳銃の懸り居れる壁に近き、震ひながらの手を以て之を取り下しぬ。吁、淮亭郎の最後の語は何と言ひたりしぞ、彼れの素振と云ひ、彼れの言語と云ひ、思ひ廻せば廻すほど轟々と胸に中る事のみあり。もしや………、斯く思ひ來れば紗娘は得も堪へられず、振向きて其夫を見れば、アルベルトは儼然として其鋭く冷やかなる眼に己の業の遅きを吐り居るが如し。紗娘は事の眞を打明すにも打明されず、シブシブ拳銃の塵を拂ひ落し、悄然として此の危険なる武器を僕に渡せり。渠女は物言はんとすれど喉つまりて聲出です、急に其の仕事を仕舞ひて其室に閉籠り、忍び涙に暮れ居たり。嗚呼、寧ろ一切の事を告げ知らして、アルベルトをして急に淮亭郎の處に赴かしむべきか、されど渠女はよく知れり、アルベルトは決して之に従ふの人に非ず、憐れなる佳人は泣くより外はあらざるなり。

淮亭郎は、紗娘自ら拳銃を渡し、且つ其塵をも拂ひ呉れたるを聞き、欣然として坐に就き、次の手紙を書き初めたり。――

親愛なる紗娘よ、

此の拳銃は一度御身の手にあり、御身は我爲めに其塵を拂ひたり、之れ取りも直さず、天も我企を贖け給へるなり。然り。予は御身の手より我が運命を受らんことは、久來の所願にてありしなり。お、紗娘よ、予は固く信ず、其の終焉の際までも御身を戀ひ慕へる人をば、御身は憎しと思はざるべきを。

夕飯の後、淮亭郎は僕に命じて其革囊を收めしめ、其の身は色々の書類を毀り、隣人より借りたる些細の金錢を返さんとて出で行けり。間もなく歸り來りしが、再び雨を冒して外に出で、夜に入りて家に歸り來り、歸るや否や、復た其筆を執れり。

第六十一翰

親愛なるアルベルトよ。

予は今、此世の名残りなごりに山川原野の最後の眺望をなしたり。いざさらば、之より御身と永久相別るべし。只、願くは予の死後、我が孤獨の母を扶たすけ呉れよ、天は御身に幸すべし。予は吾身に關する一切の事物を整へたり、吾等は再び他の一層幸福なる世界にて相あひま遇ふの期あるべし。

あゝアルベルト、吾罪を赦ゆるせ、予が御身の家内の平和を破りたるを許せ。予は御身の家族の幸福を妨げ、曾て御身と紗チャイロット娘との間に成立なてる信用を破壊せり。然れども予は信ず、我死は、御身の幸福を妨げたるあらゆる障碍物を掃ひ得べきことを。おゝアルベルト、紗娘をば愛し呉れよ、天は御身等兩人に幸すべし。

斯くて渠は其の遺書を封じ、一々其の宛名あてなを記せり。十時頃に至りて、僕に命じて一杯

の火酒おちかを持來らしめ、再び其室に入り來るを禁じたり。

第六十二翰

午後十一時認む

今や萬籟寂然として、我心も極めて静かなり、予は謹で天に向て此の最後の時に於て斯の如き勇氣と確乎たる精神とを與へ給へるを謝す。おゝ紗チャイロット娘、御身の窈窕たる影像は今吾前にあり、予は御身の四邊よこたに在るを見るなり。此期このごに及んでくだしく言ふべき所なし、只一事の御身に要もとむべきあり。〇〇寺の東隅に二本の「ライム」樹あり、そこに予は葬られんことを願ふ。吳々くぐぐも我願ひを容れよ。善良なる基督教徒は、或は渠等の死體の吾傍らにあるを不満に思ふことあらん。若し渠等にして異存を述ぶるあらば、予は大道の傍らに埋葬せられ、墓邊を過ぐる人々の憐れみを受けんと欲す。我が魂魄は永く其邊りに彷徨せん。

予は願ふ。紗チャイロット娘よ、予の今着し居れる衣服の儘にて葬られんことを。何となれば、之れ予が平生御身の面前にて着し慣れたるものなればなり。何人も我カクシを探る勿れ、其中には予が初めて御身の小兒等に繞めぐられ居しを見たる時、御身の着け居たりし水色の流蘇かきの入り居

ればなり。思ふに彼の愛らしき小兒等は、定めて御身の周圍に戯れ居るならん。願くは我爲めに千百の接吻を與へ呉れよ。あゝ紗娘よ、初めて御身を見し時より、予はいかに御身を慕ひしぞ。其時より以來、我心は決して御身を離るゝことあらざりしなり。

拳銃は籠められたり、時計は十二時を報ぜり。紗娘よ、予の氣は確かなり、我心は決して迷はず、いざさらば！

翌朝六時頃、准亭郎の僕は燭を執りて其室に入りしに、其の主人の血に塗れて床上に仆れ居れるを見たり。僕は直ちにアルベルトの處に走れり、紗娘は不意に狼狽しく其の門を叩くを聞き、恐懼の念忽ち其の心頭に浮びたり。渠女はアルベルトを起し、共に立上れり。僕は涙ながらに恐ろしき出來事を告げ知らせぬ。紗娘ははつと計りに氣を失ひて、其夫の足下に仆れ伏しぬ。アルベルトは直ちに衣を着更へ、車を馳せて其家に赴けり。されど種々の手當も最早や無益なりき。其の机の上には「エミリア、ガロッテ」の本一冊開けるまゝに横はれるのみ。

アルベルトの悲歎、紗娘の哀れなる位置等は、今茲に書せんより讀者の想像に一任する方可なるべし。葬儀は嚴格に、而も質朴に行はれたり。其柩には老執事、其の小兒等の伴ひ行けり。相見る人、皆惜しむべき若者の憫れなる最後を悲しまざるはなかりしと云ふ。

(明治二十四年七月廿三日より
二十四年九月三十日まで)

戲化

瀧口入道

明治廿六年十二月廿日
起稿
豫定凡三十回

博文館
春陽堂

第一

やがて來む壽永の秋の哀れ、治承の春の樂みに知る由も無く、六歳の後に昔の夢を辿りて直衣の袖を絞りし人々には、今宵の歡會も中々に忘れぬ思寢の涙なるべし。

驕る平家を盛りの櫻に比べてか、散りての後の哀れは思はず、入道相國が花見の宴とて、六十餘州の春を一夕の臺に集めし都西八條の邸宅。君ならでは人にして人に非ずと唱はれし一門の公達、宗徒の人々は言ふも更なり、華胄攝籙の子弟の、苟も武門の蔭を覆ひに當世の榮華に誇らんずる輩は、今日を晴にと裝飾ひて、綺羅星の如く連りたる有様、燦然として眩き許り、さしも善美を盡せる虹梁鴛瓦の砌も影薄けにぞ見えし。あはれ此程までは殿上の交をだに嫌はれし人の子、家の族、今は紫紵紋綾に禁色を猥にして、をさく傍若無人の振舞あるを見ても、眉を蹙むる人だに絶えて無く、夫れさへあるに衣袍の紋色、烏帽子のため様まで萬六波羅様をまねびて時知り顔なる世は愈、平家の世と覺えたり。

見渡せば正面に唐錦の茵を敷ける上に、沈香の脇息に身を持たせ、解脫同相の三衣の下に

天魔波旬の慾情を去りやらず、一門の榮華を三世の命とせる入道清盛、さても鷹揚に坐せる其の傍には、嫡子小松の内大臣重盛卿、次男中納言宗盛、三位中將知盛を初として、同族の公卿十餘人、殿上三十餘人、其他、衛府諸司數十人、平家の一族を舉げて世には又人無くぞ見られける。時の帝の中宮、後に建禮門院と申せしは、入道が第四の女なりしかば、此夜の盛宴に漏れ給はず、册ける女房曹司は皆々晴の衣裳に綺羅を競ひ、六宮の粉黛何れ劣らず粧を凝らして、花にはあらで得ならぬ匂ひ、そよ吹く風毎に素袍の袖を掠むれば、末座に並み居る若侍等の亂れもせぬ衣髪をつくるふも可笑し。時は是れ陽春三月の暮、青海の簾高く捲き上げて、前に廣庭を眺むる大弘間、咲きも残らず散りも初めず、欄干近く雲かと紛ふ満菜の櫻、今を盛りに匂ふ様に、月さへ懸りて夢の如き圓なる影、朧に照り渡りて、滿庭の風色碧紗に包まれたらん如く、一刻千金も嘗ならず。内には遠侍のあなたより、遙か對屋に沿ふて樓上樓下を照せる銀燭の光、錦繡の戸帳、龍鬢の板疊に輝きて、さしも廣大なる西八條の館に光到らぬ限もなし。あはれ昔に有りきてふ、金谷園裏の春の夕も、よも是れには過ぎじとぞ思はれける。

饗宴の盛大善美を盡せることは言ふも愚なり、庭前には錦の幔幕を張りて舞臺を設け、管絃鼓箏の響は興を助けて短き春の夜の閑くるを知らず、豫て召し置かれたる白拍子の舞もはや終りし頃ほひ、さと帟を裂くが如き四絃一撥の琴の音に連れて、繁絃急管のえらべ洋々として響き亘れば、堂上堂下俄に動搖めきて、『あれこそは隠れもなき四位の少將殿よ』『して此方なる壯年は』『あれこそは小松殿の御内に花と歌はれし重景殿よ』など、女房共の罵り合ふ聲々に、人々等しく樂屋の方を振向けば、右の方より薄紅の素袍に右の袖を肩脱ぎ、螺鈿の細太刀に紺地の水の紋の平緒を下け、白綾の水干、櫻朧黄の衣に山吹色の下裳、背には胡篋を解きて老掛を懸け、露のまゝなる櫻かざして立たれたる四位の少將維盛卿。御年辛く二十二、青絲の髪、紅玉の膚、平門第一の美男とて、かざす櫻も色失せて、何れを花、何れを人と分たざりけり。左の方よりは足助の二郎重景とて、小松殿恩顧の侍なるが、維盛卿より弱きこと二歳にて、今年方に二十の壯年、上下同じ素絹の水干の下に燃ゆるが如き緋の下袍を見せ、厚塗の立烏帽子に平塵の細鞆なるを佩き、袂豊に舞ひ出でたる有様、宛然一幅の畫圖とも見るべかりけり。二人共に何れ劣らぬ優美の姿、適怨清和、曲に随つて一絲も亂れ

ぬ歩武の節、首尾能く青海波をぞ舞ひ納めける。満座の人々感に堪へざるは無く、中宮よりは殊に女房を便に纏頭の御衣を懸けられければ、二人は面目身に餘りて退り出でぬ。跡にて口善悪なき女房共は、少將殿こそ深山木の中の楊梅、足助殿こそ枯野の小松、何れ花も實も有る武士よなど言ひ合へりける。知るも知らぬも羨まぬは無きに、父なる卿の眼前に此を見て如何計り嬉しく思ひ給ふらんと、人々上座の方を打ち見やれば、入道相國の然も喜ばしけるなる笑顔に引換へて、小松殿は差し俯きて人に面を見らるゝを懶けに見え給ふぞ訝しき。

第二

西八條殿の搖ぐ計りの喝采を跡にして、維盛重景の退り出でし後に一個の少女こそ顯はれたれ。是ぞ此夜の舞の納めと聞えければ、人々眸を凝らして之を見れば、年齒は十六七、精好の緋の袴ふみまき、柳裏の五衣打ち重ね、丈にも餘る緑の黒髪後にゆりかけたる様は、舞子白拍子の媚態あるには似て、閑雅に蕩長けて見えにける。一曲舞ひ納む春鶯囀、細きは珊瑚を碎く一雨の曲、風に靡けるさゝがにの絲軽く、太きは瀬津瀬の鳴り渡る千萬の聲、落葉

の蔭に村雨の響重し。綾羅の袂ゆたかに翻るは花に休める女蝶の翼か、蓮歩の節急なるは蜻蛉の水に點するに似たり。折らば落ちん萩の露、拾はば消えん玉篠の、あはれにも亦婉やかなる其の姿。見る人憐然として酔へるが如く、布衣に立帽子せる若殿原は、あはれ何處の誰が女子ぞ、花薫り月霞む宵の手枕に、君が夢路に入らん人こそ世にも果報なる人なれなど、袖袂引合ひてのゝしり合へるぞ笑止なる。

榮華の夢に昔を忘れ、細太刀の輕さに風雅の銘を打ちたる六波羅武士の腸をば一指の舞に溶したる彼の少女の、満座の秋波に送られて退り出でしを此夜の宴の終として、人々思ひ思ひに退出し、中宮もやがて還御あり。跡には春の夜の朧月、残り惜けに欄干の邊に跼蹐ふも長閑けしや。

此夜、三條大路を左に、御所の裏手の御溝端を辿り行く骨格逞しき一個の武士あり。月を負ひて其の顔は定かならねども、立烏帽子に稜高の布衣を着け、蛭巻の太刀の柄太きを横へたる夜目にも爽かなる出立は、何れ六波羅わたりの内人と知られたり。御溝を挟んで今を盛りなる櫻の色を見て欲しけなるに目もかけず、物思はしけに小手又きて、少しくうなだれたる

頭の重けに見ゆるは、太息吐く爲にやあらん。扱ても春の夜の月花に換へて何の哀れぞ。西八條の御宴より歸り途なる侍の一群二群、舞の評など樂しげに誰憚らず罵り合ひて、果は高笑ひして打ち興するを、件の侍は折々耳側で、時に冷やかに打笑む様、仔細ありけなり。中宮の御所をはや過ぎて、垣越の松影月を漏らさで墨の如く暗き邊に至りて、不圖首を擧げて暫し四邊を眺めしが、俄に心付きし如く早足に元來し道に戻りける。西八條より還御せられたる中宮の御輿、今しも宮門を入りしを見、最と本意無けに跡見送りて門前に佇立みける。後れ馳せの老女訝しげに己れが容子を打ち睨り居るに心付き、急ぎ立去らんとせしが、何思ひけん、つと振向て、件の老女を呼止めぬ。

何の御用と問はれて稍躊躇ひしが、『今宵の御宴の終に春鶯囀を舞はれし女子は何れ中宮の御内ならんと見受けしが、名は何と言はるゝや』。老女は男の容姿を暫し眺め居たりしが微笑みながら、『扱も笑止の事も有るものかな、西八條を出づる時、色清けなる人の妾を捉へて同じ事を問はれしが、あれは横笛とて近き頃御室の郷より曹司に見えし者なれば、知る人無きも理にこそ、御身は名を聞いて何に給ふ』。男はハツと顔赤らめて、『勝れて舞の上手なれば』。答ふる言葉聞きも了らで、老女はホ、と意味ありけなる笑を残して門内に走り入りぬ。

「横笛、横笛」、件の武士は幾度か獨語ちながら、徐に元來し方に歸り行きぬ。霞の底に響く法性寺の鐘の聲初更を告ぐる頃にやあらん。御溝の那方に長く曳ける我が影に駭きて、傾く月を見返る男、眉太く鼻隆く、一見凛々しき勇士の相貌、月に笑めるか、花に咲ふか、あれは臉の邊に一掬の微笑を帯びぬ。

第三

當時小松殿の侍に齋藤瀧口時頼と云ふ武士ありけり。父は左衛門茂頼とて齡古稀に餘れる老武者にて、壯年の頃より數ヶ所の戰場にて類稀なる手柄を顯はしが、今は年老たれば其子の行末を頼りに殘年を樂みける。小松殿は其功を賞で給ひ、時頼を瀧口の侍に取立て、數多の侍の中に殊に恩顧を給はりける。

時頼是の時年二十三、性潤達にして身の丈六尺に近く、筋骨飽くまで逞しく、早く母に別れ、武骨一邊の父の膝下に養はれしかば、朝夕耳にせしものは名ある武士が先陣拔懸けの譽

ある功名談にあらざれば弓箭甲冑の故實、警垂れし幼時より劍の光、弦の響の裡に人と爲りて、浮きたる世の雜事は刀の柄の塵程も知らず、美田の源次が堀川の功名に現を抜かして赤檜の木太刀を振り舞はせし十二三の昔より、空脇撫でて長劍の輕きを叩つ二十三年の春の今日まで、世に畏ろしきものを見ず、出入る息を除きては、六尺の體、何處を膽と分くべくも見えず、實に保平の昔を其儘の六波羅武士の摸型なりけり。然れば小松殿も時頼を末頼母しきものに思ひ、行末には御子維盛卿の附人になさばやと常々目を懸けられ、左衛門が伺候の折々に『茂頼、其方は善き悴を持ちて仕合者ぞ』と仰せらるゝを、七十の老父、曲りし背も反らん計りにぞ嬉しがりける。

時は治承の春、世は平家の盛、そも天喜、康平以來九十年の春秋、都も鄙も打ち靡きし源氏の白旗も、保元、平治の二度の戰を都の名残に、脆くも武門の衰れを東海の隅に留めしよき。六十餘州に到らぬ隈無き平家の權勢、驕るもの久しからずとは驕れるもの如何で知るべき。養和の秋、富士河の水禽も、まだ一年の來ぬ夢なれば、一門の公卿殿上人は言はずもあれ、上下の武士何時しか文弱の流に染みて、嘗て丈夫の譽に見せし向ふ疵も、いつの間にか

水鬢の陰に掩はれて、重きを誇りし圓打の野太刀も、何時しか銀造の細鞘に反を打たせ、清らなる布衣の下に練貫の袖さへ見ゆるに、弓矢持つべき手に管絃の調とは、言ふもうたてき事なりけり。

時頼世の有様を観て熟思ふ様、扱も心得ぬ六波羅武士が舉動かな、父なる人、祖父なる人は、昔知らぬ若殿原に行末短き榮耀の夢を食らせんとて其の膏血はよも濺がじ。萬一有事の曉には、絲竹に鍛へし腕、白金造の打物は何程の用にか立つべき。射向の袖を却て覆ひに捨鞭のみ烈しく打ちて、笑ひを敵に残すは眼のあたり見るが如し。君の御馬前に天晴勇士の名を昭して討死すべき武士が、何處に二つの命ありて、歌舞優樂の遊に荒める所存の程こそ知られぬ。——弓矢の外には武士の住むべき世有りとも思はぬ一徹の時頼には、兎角愷はしく、苦々しき事のみ耳目に觸れて、平和の世の中面白からず、あはれ何處にても一戰の起れかし、いでや二十餘年の風雨に鍛へし我が技倆を顯はして、日頃我れを武骨者と嘲りし優長武士に一泡吹かせんずと思ひけり。衆人醉へる中に獨り醒むる者は容れられず、斯かる氣質なれば時頼は自から儕輩に疎せられ、瀧口時頼とは無骨者の異名よなど嘲り合ひて、時流

外れに粗大なる布衣を着て、鐵卷の丸轡を鷓鴣に横へし後姿を、蔭にて指し笑ふ者も少からざりし。

西八條の花見の宴に時頼も連りけり。其夜更闌けて家に歸り、其の翌朝は常に似ず朝日影窓に差込む頃やうやく臥床を出でしが、顔の色少しく蒼味を帯びたり、終夜眠らでありしにや。

此夜、御所の溝端に人跡絶えしころ、中宮の御殿の前に月を負ひて歩むは、紛ふ方なく先の夜に老女を捉へて横笛が名を尋ねし武士なり。物思はしげに御門の邊を行きつ戻りつ、月の光に振向ける顔見れば、まさしく齋藤瀧口時頼なりけり。

第四

物の哀れも是れよりぞ知る、戀ほど世に怪しきものはあらじ。稽古の窓に向つて三諦止觀の月を楽しめる身も、一朝折るかへす花染の香に幾年の行業を捨てし人、百夜の榻の端書に

つれなき君を怨みわびて、亂れ苦しき忍草の露と消えにし人、さては相見ての後のたゞの短きに戀ひ悲しみし永の月日を恨みて三衣一鉢に空なる情を觀ぜし人、惟へば孰れか戀の奴に非ざるべき。戀や、秋萩の葉末に置ける露のごと、空なれども、中に寫せる月影は圓なる望とも見られぬべく、今の憂身をつらしと聊てども、戀せぬ前の越方は何を樂みに暮らしけんと思へば、涙は此身の命なりけり。夕旦の鐘の聲も餘所ならぬ哀れに響く今日は、過ぎし春秋の今更心なきに驚かれ、鳥の聲、虫の音にも心何となう動きて、我にもあらで情の外に行末もなし。戀せる今を迷と觀れば、悟れる昔の慕ふべくも思はれず、悟れる今を戀と觀れば、昔の迷こそ中々に樂しけれ。戀程世に訝しきものはあらじ。そも人、何を望み何を目的に渡りぐるしき戀路を辿るぞ。我も自ら知らず、只、臙けながら夢と現の境を歩む身に、ましてや何れを戀の始終と思ひ別たんや。そも戀てふもの、何こより來り何こをさして去る、人の心の隈は映すべき鏡なければ何れ思案の外なんめり。

いかなれば齋藤瀧口、今更武者の銘打つたる鐵卷をよそにし、負ふにやさしき横笛の名に笑める。いかなれば時頼、常にもあらで夜を冒して中宮の御所には忍べる。吁々いつしか

戀の淵に落ちけるなり。

西八條の花見の席に中宮の曹司横笛を一目見て時頼は、世には斯かる氣高き美しき女子も有るもの哉と心竊に駭きしが、雲を過め雲を廻す妙なる舞の手振を見もて行くうち、醜怪しう轟き、心何となく安からざる如く、廿三年の今まで絶えて覺なき異様の感情雲の如く湧き出でて、例へば渚を閉ぢし池の氷の春風に溶けたらんが如く、若しくは満身の力をはりつめし手足の節々一時に緩みしが如く、茫然として行衛も知らぬ通路を我ながら踏み迷へる思して、果は舞終り樂收まりしにも心付かず、聽て席を退り出でて何處ともなく出で行きしが、あはれ横笛とは時頼其夜初めて覺えし女子の名なりけり。

日來快調にして物に鬱する事などの夢にも無かりし時頼の氣風何時しか變りて、憂はしけに思ひ煩ふ朝夕の様唯ならず、紅色を帯びしつや／＼しき頬の色少しく蒼ざめて、常にも似て物言ふ事も稀になり、太息の數のみぞ唯、増さりける。果は滯羽の厚鬢に水櫛當て、箚長の大束に今様の大紋の布衣は平生の氣象に似もやらずと、時頼を知れる人、訝しく思はぬは無かりけり。

第五

打つて變りし瀧口が今日此頃の有様に、あれ見よ、當世嫌ひの武骨者も一度は折らねばならぬ我慢なるに、笑止や日頃吾等を尻目に懸けて輕薄武士と言はぬ計りの顔、今更何處に下けて吾等に對ひ得るなど、後指さして嘲り笑ふものあれども、瀧口少しも意に介せざるが如く、應對等は常の如く振舞ひけり。されど自慢の頬鬚搔撫する隙もなく、青黛の跡絶えず鮮かにして、萌黄の狩衣に摺皮の蘭草履など、よろづ派手やかなる出立は人目に夫と紛ふべくもあらず。顔容さへ稍、瘵れて、起居も懶きがごとく見ゆれども、人に向つて氣色の勝れざるを啣し事もなく、偶、病など無きやと問ふ人あれば、却つて意外の面地して、常にも増して健かなりと答へけり。

皆是れ戀の業なりとは、哀れや時頼未だ夢にも心づかず、我ともなく人ともあらで只、思ひ煩へるのみ。思ひ煩へる事さへも心自ら知らず、例へば夢の中に伏床を抜け出でて終、夜山の巔、水の涯を迷ひつくしたらん人こそ、さながら瀧口が今の有様に似たりとも見るべし

れ。

人にも我にも行衛知れざる戀の夢路をば、瀧口何處のはてまで辿りけん、夕とも言はず、曉とも言はず、屋敷を出でて行先は己れならで知る人もなく、只門出の勢ひに引きかへて、戻足の打ち齧れたる様、さすがに遠路の勞とも思はれず。一月餘も過ぎて其年の春も暮れ、青葉の影に時鳥の初聲聞く夏の初めとなりたれども、かゝる有様の儉まる色だに見えず、はては十幾年の間、朝夕樂しみし弓馬の稽古さへ自ら怠り勝になりて、胴丸に積もる埃の堆きに目もかけず、名に負へる鐵卷は高く長押しに掛けられて、螺鈿の櫻を散らせる黒鞘に摺紋の鞘巻指し添へたる立姿は、若し我ならざりせば一月前の時頼、唾も吐きかねざる花奢の風俗なりし。

されば變り果てし容姿に慣れて、笑ひ譏る人も漸く少くなりし頃、蟬聲喧しき夏の暮にもなりけん。瀧口が顔愈、やつれ、頬肉は目立つまでに落ちて眉のみ秀で、凄きほど色蒼白みて濃かなる双の鬢のみぞ愈、其の澤を増しける。氣向かねばとて、病と稱して小松殿が熊野參籠の伴にも立たず、動もすれば、己が室に閉籠りて、夜更くるまで寢もやらず、日頃は絶えて

用なき机に向ひ、一穗の燈挑けて怪しげなる薄色の折紙延べ擴げ、命毛の細々と認むる小筆の運び絶間なく、巻いてはかへす思案の胸に、果は太息と共に封じ納むる文の數々、燈の光に宛名を見れば、薄墨の色の哀れを籠めて、何時の間に習ひけん、貫之流の流れ文字に「横笛さま」。

世に艶かしき文てふものを初めて我が思ふ人に送りし時は、心のみを頼みに安からぬ日を覺束なくも暮らせしが、籬に觸るゝ夕風のそよとの頼だになし。前もなき只の一度に人の誠のいかで知らるべきと、更に心を籠めて寄する言の葉も亦仇し矢の返す響も無し。心せはしき三度五度、答なきほど迷ひは愈、深み、氣は愈、狂ひ、十度、二十度、哀れ六尺の丈夫が二つなき魂をこめし千束なす文は、底なき谷に投げたらん礫の如く、只の一度の返り言もなく、天の戸渡る梶の葉に思ふこと書く頃も過ぎ、何時しか秋風の哀れを送る夕まぐれ、露を命の蟲の音の葉末にすだく聲悲し。

第六

思へば我ららで戀路の闇に迷ひし瀧口こそ哀れなれ。鳥部野の煙絶ゆる時なく、仇し野の露置くにひまなき、まゝならぬ世の習はしに漏るゝ我とは思はねども、相見ての利那に百年の契をこむる頼もしき例なきにもあらぬ世の中に、いかなれば我のみは、天の羽衣撫で盡すらんほど永き悲しみに、只、一時の望みだに得協はざる。思へば無情の横笛や、過ぎにし春のこのかた、書き連ねたる百千の文に、今は我には言残せる誠も無し、良し有ればとて此上短き言の葉に、胸にさへ餘る長き思を寄せん術やある。情なの横笛や、よしや送りし文は拙くとも、變らぬ赤心は此の春秋の永きにても知れ。一夜の松風に夢さめて、思寂しき衾の中に、我ありし事、薄が末の露程も思ひ出ださんには、など一言の哀れを返さぬ事やあるべき。思へばく心なの横笛や。

然はさりながら、他し人の心、我が誠もて規るべきに非ず。路傍の柳は折る人の心に任せ、野路の花は摘む主常ならず、數多き女房曹司の中に、いはば萍の浮世の風に任する一女子の身、今日は何れの汀に留まりて、明日は何處の岸に吹かれやせん。千束なす我が文は讀みも了らで捨てやられ、さそふ秋風に桐一葉の哀れを残さざらんも知れず。況てやあでやかなる

彼れが顔は、浮きたる色を愛づる世の中に、そも幾その人を惱しけん。かの宵にすら、かの老女を捉へて色清けなる人の、嫉ましや、早や彼れが名を尋ねしとさへ言へば、思ひを寄するもの我のみにては無かりけり。よしや他にはあらぬ赤心を寄するとも、風や何處と聞き流さん。浮きたる都の艶女に二つなき心盡しのかすくは我身ながら恥かしや、アノ心なき人に心して我のみ迷ひし愚さよ。

待てまばし、然るにても立波荒き大海の下にも人知らぬ眞珠の光あり、外には見えぬ木影にも情の露の宿する例。まゝならぬ世の習はしは、善きにつけ、悪しきにつけ、人毎に他には測られぬ憂はあるものぞかし。あはれ後とも言はず今日の今、我が此思ひを其儘に、いづれいかなる由ありて、我が思ふ人の悲しみ居らざる事を誰か知るや。想へば、那の氣高き腐たけたる横笛を萍の浮きたる艶女とは僻める我が心の誤ならんも知れず。さなり、我が心の誤ならんも知れず。鳴く蟬よりも鳴かぬ螢の身を焦すもあるに、聲なき裂れの深さに較ぶれば、仇浪立てる此胸の淺瀬は物の數ならず。そもや心なき草も春に遇へば笑ひ、情なき蟲も秋に感ずれば泣く。血にこそ染まね、千束なす紅葉重の燃ゆる計りの我が思ひに、薄墨の跡だに得

還さぬ人の心の有耶無耶は、誰か測り、誰か知る。然なり、情なしと見、心なしと思ひしは僻める我身の誤りなりけり。然るにても——

灌口が胸は麻の如く亂れ、とつおいつ、或は恨み、或は疑ひ、或は惑ひ、或は懣め、去りては來り、往きては還り、念々不斷の妄想、流は千々に異れども、落行く末はいづれ同じ戀慕の淵。迷の羈絆目に見えねば、勇士の刃も切らんに術なく、あはれや、鬼も挫がんず六波羅一の剛の者、何時の間にか戀の奴となりすましぬ。

一夜時頼、更闌けて尙ほ眠りもせず、意中の幻影を追ひながら、爲す事も無く茫然として机に憑り居しが、越し方、行末の事、端なく胸に浮び、今の我身の有様に引き比べて、思はず深々と太息つきしが、何思ひけん、一聲高く胸を叩いて躍り上り、「嗚呼過てりく」。

第七

歌物語に何の癡言と聞き流せし戀てふ魔に、さては吾れ疾より魅せられしかと、初めて悟りし今の刹那に、灌口が心は如何なりしぞ。「嗚呼過てり」とは何より先に口を衝いて覺え

ず出でし意料無限の一語、襟元に雪水を浴びし如く、六尺の總身ふるくと震ひ上りて、胸轟き、息せはしく、「む、」とばかりに暫時は空を睨んで無言の體。やがて眼を閉ぢてつくづく過越方を想ひ返せば、哀れにもつらかりし思ひの数々、さながら世を隔てたらん如く、今更明かし暮らせし朝夕の如何にしてと驚かれぬる計り。夢かと思へば、現せ身の陽炎の影とも消えやらず、現かと思れば、夢よりも尙ほ淡き此の春秋の經過、例へば永の病に本性を失ひし人の、やうやく我に還りしが如く、灌口は只恍惚として呆るゝ計りなり。

「嗚呼過てりく」、弓矢の家に生まれし身の、天晴巧名手柄して、勇士の譽を後世に残すこそ此世に於ける本懐なれ。何事ぞ、眞の武士の唇頭に上ほすも忌はしき一女子の色に迷ふて可惜月日を夢現の境に過ごさんとは。あはれ南無八幡大菩薩も照覽あれ、灌口時頼が武士の魂の曇なき證據、眞此の通り」と、床なる一刀スラリと抜きて、青燈の光に差し付くれば、爛々たる氷の刃に水も滴らんす無反の切先、鐔を銜んで紫雲の如く立上る焼刃の匂ひ、目も覺むる計り。打ち見やりて時頼莞爾と打ち笑み、二振三振、不圖平見に映る我が顔見れば、こはいかに、肉落ち色蒼白く、ありし昔に似もつかぬ悲慘の容貌。打ち駭きて、ためつ、す

がめつ、見れば見るほど變り果てし面影は我ならで外になし。扱も瘠れたるかな、愧しや我
 を知る人は斯かる容を何とか見けん——、そも斯くまで骨身をいためし哀れを思へば、深
 さは我ながら程知らず、是れも誰が爲め、思へば無情の人心かな。
 碎けよと握り詰めたる柄も氣も何時しか緩みて、臥蠶の太眉閃々と動きて、覺えず「あゝ」
 と太息つけば、霞む刀に心も曇り、映るは我面ならで、烟の如き横笛が舞姿。是れはとばか
 り眼を閉ぢ、氣を取り直し、鏗音高く刃を鞘に納むれば、跡には燈の影ほの暗く、障子に映
 る影さびし。

嗚呼々々、六尺の體に人並みの膽は有りながら、さりとは腑甲斐なき我身かな。影も形も
 なき妄念に惱まされて、ちらで過ぎし日はまだしもなれ、迷ひの夢の醒め果てし今はの際に、
 めゝしき未練は、あはれ武士ぞと言ひ得べきか。輕しと仰ちし三尺二寸、双腕かけて疊みし
 はそも何の爲の極意なりしぞ。祖先の苦勞を忘れて風流三昧に現を抜かす當世武士を尻目
 かけし、半歳前の我は今何處にあるぞ。武者者と人の笑ふを心に誇りし齋藤時頼に、あはれ
 今無念の涙は一滴も残らずや。そもや瀧口が此身は空蟬のもぬけの殻にて、腐れし迄も昔の

膽の一片も残らぬか。

世に畏るべき敵に遇はざりし瀧口も、戀てふ魔神には引く弓も無きに呆れはてぬ。無念と
 思へば心愈亂れ、心愈亂るゝに隨れて、亂脈打てる胸の中に迷ひの雲は愈擴がり、果は
 狂氣の如くいらちて、時ならぬ鳴弦の響、劍撃の聲に胸中の渾沌を清さんと務むれども、心弦
 にあらざれば見れども見えす、聞けども聞えず、命の蔭に踳踳る一念の戀は、玉の緒ならで
 断たん術もなし。

誠や、戀に迷へる者は猶ほ底なき泥中に陥れるが如し。一寸上に浮ばんとするは、一寸下
 に沈むなり、一尺岸に上らんとするは、一尺底に下るなり、所詮自ら掘れる墳墓に埋るゝ運
 命は、悶え苦しみて些の益もなし。されば悟れるとは己れが迷を知ることにして、それを脱せ
 るの謂にはあらず。哀れ、戀の鳩毒を渣も残さず飲み干せる瀧口は、只、坐して致命の時を
 待つの外なからん。

消えわびん露の命を、何にかけてや繋ぐらんと思ひきや、四五日経て瀧口が顔に憂の色漸く去りて、今までの如く物につけ事に觸れ、思ひ煩ふ様も見えず、胸の嵐はちらねども、表面は横の梢のさらとも鳴らさず、何者か失意の戀にかへて其心を慰むるものあればならん。

一日、瀧口は父なる左衛門に向ひ、「父上に事改めて御願ひ致し度き一義あり」。左衛門「何事ぞ」と問へば、「斯かる事、我口より申すは如何なものなれども、二十を越えてはや三歳にもなりたれば、家に洒掃の妻なくては萬に事缺けて快からず、幸ひ時頼見定め置きし女子有れば、父上より改めて婚禮を御取計らひ下されたく、願ひと言ふは此事に候。人傳てに名を聞きてさへ愧らふべき初妻が事、顔赤らめせず、落付き拂ひし語の言ひ様、仔細ありけなり。左衛門笑ひながら、「これは異な願ひを聞くものかな、晚かれ早かれ、いづれ持たねばならぬ妻なれば、相應はしき縁もあらばと、老父も疾くより心懸け居りしぞ。シテ其方が見定め置きし女子とは、何れの御内か、但しは御一門にてもあるや、どうじや」。『小子が申せし女子は、然る門地ある者ならず』。「然らばいかなる身分の者ぞ、衛府附の侍にてもあるか」。『否、さるものには候はず、御所の曹司に横笛と申すもの、聞けば御室わたりの郷家の

娘なりとの事』。

瀧口が顔は少しく青ざめて、思ひ定めし眼の色徒ならず。父は暫し語なく俯ける我子の顔を凝視め居しが、『時頼、そは正氣の言葉か』。『小子が一生の願ひ、神以て許りならず』。左衛門は両手を膝に置き直して聲勵まし、『やよ時頼、言ふまでもなき事なれど、婚姻は一生の大事と言ふこと、其方知らぬ事はあるまじ。世にも人にも知られたる然るべき人の娘を嫁子にもなし、其方が出世をも心安うせんと、日頃より心を用ゆる父を其方は何と見つるぞ。よしなき者に心を懸けて、家の譽をも顧みぬほど、無分別の其方にてはなかりしに、扱は豫てよりの人の噂に違はず、横笛とやらの色に迷ひしよな』。「否、小子こと色に迷はず、香にも酔はず、神以て變でもなく浮氣でもなし、只、少しく心に誓ひし仔細の候へば』。

左衛門は少しく色を起し、『黙れ時頼、父の耳目を欺かん其の語、先頃其方が儕輩の足助の二郎殿、年若きにも似ず、其方が横笛に想ひを懸け居ること、後の爲ならずと懇に潛かに我に告げ呉れしが、其方に限りて浮きたる事のあるべきとも思はれねば心も措かで過ぎ來りしが、思へば父が庇蔭目の過ちなりし。神以て戀にあらずとは何處まで此父を袖になさんず

る心ぞ、不埒者め。話にも聞きつらん、祖先兵衛直頼殿、餘五將軍に仕へて抜群の譽を顯はせしこのかた、弓矢の前には後れを取らぬ齋藤の血統に、女色に魂を奪はれし未練者は其方が初めぞ。それにも武門の恥と心付かぬか、弓矢の手前に面目なしとは思はずか。同じくば名ある武士の末にてもあらばいざえらす、素性もなき土民郷家の娘に、茂頼斯くて在らん内は、齋藤の門をくゞらせん事思ひも寄らず。』

老の一徹短慮に息巻き荒く罵れば、時頼は默然として只、差俯けるのみ。やゝありて、左衛門は少しく面を和らけて、『いかに時頼、人若き間は皆過ちはあるものぞ、萌え出づる時の美はしさに、霜枯の衰れは見えねども、何れか秋に遭はで果つべき。花の盛りは僅に三日にして、跡の青葉は何れも色同じ、あでやかなる女子の色も十年はよも續かぬものぞ、老いての後に願れば、色めづる若き時の心の我ながら解らぬほど癡けたるものなるぞ。過ちは改むるに憚る勿れとは古哲の金言、父が言葉腑に落ちたるか、横笛が事思ひ切りたるか。時頼、返事のなきは不承知か。』

今まで眼を閉ぢて默然たりし瀧口は、やうやく首を擡げて父が顔を見上げしが、兩眼は潤ひて無限の情を盡へ、滿面に顯はせる悲哀の裡に搖がぬ決心を示し、徐ろに兩手をつきて、『一道理ある御仰、横笛が事、只今限り刀にかけて思ひ切て候、其の代りに時頼が又の願ひ、御間届下さるべきや。』左衛門は然もありなんと打黙頭き、『それでこそ茂頼が忤、早速の分別、父も安堵したるぞ、此上の願とは何事ぞ。』『今日より永のおん暇を給はりたし。』言ひ終るや、堰止めかねし溜涙、はらくと流しぬ。

第九

天にも地にも意外の一言に、左衛門呆れて口も開かず、只、其子の顔色打ち啼れば、瀧口は徐ろに涙を拂ひ、『思ひの外なる御驚きに定めて浮の空とも思されんが、此願こそは時頼が此座の出来心にては露候はず、斯かる曉にはと豫てより思決めし事に候。事の仔細を申さば、只、御心に違ふのみなるべけれども、申さざれば猶ほ以て亂心の沙汰とも思召されん。申すも思はゆけなる横笛が事、まこと言ひ交せし事だに無けれども、我のみの哀れは中々に深さの程こそ知れね、つれなき人の心に猶更ら狂ふ心の駒を繋がむ手綱もなく、此の春秋は我身な

から辛かりし。神かけて戀に非ず、迷に非ずと我は思へども、人には浮氣とや見えもしけん。唯、劔に切らん影もなく、弓もて射ん的なき心の敵に向ひて、そも幾その苦戦をなせしやは、父上、此顔容のやつれたるにて御推量下されたし。時頼が六尺の體によくも擔ひしと自らすら駭く計りなる積りくし憂事の數、我ならで外に知る人もなく、只、戀の奴よ、心弱き者よと世上の人に歌はれん残念さ、誰れに向つて推量あれとも言はん人なきこそ、返す返すも口惜しけれ。此儘の身にては、どの顔下けて武士よと人に呼ばるべき、腐れし心を抱きて、外見ばかりの伊達に指さん事、兩刀の曇なき手前に心とがめて我から忍びず、只、此上は横笛に表向き婚姻を申入るゝ外なし、されどつれなき人心、今更歸かん様もなく、且や素性賤しき女子なれば、物堅き父上の御容しなき事元より覺悟候ひしが、只、最後の思出にお耳を汚したるまでなりき。所詮天魔に魅入れし我身の定業と思へば、心を煩はすもの更に無し。今は小子が胸には横笛がつれなき心も残らず、月日と共に積りし哀れも宿さず、人の恨みも我が愛しみも洗ひし如く痕なけれども、残るは只、此世の無常にして頼み少きこと、秋風の身にまみくると感じて有漏の身の換へ難き恨み、今更骨身に徹へ候。惟れば誰が保ちけん東父

西母が命、誰が嘗めたりし不老不死の藥、電光の裏に假の生を寄せて、妄念の間に露の命を苦しむ、愚なりし我身なりけり。横笛が事、御容しなきこそ小子に取りては此上もなき善知識。今日を限りに世を厭ひて誠の道に入り、墨染の衣に一生を送りたき小子が決心。二十餘年の御恩の程は申すも愚なれども、何れ遁れ得ぬ因果の道と御諦ありて、永の御暇を給はらんこと、時頼が今生の願に候。胸一杯の悲しみに語さへ震へ、語り了ると其儘、齒根喰ひ絞りて、詰と耐ゆる斷腸の思ひ、勇士の愁嘆、流石にめ、しからず。

過ぎ越せし六十餘年の春秋、武門の外を人の住むべき世とも思はず、涙は無念の時出づるものぞと思ひし左衛門が耳に、哀れに優しき瀧口が述懐の、何として解かるべき。歌詠む人の方便とのみ思ひ居し戀に惱みしと言ふさへあるに、木の端とのみ嘲りし世捨人が現在我子の願ならんとは、左衛門如何でか驚かざるを得べき。夢かとばかり、一度は呆れ、一度は怒り、老の兩眼に溢るゝばかりの涙を浮べ、「やよ悴、今言ひしは慥に齋藤時頼が眞の言葉か、幼少より筋骨人に勝れて逞しく、膽力さへ座りたる其方、行末の出世の程も頼母しく、我が白髮首の生甲斐あらん日をば、指折りながら待詫び居たるには引換へて、今と言ふ今、老の

眼に思ひも寄らぬ恥辱を見るものかな。奇怪とや言はん、不思議とや言はん。慈悲深き小松殿が、左衛門は善き子を持たれし、と我を見給ふ度毎のお言葉を常々人に誇りし我れ、今更乞食坊主の悴を持ちて、いづこに人に合する二つの顔ありと思ふてか。やよ、時頼、ヨツク聞け、他は言はず、先祖代々よりの齋藤一家が被りし平家の御恩はそも幾何なりと思へるぞ。殊に弱年の其方を那程に目をかけ給ふ小松殿の御恩に對しても、よし如何に堪へ難き理由あればとて、斯かる方外の事、言はれ得る義理か。弓矢の上こそ武士の譽はあれ、兩刀捨て、世を捨て、悟り顔なる悴を左衛門は持たざるぞ。上氣の沙汰ならば容赦もせん、性根を据ゑて、不所存のほど過つたと言はぬかッ。兩の拳を握りて、怒りの眼は鋭けれども、恩愛の涙は忍ばれず、双頬傳ふてはふり落つるを拭ひもやらず、一息つよく、「どうぢや、時頼、返答せぬかッ」。

第十

深く思ひ決めし瀧口が一念は石にあらねば轉ばすべくもあらざれども、忠と孝との二道に

恩義をからみし父の言葉。思ひ設けし事ながら、今更に胸も千切る、ばかり、聲も涙に曇りて、見上ぐる父の顔も定かならず、「仰せらるゝ事、時頼いかで理と承らざるべき。小松殿の御事は云ふも更なり、年寄り給ひたる父上に、斯かる嘆を見せ參らす小子が胸の苦しさは喩ふるに物も無けれども、所詮浮世と觀じては、一切の望に離れし我心、今は返さん術もなし、忠孝の道、君父の恩、時頼何として疎かに存じ候べき。然りながら、一度人身を失へば萬劫還らずとかや、世を換へ生を移しても、生死妄念を離れざる身を思へば、悟の日の晩かりしに心急かれて、世は是れ迄とこそ思はれ候へ。只、是れまで思ひ決めしまで重ねし幾重の思案をば、御知りなき父上には、定めて若氣の短慮とも、當座の上氣とも聞かれつらんこそ口惜しけれ、言はば一生の浮沈に關る大事、時頼不肖ながらいかでか等閑に思ひ候べき。詮するに自他の悲しみを此胸一つに收め置いて、亡らん後の世まで知る人もなき身の果敢なさ、今更是非もなし。父上、願ふは此世の縁を是限りに、時頼が身は二十三年の秋を一二期に病の爲に敢なくなりしとも御諦め下されかし。不孝の悲しみは胸一つには堪へざれども、御訖申さんに辭もなし、只々御赦しを乞ふ計りに候」。

濺ぐ涙に哀れを籠めても、飽くまで世を背に見たる我子の決心、左衛門今は夢とも上氣とも思はれず、愛しと思ふほど彌増す憎さ。慈悲と恩愛に燃ゆる怒の焔に滿面朱を濺けるが如く、張り裂く計りの胸の思ひに言葉さへ絶えん、に「イヤ言はして置けば父をさし置きて我れ面白の勝手の理窟、左衛門聞く耳持たぬぞ。無常因果と、世にも癡けたる乞食坊主のえせ假聲、武士がどの口もて言ひ得る語ぞ。弓矢とる身に何の無常、何の因果。——時頼、善く聞け、畜類の狗さへ、一日の飼養に三年の恩を知ると云ふに非ずや。句へば立て、立てば歩めと、我が年の積るをも思はで育て上げし廿三年の親の辛苦、さては重代相恩の主君にも見換へんもの、世に有りと思ふ其方は、犬にも劣りしとは知らざるか。不忠とも、不孝とも、亂心とも、狂氣とも、言はん様なき不所存者、左衛門が眼には、我子の容に化けし悪魔とより外は見えざるぞ、それにても見事其處に居直りて、齋藤左衛門茂頼が一子ぞと言ひ得るか、ならば御先祖の御名、立派に申して見よ。其方より暇乞ふ迄もなし、人の數にも入らぬ木の端は、勿論親でもなく、子でもなし。其一念の直らぬ間は、時頼、シ、七生までの義絶ぞ。」言ひ捨てて、襖立切り、疊觸りも荒々しく、ツと奥に入りし左衛門。跡見送らんとせず、時頼

は両手をはたとつきて、兩眼の涙ながら雨の如し。

外には鳥の聲うら悲しく、枯れもせぬに散る青葉二つ三つ、無情の嵐に揺落されて窓打つ音さへ恨めしげなる。——あはれ、世は汝のみの浮世かは。

第十一

一門の采邑、六十餘州の半を越え、公卿殿上人三十餘人、諸司衛府を合せて門下郎黨の大官榮職を恣にするもの其の數を知らず、けに平家の世は今を盛りとぞ見えにける。新大納言が隠謀脆くも敗れて、身は西海の隅に死し、丹波の少將成經、平判官康頼、法勝寺の執事俊寛等、徒黨の面々、波路遙かに名も恐ろしき鬼界が島に流されしより、世は愈々平家の勢ひに鱗伏し、道路目を側つれども背後に指す人だになし。一國の生殺與奪の權は、入道が眉目の間に在りて、衛府判官は其の爪牙たるに過ぎず。苟も身一門の末葉に連れば、公卿華胃の公達も敢て肩を並ぶる者なく、前代未聞の榮華は、天下の耳目を驚かせり。されば日に増し募る入道が無道の行爲、一朝の怒に其の身を忘れ、小松内府の諫をも用ひず、恐れ多くも

後白河法皇を鳥羽の北殿に押籠め奉り、卿相雲客の或は累代の官職を覆れ、或は遠島に流入となるもの四十餘人。鄙も都も怨嗟の聲に充ち、天下の望み既に離れて、衰亡の兆漸く現はれんとすれども、今日の歡びに明日の哀れを想ふ人もなし。盛者必衰の理とは謂ひながら、權門の末路、中々に言葉にも盡されぬ。父入道が非道の舉動は一次再三の苦諫にも及ばれず、君父の間に立ちて忠孝二道に一身の兩全を期し難く、驕る平家の行末を浮べる雲と頼みなく、思積りて熱、世の無常を感じたる小松の内大臣重盛卿、先頃思ふ旨ありて、熊野參籠の事ありしが、歸洛の後は一室に閉籠りて、猥りに人に面を合はせ給はず、外には所勞と披露ありて出仕もなし。然れば平生徳に懐き恩に浴せる者は言ふも更なり、知るも知らぬも潜かに憂ひ傷まざるはなかりけり。

短き秋の日影もや、西に傾きて、風の音さへ澄み渡るはつき半の夕暮の空、前には閑庭を控へて左右は廻廊を繞らし、青海の簾長く垂れこめて、微月の銀鉤空しく懸れる一室は、小松殿が居間なり。内には寂然として人なきが如く、只、簾を漏れて心細くも立迷ふ香煙一縷、

をりくかすかに聞ゆる憂々の音は、念珠を爪繰る響にや、主が消息を齎らして、いと奥床し。

や、ありて「誰かある」と呼ぶ聲す、那方なる廊下の妻戸を開けて徐ろに出で來りたる立烏帽子に布衣着たる侍は齋藤瀧口なり。「時頼参りて候」と申上ぐれば、やがて一間を出で立ち給ふ小松殿、身には山藍色の形木を摺りたる白布の服を纏ひ、手には水晶の珠数を掛け、ありしにも似ず瘦れ給ひし御顔に笑を含み、「珍らしや瀧口、此程より病氣の由にて予か熊野參籠の折より見えざりしが、僅の間に痛く瘦せ衰へし其方が顔容、日頃は鬼とも組まんす勇士も身内の敵には勝たれぬよな、病は癒えしか」。瀧口はや、まばし、詰と御顔を見上げ居たりしが、「久しく御前に遠りたれば、餘りの御懐しさに病餘の身をも顧みず、先刻遠侍に伺候致せしが、幸にして御拜顔の折を得て、時頼身にとりて恐悅の至りに候」と言ふと其儘御前に打ち伏し、濡羽の鬢に小波を打たせて悲愁の様子、徒ならず見えけり。

哀れや瀧口、世を捨てん身にも今を限りの名残には一切の諸縁何れか煩惱ならぬは無し。此世の思ひ出に、夫とはなしに餘所ながらの告別とは神ならぬ身の知り給はぬ小松殿、瀧口

が平生の快潤なるに似もやらで、打ち萎れたる容姿を、訝しげに見やり給ふぞ理なる。
 四方山の物語に時移り、入日の影も何時しか消えて、冴え渡る空に星影寒く、階下の叢に
 蟲の泣聲露ほしけなり。燭を運び來りし水干に緋の袴着けたる童の後影見送りて、小松殿は
 聲を忍ばせ、『時頼、近う寄れ、得難き折なれば、予が改めて其方に頼み置く事あり』。

第十二

一穗の燈を挟みて相對せる小松殿と時頼、物語の様、最と蕭やかなり。

『こは思ひも寄らぬ御言葉を承はり候ものかな、御世は盛りとこそ思はれつるに、など然る
 思まはしき事を仰せらるゝにや。憚り多き事ながら、殿こそは御一門の柱石、天下萬民の望
 みの集まる所、吾れ人諸共に御運の程の久しかれと祈らぬ者はあらざるに、何事にて御在す
 るぞ、聊かの御不例に思まはしき御身の後を仰せ置かるゝとは。殊更少將殿の御事、不肖弱
 年の時頼、如何でか御托命の重きに堪へ申すべき。御言葉のゆるよし、時頼つやく合點參
 らず』。

『時頼、さては其方が眼にも世は盛りと見えつるよな。盛りに見ゆればこそ、衰へん末の事
 の一入深く思ひ遣らるゝなれ。弓矢の上に天下を與奪するは武門の慣習。遠き故事を引くに
 も及ばず、近き例は源氏の末路。仁平、久壽の盛りの頃には、六條判官殿、如何でか其の一
 族の今日あるを思はれんや。治に居て亂を忘れざるは長久の道、榮華の中に没落を思ふも、
 徒に重盛が杞憂のみにあらず』。

『然るにても幾千代重ねん殿が御代なるに、など然ることの候はんや』。

『否とよ時頼、朝の露よりも猶ほ空なる人の身の、何時消えんも測り難し。我れ斯くてだに
 在らんにはと思ふ聞さへ中々に定かならざるに、いかで年月の後の事を思ひ料らんや。我も
 し兎も角もならん跡には、心に懸かるは只、少將が身の上、元來孱弱の性質、加ふるに幼よ
 り詩歌一寄の道に心を寄せ、管絃舞樂の娛しみの外には、弓矢の譽あるを知らず。其方も見
 つらん、去ぬる春の花見の宴に、一門の面目と稱へられて、舞妓、白拍子にも比すべからん
 己が優技をば、さも誇り顔に見えしは、親の身の中々に恥かしかりし。一旦事あらば、妻子
 の愛、浮世の望みに惹かされて、如何なる未練の最期を遂ぐるやも測られず。世の盛衰は是

非もなし、平家の嫡流として卑怯の舉動などあらんには、祖先累代の恥辱この上あるべからず。維盛が行末守り呉れよ、時頼、之ぞ小松が一期の頼みなるぞ。

『そは時頼の分に過ぎたる仰せにて候ぞや。現在足助二郎重景など屈竟の人々、少將殿の扈從には候はずや。若年末熟の時頼、人に勝りし何の能ありて斯かる大任を御受申すべき』

『否々左にあらず。いかに時頼、六波羅上下の武士が此頃の有様を何とか見つる。一時の太平に狎れて衣紋装束に外見を飾れども、誠武士の魂あるもの幾何かあるべき。華奢風流に荒める重景が如き、物の用に立つべくもあらず。只、彼れが父なる與三左衛門景安は平治の激亂の時、二條堀河の邊りにて、我に代りて悪源太が爲に討たれし者ゆゑ、其の遺功を思ふて我名の一字を與へ、少將が扈從となせしのみ。縁言ながら維盛が事頼むは其方一人。少將事あるの日、未練の最期を遂ぐるやうのことあらんには、時頼、予は草葉の蔭より其方を恨むぞよ』

思ひ入りたる小松殿の御氣色、物の哀れを含めたる、心ありけの語の端々も、餘りの忝なさに思ひ紛れて只、感涙に咽ぶのみ。風にあらで小忌の衣に漣立ち、持ち給へる珠數震ひ揺

ぎて、さら／＼と音するに、瀧口首を擡けて、小松殿の御様を見上ぐれば、燈の光に半面を背けて、御袖の唐草に徒ならぬ露を忍ばせ給ふ、御心の程は知らねども、痛はしさは一入深し。夜も更け行きて、何時しか簾を漏れて青月の光凄く、澄み渡る風に落葉ひゞきて、主が心問ひたけなり。

蟲の音亘りて月高く、いづれも哀れは秋の夕、憂しとても逃れん術なき己が影を踏みながら、腕又きて小松殿の門を立ち出でし瀧口時頼。露にそほちてか、布衣の袖重けに見え、足の運さながら酔へるが如し。今更思ひ決しめ一念を吹きかへす世に秋風は無けれども、積り積りし浮世の義理に迫られ、胸は涙に塞りて、月の光も朧なり。武士の名残も今宵を限り、餘所ながらの告別とは知り給はで、亡からん後まで頼み置かれし小松殿。御仰の忝さと、是非もなき身の不忠を想ひやれば、御言葉の節々は骨を刻むより猶つらかりし。哀れ心の灰は冷え果て、浮世に立てん烟もなき今の我、あゝ何事も因果なれや。

月は照れども心の闇に夢とも現とも覺えず、行衛もあらず歩み來りしが、ふと頭を擡ぐれば、こはいかに身は何時の間にか御所の裏手、中宮の御殿の邊にぞ立てりける。此春より來

慣れたる道なればにや、思はぬ方に迷ひ來しものかなと、無情かりし人に通ひたる昔思はれて、築垣の下に我知らずイみける。折柄傍らなる小門の蔭にて「横笛」と言ふ聲するに心付き、思はず振向けば、立烏帽子に狩衣着たる一個の侍の此方に背を向けたるが、年の頃五十計りなる老女と額を合せて叫けるなり。

第十三

月より外に立聞ける人ありとも知らず、件の侍は聲潛ませて、「いかに冷泉、折重ねし薄様は薄くとも、こめし哀れは此秋よりも深しと覺ゆるに、彼の君の氣色は如何なりしぞ。夜毎の月も數へ盡して、圓なる影は二度まで見たるに、身の願の満たん日は何れの頃にや。頼み甲斐なき懸橋よ」。

怨みの言葉を言はせも敢へず、老女は疎らなる齒莖を顯はしてホ、と打笑み、「然りと雖も御身にも似合はぬ事を。此の冷泉に如才は露無けれども、まだ都慣れぬ彼の君なれば、御身が事可愛しとは思ひながら、返す言葉のはしたなしと思はれんなど想ひ煩ふてお在すに

こそ、咲かぬ中こそ答ならずや」。言ひつゝと男の傍に立寄りて耳に口よせ、何事が暫し囁きしが、一言毎に點頭きて冷かに打笑める男の肩を軽く叩きて、「お解りになりしや、其時こそは此の老婆にも、秋にはなき梶の葉なれば、渡しの料は忘れ給ふな、世にも憎きほど羨ましき二郎ぬしよ」。男は打笑ふ老女の袂を引きて、「そは誠か、時頼めはいよく思ひ切りしとか」。

己れが名を聞きて、松影に潜める瀧口は愈、耳を澄しぬ。老女「此春より引きも切らぬ文の、此の二十日計りはそよとだに音なきは、言はでも著るき、空なる戀と思ひ絶えしにあんなれ。何事も此の老婆に任せ給へ、又しても心元なけに見え給ふことの恨めしや、今こそ枯枝に雪のみ積れども、鶯鳴かせし昔もありし老婆、萬に抜目の有るべきや」。袖もて口を覆ひ、さなきだに繁き額の皺を集めて、ホ、と打笑ふ様、見苦しき事言はん方なし。

後の日を約して小走りに歸り行く男の影をつくぐ見送りて、瀧口は枯木の如く立ちすくみ、何處ともなく見詰むる眼の光徒ならず。「二郎、二郎とは何人ならん」。獨りごちつゝ首傾けて暫し思案の様なりしが、忽ち眉揚り眼鏡く「さては」とばかり、面色見るく變りて

握り詰めし拳ぶるくと震ひぬ。何に驚きてか、垣根の蟲、礎と泣き止みて、空に時雨る、落葉散る響だにせず。良ありて瀧口、顔色和らぎて握りし拳も自ら緩み、只、太息のみ深し。『何事も今の身には還らぬ夢の、恨みもなし。友を賣り人を許る末の世と思へば、我が爲に善知識ぞや、誠なき人を戀ひしも浮世の習と思へば少しも腹立たず』。

立上りつゝ、築垣の那方を見やれば、琴の音微かに聞ゆ。月を友なる怨聲は、若しや我が慕ひてし人にもやと思へば、一期の哀れ自ら催されて、ありし昔は流石に空ならず、あはれ、よりても合はぬ片絲の我身の運は是非もなし。只、塵の世に我が思ふ人の長へに汚れざれ。戀に望みを失ひても、世を果敢なみし心の願、優に貴し。

千緒萬端の胸の思ひを一念「無常」の熔爐に溶かし去りて、澄む月に比べん心の明るさ。何れ終りは同じ紙衣玉席、白骨を抱きて榮枯を計りし昔の夢、觀じ來れば世に秋風の哀れもなし。君も、父も、戀も、情も、さては世に産聲擧げてより二十三年の旦夕に疊み上げ折重ねし一切の榮縁、六尺の皮肉と共に夜半の嵐に吹き籠めて、行衛も知らぬ雲か煙。跡には秋深く夜靜にして、亘る雁の聲のみ高し。

第十四

治承三年五月、熊野參籠の此方、日に増し重る小松殿の病氣。一門の頼、天下の望みを繋ぐ御身なれば、さすがの横紙裂りける入道も心を痛め、此日朝まだき西八條より遙々の見舞に、内府も暫く寢處を出でて對面あり、半晌計り經て還り去りしが、鬼の様なる入道も稍、涙含みてぞ見えにける。相隨ひし人々の、入道と共に還りし跡には、館の中最と靜にて、小松殿の側に侍るものは御子維盛卿と足助二郎重景のみ。維盛卿は父に向ひ、『先刻祖父禪門の御勸めありし宋朝渡來の醫師、聞くが如くんば世にも稀なる名手なるに、父上の拒み給ひしこそ心得ね』。訝けに尋ぬるを、小松殿は打見やりて、はらくと涙を流し、『形ある者は天命あり。三界の教主さへ、者婆が藥にも及ばずして跋提河の涅槃に入り給ひき。佛體ならぬ重盛、まして唯ならぬ身の業繋なれば、藥石如何でか治するを得べき。唯、父禪門の御身こそ痛ましけれ。位人臣を極め、一門の榮華は何れの國、何れの代にも例なく、齡六十に越え給へば、出離生死の御營、無上菩提の願ひの外、何御不足のあれば、煩惱劫苦の浮世に非道

の權勢を貪り給ふ淺ましき。如何に少將、此頃の御舉動を何とか見つる、臣として君を押し籠め奉るさへあるに、下民の苦を顧みず、遷都の企ありと聞く、そもや平安三百年の都を離れて、何こに平家の盛りあらん。父の非道を子として救ひ得ず、民の怨みを眼のあたり見る重盛が心苦しき。思ひ遣れ少將』。

維盛卿も、傍らに侍せる重景も首を垂れて默然たり。内府は病み疲れたる身を脇息に持たせて、少しく笑を含みて重景を見やり給ひ、『いかに二郎、保元の弓勢、平治の太刀風、今も草木を靡かす力ありや。盛りと見ゆる世も何れ衰ふる時はあり、未は濁りても濁れぬ源には、流れも何時か清まんするぞ。言葉の旨を忖り得しか』。重景は愧しげに首を俯し、『如何でかは』と答へしまゝ、はかなくしく應ぜず。

折から一人の青侍、廊下に手をつきて、『齋藤左衛門、只今御謁見を給はりたき旨願ひ候が、如何計らひ申さんや』と恐るく申上ぐれば、小松殿、『是れへ連れ參れ』と言ふ。暫くして件の青侍に導かれ、椽端に平伏したる齋藤茂頼、齡七十に近けれども、猶ほ矍鑠として健やかなる老武者、右の鬢先より頬を掠めたる向疵に、栗毛の琵琶股叩いて物語りし昔の武

功恐れ、籠手摺に肉落ちて節のみ高き太腕は、そも幾その人の首を切り落としかん。肩は山の如く張り、頭は雪の如く白し。『久しや左衛門』、小松殿聲懸け給へば、左衛門は窪みし兩眼に涙を浮べ、『茂頼、此の老年に及び、一期の恥辱、不忠の大罪、御詫申さん爲め、御病體を驚かせ參らせて候』。小松殿眉を撃め、『何事ぞ』と問ひ給へば、茂頼は無念の顔色にて、『愚息時頼』と言ひさして涙をばらはらと流せば、重景は傍らより膝進め、『時頼殿に何事の候ひしぞ』。一近世致して候』。

是はと驚く維盛・重景、仔細如何にと問ひ寄るを應も得せず、やうやく涙を拭ひ、『君が山なす久年の御恩に對し、一日の報效をも遂げず、猥りに身を捨つる條、不忠とも不義とも言はん方なき愚息が不所存、茂頼此期に及び、君に合はす面目も候はず』。言ひつゝ、懐より取り出だす一封の書、『言語に絶えたる亂心にも、君が御事忘れずや、不忠を重ぬる業とも知らず、残りありし此の一通、君の御名を染めたれば、捨てんにも處なく、餘儀なく此に』と差上ぐるを、小松殿は取上げて、『こは予に残せる時頼が陳情よな』と言ひつゝ、繰りひろげ、つくづく讀み了りて嘆息し給ひ、『あゝ我れのみ浮世にてはなかりしか。——時頼ほどの武

士も物の哀れには向はん及なしと見ゆるぞ。左衛門、今は嘆きても及ばぬ事、予に於て聊か憾みなし。禍福はあざなへる繩の如く、世は寒翁が馬、平家の武士も数多きに、時頼こそは中に嫉しき程の仕合者ぞ。

第十五

更闌けて、天地の間にそよとも音せぬ後夜の静けさ、や、傾きし下弦の月を追ふて、冴え澄める大空を渡る雁の影遙かなり。ふけ行く夜に奥も表も人定まりて、築山の木影に鐵燈の光のみ佗しけなる御所の裏局、女房曹司の室々も、今を盛りの寢入花、對屋を照せる燈の火影に迷ふて、妻戸を打つ蟲の音のみ高し。廻廊のあなたに、蘭燈尙ほ微なるは誰が部屋ならん、主は此の夜深きにまだ寢もやらで、獨り黒塗の小机に打ちもたれ、首を俯して物思はしけなり。側らにある衣桁には、紅梅萌黄の三衣を打懸けて、薰き籠めし移り香に時ならぬ花を匂はせ、机の傍らに据ゑ付けたる蒔繪の架には、色々の歌集物語を載せ、柱には一面の古鏡を掛けて、故とならぬ女の魂見えて床し。主が年の頃は十七八になりもやせん、身には薄色に

草模様を染めたる小袷を着け、水際立ちし額より丈にも餘らん黒羽の黒髪、優に振分けて後に下げたる姿、優に氣高し。誰れ見ねども膝も崩さず、時々鬢のほつれに小波を打たせて、吐く息の深けなるに、哀れは此處にも漏れずと見ゆ。主は誰ぞ、是れぞ中宮が曹司横笛なる。

其の振り上ぐる顔を見れば、鬚眉の魂を蕩かして、此世の外ならで六尺の體を天地の間に置き所無きまでに狂はせし傾國の色、凄き迄に美はしく、何を悲しみてか眼に湛ゆる涙の珠、海棠の雨も及ばず。膝の上に半縲引けたる文は何の哀れを籠めたるにや、打ち見やる眼元に無限の情を含み、果は恰も悲しみに堪へざるもの如く、ブル／＼と身震ひして、文もて顔を掩ひ、泣音を忍ぶ様いぢらし。

折から此方を指して近づく人の蹺音に、横笛手早く文を藏め、涙を拭ふ隙もなく、忍びやかに、「横笛様、まだ御寢ならずや」と言ひつゝ、部屋の障子徐に開きて入来りしは、冷泉と呼ぶ老女なりけり。横笛は見ると、蕭れし今までの容姿忽ち變り、屹と容を改め、言葉さへ、雄々しく、「冷泉様には、何の要事あれば夜半には來給ひし」と答むるが如く問ひ返せば、

ホ、と打笑ひ、「横笛さま、心強きも程こそあれ、少しは他の情を酌み給へや。老い枯れし老婆の御身に嫌はるゝは、可惜武士の戀死せん命を思へば物の數ならず、然るにても昨夜の返事、如何に遊ばすやら。」「幾度申しても御返事は同じこと、あな蒼蠅き人や。」「慚しけに面を赧らむる常の様子と打つて變りし、さてもすけなき捨言葉に、冷泉訝しくは思へども、流石は巧者、氣を外さず、其の御心の強さに、彌増す思ひに堪へ難き重景さま、世に時めく身にて、霜枯の夜毎に只一人、憂身をやつさるゝも戀なればこそ、横笛様、御身はそを哀れとは思さずか。若氣の一徹は吾れ人ともに思ひ返しの無きもの、可惜丈夫の焦れ死しても御身は見殺しにせらるゝ氣か、さりととは情なの御心や。横笛はさも憫けに、「左様の事は横笛の知らぬこと。」「またしてもうたてき事のみ、恥かしと思ひ給ふての事か。年家き内は誰しも同じながら、斯くては戀は果てざるものぞ。女子の盛りは十年とは無きものなるに、此上なき機會を取り外して、宰塔婆小町のご事もある世の中。重景様は御家と謂ひ、器量と謂ひ、何不足なき好き縁なるに、何とて斯くは否み給ふぞ。扱は瀧口殿が事思ひ給ふての事か、武骨一途の瀧口殿、文武兩道に秀で給へる重景殿に較ぶべくも非ず。況してや瀧口殿は何思ひ立ち

てや、世を捨て給ひしと専ら評判高きをば、御身は未だ聞き給はずや。世捨人に情も義理も要らばこそ、花も實もある重景殿に只一言の色善き返り言を志給へや。聽て兵衛にも昇り給はんず重景殿、御身が行末は如何に幸ならん。未だ浮世慣れぬ御身なれば、思ひ煩らひ給ふも理なれども、六十路に近き此の老婆、いかで爲悪しき事を申すべき、聞分け給ひしかや。顔差し覗きて猫撫聲、「や、や」と媚びるが如く笑を含みて袖を引けば、今まで應もせず俯き居たりし横笛は、引かれし袖を切るが如く打ち拂ひ、忽ち柳眉を逆立て、言葉鋭く、「無禮にはお在さずや冷泉さま、榮華の爲に身を賣る遊女舞妓と横笛を思ひ給ふてか。但しは此の横笛を飽くまで不義淫奔に陥れんとせらるゝにや。又しても問ひもせぬ人の批判、且つは深夜に道ならぬ媒介、横笛迷惑の至り、御歸りあれ冷泉様。但し高聲擧げて宿直の侍を呼び起し申さんや。』

第十六

鋭き言葉に言ひ懲られて、餘儀なく立ち上る冷泉を、引き立てん計りに送り出だし、本意

無けに見返るを見向もやらす、其儘障子を礎と締めて、仆るゝが如く座に就ける横笛。暫しは恍然として氣を失へる如く、いづことも無く詰と凝視め居しが、星の如き眼の裏には溢るるばかりの涙を湛へ、珠の如き頬にはらくと振りかゝるをば拭はんとせず、蕾の唇惜氣もなく喰ひまばりて、嚙み砕く息の切れぐに全身の哀れを忍ばせ、はては耐へ得て、體を岸破とうつ伏して、人には見えぬ幻に我身ばかりの現を寄せて、よとばかりに泣き轉びつ。涙の中にかみ絞る袂を漏れて、幽に聞ゆる一言は、誰れに聞かせんとてや、「ユ許し給はれ」。

良しや眼前に屍の山を積まんとも涙一滴こぼさぬ勇士に、世を果敢なむ迄に物の哀れを感じさせ、夜毎の秋に浮身をやつす六波羅一の儘男を物の見事に狂はせながら、「許し給はれ」とは今更ら何の酔興ぞ。吁々然に非ず、何處までの浮世なれば、心にもあらぬ情なさに、互ひの胸の隔てられ、恨みしものは恨みしまゝ、恨みられしものは恨みられしまゝに、あはれ皮一重を堺に、身を換へ世を隔てゝも胡越の思ひをなす、吾れ人の運命こそ果敢なけれ。横笛が胸の裏こそ、中々に口にも筆にも盡されね。

飛鳥川の明日をも俟たで、絶ゆる間もなく移り變る世の淵瀬に、百千代を貫きて變らぬものあらば、そは人の情にこそあんなれ。女子の命は只一つの戀、あらゆる此世の望み、樂しみ、さては優にやさしき月花の哀れ、何れ戀ならぬは無し。胸に燃ゆる情の焔は、他を燒かざれば其身を焚かん、まゝならぬ總路に世を仰ちて、秋ならぬ風に散りゆく露の命葉、或は墨染の衣に有漏の身を裏む、さては淵川に身を棄つる、何れか戀の炎に其軀を燒き盡くし、残る冷灰の哀れにあらざらんや。女子の性の斯く情深きに、いかで横笛のみ獨り無怙かるべきぞ。

人知らぬ思ひに秋の夜半を泣きくらす横笛が心を尋ねれば、次の如くなりしなり。想ひ廻せば、はや半歳の昔となりぬ。西八條の屋方に花見の宴ありし時、人の勸めに黙し難く、舞ひ終る一曲の春鶯囀に、數ならぬ身の端なくも人に知らるゝ身となりては、御室の郷に静けき春秋を娛しし身の心惑はるゝ事のみ多かり。見も知らず、聞きも習はぬ人々の人傳に送る薄色の折紙に、我を宛名の哀れの數々。都慣れぬ身には只、胸のみ驚かれて、何と答へん術だに知らず、其儘心なく打ぐ過る程に、雲井の月の懸橋絶えしと思ひてや、心を

寄するものも漸く少くなりて、始めに渝らす文をはこぶは只二人のみぞ残りける。一人は齋藤瀧口にして、他の一人は足助二郎なり。横笛今は稍、浮世に慣れて、風にも露にも、餘所ならぬ思ひ忍ばれ、墨染の夕の空に只一人、連れ亘る雁の行衛消ゆるまで見送りて、思はず太息吐く事も多かりけり。二人の文を見るに付け、何れ劣らぬ情の濃かさに心迷ひて、一つ身の何れを夫とも別ち兼ね、其れとは無しに人の噂に耳を傾くれば、或は瀧口が武勇人に勝れしを譽むるも有れば、或は二郎が容姿の優しきを稱ゆるも有り。共に小松殿の御内にて、世にも知られし屈指の名士。横笛愈、心惑ひて、人の哀れを二重に包みながら、浮世の義理の柵に何方へも一言の應へだにせず、無情と見ん人の恨みを思ひやれば、身の心苦しきも数ならず、夜半の夢屢、駭きて、涙に浮くばかりなる枕邊に、燵籠の匂ひのみ肅やかなるぞ憐れなる。

或日のこと、瀧口時頼が発心せしと、誰れ言ふとなく大奥に傳はりて、さなきだに口善悪なき女房共、寄ると觸ると瀧口が噂に、横笛轟く胸を抑へて陰ながら様子を聞けは、情なき戀路に世を果敢なみての業と言ひ嘸すに、人の手前も打ち忘れ、覺えず『そは誠か』と力を

入れて尋ねれば、女房共、『罪造りの横笛殿、可惜勇士を木の端とせし』。人の哀れを面白けるなる高笑に、是れはとばかり、早速のいらへもせず、ツと己が部屋に走り歸りて、終日夜もすがら泣き明かしぬ。

第十七

『罪造りの横笛殿、あたら勇士に世を捨てさせし』。あ、半戯れに、半法界悋氣の此一語、横笛が耳には如何に響きしぞ。戀に望みを失ひて浮世を捨てし男女の事、昔の物語に見し時は世に痛はしき事に覺えて、草色の袂に露の哀れを置きし事ありしが、猶ほ現ならぬ空事とのみ思ひきや、今や眼前かゝる悲しみに遇はんとは。而も世を捨てし其人は、命を懸けて己れを戀ひし瀧口時頼。世を捨てさせし其人は、可愛とは思ひながらも世の關守に隔てられて無情しと見せたる己れ横笛ならんとは。餘りの事に左右の考も出でず、夢幻の思ひして身を小机に打ち伏せば、『可惜武士に世を捨てさせし』と怨むが如く、嘲けるが如き聲、何處よりともなく我が耳にひゞきて、其度毎に總身宛然水を浴びし如く、心も體も凍らんばかり、襟を傳

ふ涙の雫のみさすが哀れを隠し得ず。

搔き亂れたる心、幸う我に歸りて、熟思へば、世を捨つるとは輕々しき戯事に非ず。瀧口殿は六波羅上下に名を知られたる屈指の武士、希望に滿てる春秋長き行末を、二十幾年の男盛りに截斷りて、樂しき此世を外に、身を佛門に歸し給ふ、世にも憐れの事にこそ。數多の人に優りて、君の御覺殊に愛たく、一族の譽を双の肩に擔ふて、家には其子を杖なる年老いたる親御もありと聞く。他目にも數あるまじき君父の恩義惜氣もなく振り捨て、人の譏り、世の笑ひを思ひ給はで、弓矢とる御身に瑜伽三密の嗜は、世の無常を如何に深く觀じ給ひけるぞ。あゝ是れ皆此の身、此の横笛の爲せし業、双こそ當てね、可惜武士を手に掛けしも同じ事。——思へば思ふほど、乙女心の胸塞りて泣くより外にせん術も無し。

吁々、協はずば世を捨てんまで我を思ひくれし人の情の程こそ中々に有り難けれ。儘ならぬ世の義理に心ならずとは言ひながら、斯かる誠ある人に、只一言の返事だにせざりし我こそ今更に悔しくも亦罪深けれ。手篋の底に秘め置きし瀧口が送りし文、涙ながらに取り出して、心遣りにも繰り返せば、先には斯くまでとも思はざりしに、今の心に讀みもて行く一字

毎に、腹も千切る、ばかり。百夜の榻の端がきに今や我も數書くまじ、只つれなき浮世と諦めても、命ある身のさすがに露とも消えやらず、我が思ふ人の忘れ難きを如何にせん。——など書き聯ねたるさへあるに、よしや墨染の衣に我れ哀れをかくすとも、心なき君には上の空とも見えん事の口惜しさ、など硯の水に泪落ちてか、薄墨の文字定かならず。つらつら數ならぬ賤しき我身に引較べ、彼を思ひ此を思へば、横笛が胸の苦しさは、譬へんに物もなし。世を捨てんまでに我を思ひ給ひし瀧口殿が誠の情と並ぶれば、重景が戀路は物ならず。況して日頃より文傳へする冷泉が、ともすれば瀧口殿を惡し様に言ひなせしは、我を誘はん腹黒き人の計略ならんも知れず。——斯く思ひ來れば、重景の何となう疎ましくなるに引き換へて、瀧口を憐れむの情愈、切にして、世を捨て給ひしも我れ故と、思ふ心の身にひしくと當りて、立ちても坐りても居堪らず、窓打つ落葉のひゞきも、蟲の音も、我を咎むる心地して、繰擴けし文の文字は、宛然我れを睨むが如く見ゆるに、目を閉ち耳を塞ぎて机の側らに伏し轉べば、「あたら武士を汝故に」と、いづこともなく嘯く聲、心の耳に聞えて、胸は及に割かる、思ひ。あはれ横笛、一夜を惱み明かして、朝日影窓に眩き頃、ふらふらと縁前に出

づれば、憎くや、檐端に歌ふ鳥の聲さへ、己が心の迷ひから、「汝ゆるく」と聞ゆるに、覺えず顔を反向け、あゝと溜息つけば、驚きて起つ群雀、行衛も知らず飛び散りたる跡には、秋の朝風音寂しく、残んの月影夢の如く淡し。

第十八

女子こそ世に優しきものなれ。戀路は六つに變れども、思ひはいづれ一つ魂に映る哀れの影とかや。つれなしと見つる浮世に長生へて、朝顔の夕を嫁たぬ身に百年の末懸けて、覺束なき朝夕を過すも胸に包める情の露あればなり。戀かあらぬか、女子の命はそも何に噓ふべき。人知らぬ思ひに心を傷りて、あはれ一山風に跡もなき東岱前後の烟と立ち昇るうら弱き眉目好き處女子は、年毎に幾何ありとするや。世の隨意ならぬは是非もなし、只いさゝ川、底の流れの通ひもあらで、人はいさ、我れにも語りて、世を果敢なむこそ浮世なれ。

然れば横笛、我れ故に武士一人に世を捨てさせしと思へば、乙女心の一徹に思ひ返さん術もなく、此の朝夕は只泣き暮らせども、影ならぬ身の失せもやらず、せめて嵯峨の奥にあり

と聞く瀧口が庵室に訪れて我が誠の心を打明かさばやと、さかしくも思ひ決めつ。誰彼時と紛れて只一人、うかれ出でけるこそ殊勝なれ。

頃はなが月の中旬すぎ、入日の影は雲にのみ残りて野も山も薄曇を流せしが如く、月未だ上らざれば、星影さへも最と稀なり。袂に寒き愛宕下しに秋の哀れは一入深く、まだ露下りぬ野面に、我が袖のみぞ早や沾ひける。右近の馬場を右手に見て、何れ昔は花園の里、霜枯れし野草を心ある身に踏み摧きて、太秦わたり辿り行けば、峰岡寺の五輪の塔、夕の空に形のみ見ゆ。やがて月は上りて桂の川の水烟、山の端白く閉罩めて、羣ぬる方は朧ろにして見え分かず。素より慣れぬ徒歩なれば、數たび或は里の子が落穂拾はん畔路にさすらひ、或は露に伏す鶉の床の草村に立迷ふて、絲より細き蟲の音に、覺束なき行末を啣てども、問ふに聲なき影ばかり。名も懐しき梅津の里を過ぎ、大堰川の邊に沿ひ行けば、河風寒く身に染みて、月影さへもわびしけなり。裾は露、袖は涙に打濡れつ、霞める眼に見渡せば、嵯峨野も何時しか奥になりて、小倉山の峰の紅葉、月に黒みて、釋迦堂の山門、木立の間に鮮なり。噂に聞きしは嵯峨の奥とのみ、何れの院とも坊とも知らざれば、何を便に尋ねべき、燈の光を

的に、數も無き在家を彼方此方に彷徨ひて問ひけれども、絶えて知るものなきに、愈々心惑ひて只、茫然と野中にイみける。折から向ふより庵僧とも覺しき一個の僧の通りかゝれるに、横笛、渡に舟の思ひして、「慮外ながら此わたりの庵に、近き頃様を變へて都より來られし俗名齋藤時頼と名告る年壯き武士のお在さずや」。聲震はして尋ねれば、件の僧は、横笛が姿を見て暫し首傾けしが、「露しけき野を女性の唯、一人、さてもく痛はしき御事や。けに然る人ありとこそ聞きつれど、まだ其人に遇はざれば、御身が尋ぬる人なりや、否やを知りがたし」。『して其人は何處にお在する』。『そは此處より程遠からぬ往生院と名くる古き僧庵に』。

僧は最と懇ろに道を教ふれば、横笛世に嬉しく思ひ、禮もいそぐ、別れ行く後影、鄙には見なれぬ緋の袴に、夜目にも輝く五柳の一重。件の僧は暫したゞすみて訝しげに見送れば、焚きこめし異香、吹き來る風に時ならぬ春を匂はするに、俄に忌はしげに顔背けて小走りに立ち去りぬ。

第十九

斯くて横笛は教へられしまゝに辿り行けば、月の光に影暗き、杜の繁みを徹して、微に燈の光見ゆるは、けに古りし庵室と覺しく、隣家とても有らざれば、閑として死せるが如き夜陰の静けさに、振鈴の響さやかに聞ゆるは、若しや尋ぬる其人かと思へば、思ひ設けし事ながら、胸轟きて急ぎし足も思はず緩みぬ。思へば現とも覺えで此處までは來りしもの、何と言ふて世を隔てたる門を敲かん、我が眞の心をば如何なる言葉もて打ち明けん。うら若き女子の身にて夜を冒して來つるをば、蓮葉のものと卑下み給はん事もあらば如何にすべき。將また、千束の文に一言も返さざりし我が無情を恨み給はん時、いかに應へすべき、など思ひ惑ひ、恥かしさも催されて、御所を抜出でしときの心の雄々しさ、今更怪しまるゝばかりなり。斯くて果つべきに非ざれば、辛く我れと我身に思ひ決め、ふと首を擧ぐれば、振鈴の響耳に迫りて、身は何時しか庵室の前に立ちぬ。月の光にすかし見れば、半ば顔れし門の廂に蟲食みたる一面の古額、文字は危げに往生院と讀まれたり。

横笛四邊を打ち見やれば、八重葎茂りて門を閉ち、拂はぬ庭に落葉積りて、秋風吹きし跡もなし。松の袖垣隙あらはなるに、葉は枯れて蔓のみ残れる蔦生えかかりて、古き梢の夕嵐軒もる月の影ならでは訪ふ人も無く荒れ果てたり。檐は朽ち柱は傾き、誰れ棲みぬらんと見ても物憂げなる宿の態。扱も世を無常と観じては斯かる詫しき住居も、大梵高臺の樂しみに換へらるゝものよと思へば、主の貴さも彌増して、今宵の我身や、愧かしく覺ゆ。庭の松が枝に釣したる、風暗き鐵燈籠の光に檐前を照らさせて、障子一重の内には振鈴の聲、急がず緩まず、四曼不離の衣毎の行業に慣れそめてか、籬の蟲の駭かん様も見えず。横笛今は心を定め、ほとほとと門を音づるれども答なし。玉を延べたらん如き纖腕纏るゝばかりに打敲けども應せん氣はひも見えず。實に佛者は行の半には、王侯の召にも應ぜずとかや、我ながら心なかりしと、暫し門下にイみて、鈴の音の絶えしを待ちて復び門を敲けば、内には主の聲として、『世を隔てたる此庵は、夜陰に訪はるゝ覺無し、恐らく門途にても候はんか』。横笛潜めし聲に力を入れて、『大方ならぬ由あればこそ夜陰に御業を驚かし參らせしなれ。庵は往生院と覺ゆれば、主の御身は、小松殿の御内なる齋藤瀧口殿にてはお在さすや』。『如何にも某

が世に在りし時の名は齋藤瀧口にて候ひしが、そを尋ねらるゝ御身はそも何人』。『妾こそは中宮の曹司、横笛と申すもの、隨意ならぬ世の義理に隔てられ、世にも厚き御情に心にも無き情なき事の數々、只今の御身の上と聞き侍りては、悲しさ苦しさ、女子の狭き胸一つには納め得ず、知られで永く已みなんこと口惜しく、一には妾が眞の心を打明け且つは御身の恨みの程を承はらん爲に茲まで迷ひ來りしなれ。こゝ開け給へ瀧口殿』。言ふと其儘、門の扉に身を寄せて、聲を潜ひて泣き居たり。

瀧口はまばらく應へせず、やゝありて、『如何に女性、我れ世に在りし時は、御所に然る人あるを知りし事ありしが、我が知れる其人は我れを知らざる筈なり、されば今宵我れを訪れ給へる御身は、我が知れる横笛にてはよもあらじ。良しや其人なりとても、此世の中に心は死して、残る體は空蟬の我れ、我れに恨みあればとて、そを言ふの要もなく、よし又人に誠あらばとて、そを聞かん願ひもなし。一切諸縁に離れたる身、今更ら返らぬ世の浮事を語り出でて何かせん。聞き給へや女性、何事も過ぎにし事は夢なれば、我れに恨みありとな思ひ給ひそ。己れに情なきものの善知識となれる例、世に少からず、誠の道に入りし身の、そを恨みん

謂れやある。されば遇ふて益なき今宵の我れ、唯、何事も言はず、此儘歸り給へ。一言とは申すまじきぞ、聞き分け給ひしか、横笛殿』。

第二十

因果の中に哀れを含みし言葉のふし／＼、横笛が悲しさは百千の恨みを聞くよりもまさり、『其の御語、いかで仇に聞侍るべき、只、親にも許さぬ胸の中、女子の恥をも顧みず、聞え参らせんするをば、聞かん願ひなしと仰せらるゝこそ恨みなれ。情なかりし昔の報ひとならば、此身を千々に刻まるゝとも露厭はぬに、怒ひ仇を情の御言葉は、心狭き妾に、恥ぢて死ぬとの御事か。無情かりし妾をこそ憎め、可惜武士を世の外にして、様を變へ給ふことの恨めしくも亦痛はしけれ。茲開け給へ、思ひ詰めし一念、聞き給はずとも言はでは已まじ。嗚瀧口殿、こゝ開け給へ、情なきのみが佛者かは』。嗚々と門を叩きて、今や開くると待詫ふれども、内には寂然として聲なし。やゝありて人の立居する音の聞ゆるに、嬉しやと思ひきや、振鈴の響起りて、りん／＼と鳴り渡るに、是れはと駭く横笛が呼べども叫べども答ふるものは

庭の木立のみ。

月稍、西に傾きて、草葉に置ける露白く、桂川の水音幽に聞えて、秋の夜寒に立つ鳥もなき眞夜中頃、往生院の門下に蟲と共に泣き暮らしたる横笛、哀れや、紅花緑葉の衣裳、涙と露に絞るばかりになりて、濡れし袂に裏みかねたる恨みのかす／＼は、そも何處までも浮世ぞや。我れから踏める己が影も、萎るゝ如く思ほえて、情なき人に較べては、月こそ中々に哀れ深けれ。横笛、今はとて、涙に曇る聲張上げて『嗚、瀧口殿、葉末の露とも消えずして今まで立ちつくせるも、妾が赤心打明けて、許すとの御身が一言聞かんが爲め、夢と見給ふ昔ならば、情なかりし横笛とは思ひ給はざるべきに、など斯くは慈悲なくあしらひ給ふぞ、今宵ならでは世を換へても相見んことの有りとも覺えぬに、嗚、瀧口殿』。

春の花を欺く姿、秋の野風に暴して、恨みさびたる其様は、如何なる大道心者にても、心動かんばかりなるに、峰の嵐に埋れて嘆きの聲の聞えぬにや、鈴の音は調子少しも亂れず、行ひすましたる瀧口が心、躡るべくも見えざりけり。

何とせん術もあらざれば、横笛は泣く／＼元來し路を返り行きぬ。氷の如く澄める月影に、

道芝の露つらしと拂ひながら、ゆりかけし丈なる髪、優に波打たせながら、晝にある如き乙女の歩姿は、葛飾の眞間の手古奈が昔偲ばれて、斯くもあるべしや。あはれ横笛、乙女心の今更に、命に懸けて思ひ決めしこと空となりては、歸り路に足進まず、我れやかたき、人や無情き、嵯峨の奥にも秋風吹けば、いづれ浮世には漏れざりけり。

第二十一

胸中一戀字を擺脫すれば、便ち十分爽淨、十分自在。人生最も苦しき處、只是れ此の心。然ればにや失意の情に世をあぢきなく觀じて、嵯峨の奥に身を捨てたる齋藤時頼、瀧口入道と法の名に浮世の名残を留むれども、心は生死の境を越えて、瑜伽三密の行の外、月にも露にも唱ふべき哀れは見えず、荷葉の三衣、秋の霜に堪へ難けれども、一杖一鉢に法捨を求むるの外、他に望みなし。實にや輪王位高けれども七寶終に身に添はず、雨露を凌がぬ檐の下にも圓頓の花は匂ふべく、眞如の月は照らすべし。且に稽古の窓に凭れば、垣を掠めて靡く霧は不斷の烟、夕に鑽仰の嶺を攀づれば、壁を漏れて照る月は常住の燭、晝は御室、太秦、梅

津の邊を巡錫して、夜に入れば、十字の繩床に結跏趺座して唵阿の行業に夜の白むを知らず。されば僧坊に入りてより未だ幾日も過ぎざるに、苦行難業に色黒み、骨立ち、一目にては十題判断の老登科とも見えつべし。あはれ、厚塗の立烏帽子に鬢を撫上げし昔の姿、今安くにある。今年二十三の壯年とは、如何にしても見えざりけり。

顧みれば瀧口、性質にもあらで形容邊幅に心を惱めたりしも戀の爲なりき。仁王とも組んず六尺の丈夫、體のみか心さへ衰へて、めしき哀れに弓矢の恥を忘れしも戀の爲なりき。思へば戀てふ惡魔に骨髓深く魅入れし身は、戀と共に浮世に斃れんか、將た戀と共に世を捨てんか、擇ぶべき途只、此の二つありしのみ。時頼世を無情と觀じては、何恨むべき物ありとも覺えず、武士を去り、弓矢を捨て、君に離れ、親を辭し、一切衆縁を擧げ盡して戀てふ惡魔の犠牲に供へ、跡に残るは天地の間に生れ出でしまゝの我身瀧口時頼、命とともに受継ぎし潤達の氣風再び爛熳と咲き出でて、容こそ變れ、性質は戀せぬ前の瀧口に少しも違はず。名利の外に身を處けば、自から嫉妬の念も起らず、憎惡の情も萌さず、山も川も木も草も、愛らしき垂髫も、醜き老婆も、我れに恵む者も、我れを賤しむ者も、我れには等しく可

愛らしく覚えぬ。けに一視平等の佛眼には四海兄弟と見えしとかや。病めるものは之を慰め、貧しきものは之を分ち、心曲りて郷里の害を爲すものには因果應報の道理を諭し、凡人の爲め世の爲に益あることは躊躇ふことなく爲し、絶えて彼此の差別なし。然れば瀧口が錫杖の到る所、其風を慕ひ其徳を仰がざるはなかりけり。或時は里の子供等を集めて、昔の剛者の物語など面白く言ひ聞かせ、喜び勇む無邪氣なる者の様を見て呵々と打笑ふ様、二十三の瀧口、何日の間に習ひ覚えしか、さながら老翁の孫女を弄ぶが如し。

斯くて風月ならで訪ふ人も無き嵯峨野の奥に、世を隔て、安らげき朝夕を楽しみ居しに、世に在りし時は弓矢の響も打捨て、狂ひ死に死なんまで焦れし横笛。親にも主にも振りかへて戀の奴となりしまで慕ひし横笛。世を捨て様を變へざれば、吾から懸けし戀の絆を解く由も無かりし横笛。其の横笛の音づれ來しこそ意外なれ。然れど瀧口、口にくはへし松が枝の小搖ぎも見せず。見事振鈴の響に耳を澄まして、含識の流、さすがに濁らず。思へば悟道の末も稍、頼もしく、風白む窓に、傾く月を磨きて冷かに打笑める顔は、天晴大道心者に成りすましたり。

さるにても横笛は如何になしつるや、往生院の門下に一夜を立ち明かして曉近く御所に還り、後の二三日は何事も無く暮せしが、間もなく行衛知れずなりて、其部家の壁には日頃手慣れし古桐の琴、主待ちけに見ゆるのみ。

第二十二

或日、天長閑に晴れ渡り、衣を返す風寒からず、秋蟬の翼暖む小春の空に、瀧口をぞろに心浮かれ、常には行かぬ桂、鳥羽わたり巡錫して、嵯峨とは都を隔て、南北、深草の邊に來にける。此あたりは山近く林密にして、立田の姫が織り成せる木々の錦、二月の色よりも紅にして、匂あらしかばと惜しまるゝ美しさ、得も言はれず。薪探る翁、牛ひく童、餘念無く歌ふ節、餘所に聞くだに樂しけなり。瀧口行くく、四方の景色を打ち眺め、稍、疲れを覺えたれば、とある路傍の民家に腰打ち掛けて、暫く休らひぬ。主婦は六十餘とも覺しき老婆なり、一椀の白湯を乞ひて喉を濕し、何くれとなき浮世話の末、瀧口、「愚僧が庵は嵯峨の奥にあれ

ば、此わたりには今日が初めて。何處にも土地珍しき話一つはある物ぞ、何れ名にし負はば、哀れも一入深草の里と覺ゆるに、話して聞かせずや。老女は笑ひながら「かゝる片邊なる鄙には何珍しき事とは無けれども、其の哀れにて思ひ出だせし、世にも哀れなる一つの話あり。問ひ給ひしが因果、事長くとも聞き給へ。御身の茲に來られし途すがら、溪川の有る邊より、山の方にわびしけなる一棟の僧庵を見給ひしならん。其庵の側に一つの小やかなる新塚あり、主が名は言はで、此の里人は只、戀塚々々と呼びなせり。此の戀塚の謂に就きて、最も哀れなる物語の候なり。」「戀塚とは餘所ながら床しき思ひす、剃らぬ前の我も戀塚の主に半ばなりし事もあれば。言ひつゝ、瀧口呵々と打笑へば、老婆は打消し、「否、笑ふことなし。此月の初頃なりしが、晝にある様な上藤の如何なる故ありてか、かの庵室に籠りたりと想ひ給へ。花ならば蕾、月ならば新月、いづれ末は玉の輿にも乗るべき人が、品もあらんに世を外なる尼法師に様を變へたるは、慕ふ夫に別れてか、情なき人を思ふてか、何の途、戀故ならんとの噂。薪とる里人の話によれば、庵の中には玉を轉ばす如き柔しき聲して、讀經の響絶ゆる時なく、折々閻伽の水汲みに、谷川に下りし姿見たる人は、天人の羽衣脱ぎて

袈裟懸けしとて斯くまで美しからじなど罵り合へりし。心なき里人も世に痛はしく思ひて、色の物など送りて慰むる中、かの上藤は思重りてや、病みつきて程も經ず返らぬ人となりぬ。言ひ残せし片言だに無ければ、誰れも尼になるまでの事の由を知らず、里の人々相集りて涙と共に庵室の側らに心ばかりの埋葬を營みて、空塔婆一基の主とはせしが、誰れ言ふもなく戀塚戀塚と呼びなしぬ。來慣れぬ此里に偶、來て此話を聞かれしも他生の因縁と覺ゆれば、歸途には必らず立寄りて一片の廻向をせられよ。いかに哀れなる話に候はずや。老婆は話し了りて、燃えぬ薪の烟に咽びて、涙押し拭ひぬ。

瀧口もや、哀れを催して、「そは氣の毒なる事なり、其の上藤は何處の如何なる人なりしぞ。」「人の噂に聞けば、御所の曹司なりとかや。」「ナニ曹司とや、其の名は聞き知らずや。」「然れば、最とやさしき名と覚えしが、何とやら、おゝ——それ儘に横笛とやら言ひし。嵯峨の奥に戀人の住めると、人の話なれども、定かに知る由も無し。聞けば御僧の坊も同じ嵯峨なれば、若し心當の人もあらば、此事傳へられよ。同じ世に在りながら、斯かる婉やかなる上藤の様を變へ、思ひ死するまでに情なかりし男こそ、世に罪深き人なれ。他し人の事なが

ら、誠なき男見れば取りも殺したく思はる、よ。餘所の恨みを身に受けて、他とは思はぬ吾が哀れ、老いても女子は流石にやさし。瀧口が様見れば、先の快けなる氣色に引きかへて、首を垂れて物思ひの體なりしが、や、ありて、「あ、餘りに哀れなる物語に、法體にも恥ぢず、思はず落涙に及びたり。主婦が言に従ひ、愚僧は之れより其の戀塚とやらに立寄りて、暫し廻向の杖を停めん」。

網代の笠に夕日を負ふて立ち去る瀧口入道が後姿、頭陀の袋に麻衣、鐵鉢を掌に捧げて八つ目のわらんづ踏みにじる。形は枯木の如くなれども、息ある間は血も有り涙もあり。

第二十三

深草の里に老婆が物語、聞けば他事ならず、いつしか身に振りかゝる哀の露、泡沫夢幻と悟りても、今更ら驚かれぬる世の起伏かな。様を變へしとはそも何を觀じての發心ぞや、憂ひに死せしとはそも誰れにかけたる恨みぞ。あ、横笛、吾れ人共に誠の道に入りし上は、影よりも淡き昔の事は問ひもせじ語りもせじ、閑伽の水汲み絶えて流れに宿す影止らず、觀經

の音已みて梢にとまる響無し。いづれ業繫の身の、心と違ふ事のみぞ多かる世に、夢中に夢を呷ちて我れ何にかせん。

瀧口入道、横笛が墓に來て見れば、墓とは名のみ、小高く盛りし土饅頭の上に一片の窠塔婆を立てしのみ。里人の手向けしにや、半枯れし野菊の花の仆れあるも哀れなり。四邊は斷草離々として趾を着くべき道ありとも覺えず、荒れすさぶ夜々の嵐に、ある程の木々の葉吹き落とされて、山は面瘦せ、森は骨立ちて目もあてられぬ悲惨の風景、聞きしに増さりて哀れなり。あ、是れぞ横笛が最後の住家よと思へば、流石の瀧口入道も法衣の袖を絞らあへず、世にありし時は花の如き艶やかなる乙女なりしが、一旦無常の嵐に誘はれては、いづれ遁れぬ古墳一墓の主かや。そが初めの内こそ憐れと思ひて香花を手向くる人もあれ、やがて星移り歳経れば、冷え行く人の情に隨つて顧みる人も無く、あはれ何れをそれと知る由もなく荒れ果てなんす、思へば果敢なの吾れ人が運命や。都大路に世の榮華を嘗め盡すも、賤が伏屋に畦の落穂を拾ふも、暮らすは同じ五十年の夢の朝夕。妻子珍寶及王位、命終る時に隨ふものはなく、野邊より那方の友としては、結脈一つに珠數一聯のみ。之を想へば世に悲しむべき

ものも無し。

瀧口衣の袖を打はらひ、墓に向つて合掌して言へらく、「形骸は良しや冷土の中に埋れても、魂は定かに六尺の上に聞こしめされん。そもや御身と我れ、時を同じうして此世に生れしは過世何の因、何の果ありてぞ。同じ哀れを身に擔ふて、それを語らふ折もなく、世を隔て様を異にして此の悲しむべき對面あらんとは、そも又何の業、何の報ありてぞ。我は世に救ひを得て、御身は憂きに心を傷りぬ。思へば三界の火宅を逃れて、聞くも嬉しき眞の道に入りし御身の、欣求淨土の一念に浮世の絆を解き得ざりしこそ恨みなれ。戀とは言はず、情とも謂はず、遇ふや柳因、別る、や絮果、いづれ迷ひは同じ流轉の世事、今は言ふべきこと有りとも覺えず。只、此上は夜毎の松風に御魂を澄されて、未來の解脱こそ肝要なれ。仰ぎ願くは三世十方の諸佛、愛護の御手を垂れて出離の道を待せしめ給へ。過去精靈、出離生死、證大菩提。」生ける人に向へるが如く言ひ了りて、暫し默念の眼を閉ぢぬ。花の本の半日の客、月の前の一夜の友も、名残は惜しまるゝ、習ひなるに、一向所感の身なれば、先の世の法縁も淺からず思はれ、流石の瀧口、限り無き感慨胸に溢れて、轉、今昔の情に堪へず。今か

かる哀れを見んことは、神ならぬ身の知る由もなく、嵯峨の奥に夜半かけて迷ひ來りし時は我れ情なくも門をば開けざりき。恥をも名をも思ふ違なく、様を變へ身を殺す迄の哀れの深さを思へば、我こそ中々に罪深かりけれ。あゝ横笛、花の如き姿今いづこにある、菩提樹の陰、明星額を照らす邊、耆闍窟の中、香烟肘を繞るの前、昔の夢を空と見て、猶ほ我ありしことを思へるや否。逢ひ見しとはあらずに、別れ路つちく覺ゆることの、我れながら訝しきよ。思ひ胸に迫りて、吁々と吐く太息に覺えず我れに還りて首を擧ぐれば、日は半西山に入りて、峰の松影色黒み、落葉を誘ふ谷の嵐、夕ぐれ寒く身に浸みて、ばら／＼と顔打つものは、露か時雨か。

第二十四

其の年の秋の暮つた、小松の内大臣重盛、豫ての所勞重らせ給ひ、御年四十三にて薨去あり。一門の人々、恩顧の侍は言ふも更なり、都も鄙もおしなべて、情み惜しまざるはなく、町家は商を休み、農夫は業を廢して哀號の聲到る處に充ちぬ。入道相國が非道の舉動に御恨

みを含みて時の亂を願はせ給ふ法住寺殿の院と、三代の無念を呑みて只すら時運の熟するを待てる源氏の殘黨のみ、内府が遠逝を喜べりとぞ聞えし。

士は己れを知れる者の爲に死せんことを願ふとかや。今こそ法體なれ、ありし昔の瀧口が此君の御爲ならばと誓ひしは天が下に小松殿只一人。父祖十代の御恩を集めて此君一人に報し參らせばやと、風の旦、雪の夕、蛭卷のつかの間も忘る、際も無かりしが、思ひもかけぬ世の波風に、身は嵯峨の奥に吹き寄せられて、二十年來の志も皆空事となりける。世に望みなき身ながらも、我れから好める斯かる身の上に君の思召の如何あらんと、折々思ひ出だされては流石に心苦しく、只、長き將來に覺束なき機會を頼みしのみ。小松殿逝去と聞きては、それも協はず、御名殘今更に惜しまれて、其日は一日坊に閉籠りて、内府が平生など思ひ出で、廻向三昧に餘念なく、夜に入りては讀經の聲いと蕭やかなりし。

先には横笛、深草の里に哀れをとめ、今は小松殿、盛年の御身に世をかへ給ふ。彼れを思ひ是れを思ふに、身一つに降りかゝる憂き事の露しけき今日此ごろ、瀧口三衣の袖を絞りかね、法體の今更遺瀨なきぞいぢらしき。實にや縁に従つて一念頓に自理を悟れども、曠劫

の習氣は一朝一夕に淨むるに由なし。變相殊體に身を苦しめて、有無流轉と觀じても、猶ほ此世の悲哀に離れ得ざるぞ是非も無き。

徳を以て、將人を以て、柱とも石とも頼まれし小松殿、世を去り給ひしより、誰れ言ひ合はさねども、心有る者の心にかゝるは、同じく平家の行末なり。四方の波風靜にして、世は盛りとこそは見ゆれども、入道相國が多年の非道によりて、天下の望み己に離れ、敗亡の機はや熟してぞ見えし。今にも蛭が小島の頼朝にても、筑波おろしに旗揚けんには、源氏譜代の恩顧の士は言はずもあれ、苟も志を當代に得ず、怨みを平家に銜める者、響の如く應じて關八州は日ならず平家の有に非ざらん。萬一斯かる事あらんには、大納言殿(宗盛)は兄の内府にも似ず、暗弱の性質なれば、素より物の用に立つべくもあらず。御子三位の中將殿(維盛)は歌道より外に何長じたる事無き御身なれば、紫宸殿の階下に源家の嫡流と相挑みし父の卿の勇膽ありとしも覺えず。頭の中將殿(重衡)も管絃の奏こそ巧みなれ、千軍萬馬の間に立ちて采配とらん器に非ず。只、數多き公卿殿上人の中に、知盛、教經の二人こそ天晴未來事ある時の大將軍と覺ゆれども、これとても螺鈿の細太刀に風雅を誇る六波羅上下の武士を如

何にするを得べき。中には越中次郎兵衛盛次、上總五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清など、名たる剛者なきにあらねど、言はば之れ匹夫の勇にして、大勢に於て元より益する所なし。思へば風前の燈に似たる平家の運命かな。一門上下花に酔ひ、月に興じ、明日にも覺めなんす榮華の夢に、萬代かけて行末祝ふ、武運の程ぞ淺ましや。

入道ならぬ元の瀧口は平家の武士、忍辱の衣も主家興亡の夢に襲はれては、今にも掃魔の堅甲となりかねまじき風情なり。

第二十五

其年も事無く暮れて、明くれば治承四年、淨海が暴虐は猶ほ已まず、殿とは名のみ、蜘蛛結びこめぬばかりの鳥羽殿には、去年より法皇を押籠め奉るさへあるに、明君の聞え高き主上をば、何の恙もお在さぬに、是非なくおろし參らせ、清盛の女が腹に生れし春宮の今年僅に三歳なるに御位を譲らせ給ふ。あはれ聞きも及ばぬ奇怪の讓位かなとおもはぬ人ぞ無かりける。一秋毎に細りゆく民の竈に立つ烟、それさへ恨みと共に高くは上らず。野邊の草木に

のみ春は歸れども、世はおしなべて秋の暮、枯枝のみぞ多かりける。元より民の疾苦を顧みるの入道ならねば、野に立てる怨聲を何處の風とも氣にかけず、或は嚴島行幸に一門の榮華を傾け盡し、或は新都の經營に近畿の人心を騒がせて少しも意に介せず。世を恨み義に勇みし源三位、數も無き白旗殊勝にも宇治川の朝風に翻へせしが、脆くも破れて空しく一族の血汐を平等院の夏草に染めたりしは、諸國源氏が旗揚の先陣ならんとは、平家の人々いかで知るべき。高倉の宮の宣旨、木曾の北、關の東に普ねく渡りて、源氏興復の氣運漸く迫れる頃、入道は上下萬民の望みに背き、愈、都を攝津の福原に遷し、天下の亂れ、國土の騒ぎを顧みざるは、抑、之れ滅亡を速むるの天意か。平家の末はいよく、遠からじと見えにけり。

右兵衛佐(頼朝)が旗揚に、草木と共に靡きし關八州、心ある者は今更とも思はぬに、大場おほばの三郎が早馬き、て、夢かと驚きし平家の殿原こそ不覺なれ。討手の大將、三位中將維盛卿、赤地の錦の直垂に萌黄匂の鎧は天晴平門公子の容儀に風雅の銘を打つたれども、富士河の水鳥に立つ足もなき十萬騎は、關東武士の笑ひのみにあらず。前の非を悟りて舊都に歸り、さては奈良災上の無道に餘念を漏らせども、源氏の勢ひは日に加はるばかり、覺束なき行末を

夢に見て其年も打ち過ぎつ。治承五年の春を迎ふれば、世愈々亂れ、都に程なき信濃には、木曾の次郎が兵を起して、兵衛佐と相應じて其勢ひ破竹の如し。傾危の際、老いても一門の支柱となる入道相國は折柄怪しき病ひに死し、一門狼狽して爲す所を知らず。墨股の戦ひに少しく會稽の恥を雪ぎたれども、新中納言(知盛)軍機を失して必勝の機を外し、木曾の壓と頼みし城の四郎が北陸の勇を擧りし四萬餘騎、餘五將軍の遺武を負ひながら、横田河原の一戦に脆くも敗れしに驚きて、今はとて平家最後の力を盡して北に打向ひし十五萬餘騎、一門の存亡を賭せし俱利伽羅、篠原の二戦に、哀れや残り少なに打ちなされ、背疵抱へて、すこす都に歸り來りし、打漏されの見苦しさ。木曾は愈々勢ひに乘りて、明日にも都に押寄せんす風評、平家の人々は今は居ながら生ける心地もなく、然りとて敵に向つて死する力もなし。木曾をだに支へ得ざるに、關東の頼朝來らば如何にすべき、或は都を枕にして討死すべしと言へば、或は西海に走つて再舉を謀るべしと説き、一門の評議まちくにして定まらず。前には邦家の急に當りながら、後には人心の赴く所一ならず、何れ變らぬ亡國の末路なりけり。

平和の時こそ、供花焼香に經を翻して、利益平等の世とも感ぜめ、祖先十代と己が半生の歴史とを刻みたる主家の運命日に非なるを見ては、眼を過ぐる雲煙とは瀧口いかで看過するを得ん。人の噂に味方の敗北を聞く毎に、無念さ、もどかしさに耐へ得ず、双の腕を扼して法體の今更變へ難きを恨むのみ。

或日瀧口、關伽の水汲まんとて、まだ明けやらぬ空に往生院を出でて、近き泉の方に行きしに、都六波羅わたりと覺しき方に、一道の火焰天を焦して立上れり。そよとだに風なき夏の曉に、遠く望めば只、朝紅とも見ゆべかんめり。風靜なるに、六波羅わたり斯かる大火を見るこそ訝しけれ。いづれ唯事ならじと思へば何となく心元なく、水汲みて急ぎ坊に歸り、一杖一鉢、常の如く都をさして出で行きぬ。

第二十六

瀧口入道、都に來て見れば、思ひの外なる大火にて、六波羅、池殿、西八條の邊より京白川四五萬の在家、方に煙の中にあり。洛中の民はさながら狂せるが如く、老を負ひ幼を扶け

て火を避くる者、僅の家財を携へて逃ぐる者、或は難咎の中に傷きて助けを求むる者、或は連れ立ちし人に離れて路頭に迷へる者、何れも容姿を取り亂して右に走り左に馳せ、叫喚呼號の響、街衢に充ち満ちて、修羅の巷もかくやと思はれたり。只、見る幾隊の六波羅武者、蹄の音高く馳せ來りて、人波打てる狭き道をば、容赦も無く蹴散し、指して行衛は北鳥羽の方、いづこと問へど人は知らず、平家一門の邸宅、武士の宿所、残りなく火中にあれども消し止めんとする人の影見えす。そも何事の起れるや、問ふ人のみ多くして、答ふる者はなし。全都の民は夢に夢見る心地して、只、心安からず惶れ惑へるのみ。

瀧口、事の由を聞かん由も無く、轟く胸を抑へつつ、朱雀の方に来れば、向ひより形亂せる二三人の女房の大路を北に急ぎ行くに、瀧口呼留めて事の由を尋ねれば、一人の女房立留りて悲しげに、「未だ聞かれずや、大臣殿(宗盛)の思召にて、主上を始め一門残らず西國に落ちさせ給ふぞや、もし縁の人ならば跡より追ひつかれよ。」言捨て、忙しげに走り行く。瀧口、あつとばかりに呆れて、さそくの考も出でず、鬼の如き兩眼より涙をはらくと流し、恨めしげに伏見の方を打ち見やれば、明けゆく空に雲行のみ早し。

榮華の夢早や覺めて、没落の悲しみ方に来りぬ。盛衰興亡はのがれぬ世の習なれば、平家に於て獨り歎くべきに非ず。只、まだ見ぬ敵に怯をなして、軽々しく帝都を離れ給へる大臣殿の思召こそ心得ね。兎ても角ても叶はぬ命ならば、御所の礎枕にして、魚山の夜嵐に屍を吹かせてこそ、散りても芳しき天晴名門の末路なれ。三代の仇を重ねたる關東武士が野馬の蹄に祖先の墳墓を蹴散させて、一門おめく西海の陸に迷ひ行く。とても流さん末の徳名はいざ知らず、まのあたり百代までの恥辱なりと思はぬこそ是非なけれ。

瀧口はまばし無念の涙を絞りしが、せめて焼跡なりとも弔はんと、西八條の方に辿り行けば、夜半にや立ちし、早や落人の影だに見えず、昨日までも美麗に建て連ねし大門高臺、一夜の煙と立ち昇りて、焼野原、茫々として立木に迷ふ鳥の聲のみ悲し。焼け残りたる築垣の蔭より、屋方の跡を眺むれば、朱塗の中門のみ半残りて、門もる人もなし。嗚呼、彼官郎黨の日頃籠に誇り恩を恣にする者、そも幾百千人の多きぞや。思はざりき、主家仆れ城池亡びて、而も一騎の屍を其の焼跡に留むる者無からんとは。けにや榮華は夢か幻か、高厚十年にして立てども一朝の煙にだも堪へず、朝夕玉趾珠冠に容儀を正し、參仕拜趨の人に册かれし

人、今は長汀の波に漂ひ、旅泊の月に跨躡ひて、思寢に見ん夢ならでは還り難き昔、慕ふて益なし。有爲轉變の世の中に、只、最後の潔きこそ肝要なるに、天に背き人に離れ、いづれ遁れぬ終をば、何處まで惜しまるゝ一門の人々ぞ。彼れを思ひ是れを思ひ、瀧口は燒跡にたゞすみて、暫時感慨の涙に暮れ居たり。

稍、ありて太息と共に立上り、昔ありし我が屋敷を打見やれば、其邊は一面の灰燼となりて、何處をそれとも見別け難し。さても我父は如何に志ませしか、一門の人々と共に落人にならせ給ひしか。御老年の此期に及びて、斯かる大變を見せ參らするこそうたてき限りなれ。瀧口今は誰れ知れる人も無き跡ながら、昔の盛り忍ばれて、盡きぬ名残に幾度か振廻りつ、持ちし錫杖重けに打ち鳴らして、何思ひけん、小松殿の墓所指して立去りし頃は、夜明け日も少しく上りて、燒野に引ける垣越の松影長し。

第二十七

世の果を何處とも知らざれば、亡き人の碑にも萬代かけし小松内府の墳墓、見上ぐるばか

りの石の面に彫り刻みたる淨蓮大禪門の五字、金泥の色洗ひし如く猶ほ鮮なり。外には没落の嵐吹き荒さみて、散り行く人の忙しきに、一境閑として聲なき墓門の静けさ、鏗々として響くは松韻、憂々として鳴るは聯珠、世の哀れに感じてや、鳥の歌さへいと低し。

墓の前なる石階の下に跪きて默然として祈念せる瀧口入道、やがて頭を擧げ、泣くく御墓に向ひて言ひけるは、「あゝ、淺ましき御一門の成れの果、草葉の蔭に如何に御覽せられ候やらん。御墓の石にまだ蒸す苔とても無き今日に、早や退没の悲しみに遇はんとは申すも中に愚なり。御靈前に香華を手向くるもの明日よりは有りや無しや。北國、關東の夷共の、君が安眠の砌を駭かせ參らせん事、思へば心外の限りにこそ候へ。君は元來英明にましますば、事今日あらんこと、かねてより悟らせ給ひ、神佛三寶に祈誓して御世を早うさせ給ひけるこそ、最と有り難けれ。夢にも斯くと知りなば不肖時頼、直ちに後世の御供仕るべう候ひしに、性頑冥にして悟り得ず、望み無き世に長生へて斯かる無念をまのあたり見る事のかへすがへすも口惜う候ふぞや、時頼進んでは君が鴻恩の萬一に答ふる能はず、退いては亡國の餘類となれる身の、今更君に合はず面目も候はず。あはれ匹夫の身は物の數ならず、願ふは尊

靈の冥護を以て、世を昔に引き返し、御一門を再び都に納れさせ給へ。
 急きくる涙に咽びながら、搔き口説く言の葉も定かなず、亂れし心を押し鎮めつ、眼を閉ぢ首を俯して石階の上に打伏せば、あやにくや、没落の今の哀れに引き比べて、盛りなりし昔の事、雲の如く胸に湧き、祈念の珠數にはふり落つる懷舊の涙のみ滋し。あゝとばかり我れ知らず身を振はして立上り、踉めく體を踏みまむる右手の支柱、曉の露まだ冷やかなる内府の御墳、哀れ榮華十年の遺物なりけり。

* * * * *

盛りの花と人に惜しまれ、世に歌はれて、春の真中に散りにし人の羨まるゝ哉。陽炎の影より淡き身を慙生き残りて、木枯嵐の風の宿となり果て、は、我が爲に哀れを慰むる鳥も無し、家仆れ國滅びて六尺の身おくに處なく、天低く地薄くして昔をかへす夢も無し。——吁思ふまじ、我ながら不覺なりき、修行の肩に歌袋かけて、天地を一爐と觀ぜし昔人も有りしに、三衣を纏ひ一鉢を捧ぐる身の、世の盛衰に離れ得ず、生死流轉の間に彷徨へること口惜しき至りなれ。世を捨てし昔の心を思ひ出せば、良しや天落ち地裂くるとも、今更驚く謂

れやある。常無しと見つる此世に悲しむべき秋もなく、喜ぶべき春もなく、青山白雲長へに青く長へに白し。あはれ、本覺大悟の智慧の火よ、我が胸に尙ほ蛇の如く縈はれる一切煩惱を渣滓も残らず焼き盡せよかし。

斯くて瀧口、主家の大變に動きそめたる心根を、辛くも抑へて、常の如く嵯峨の奥に朝夕の行を懈らざりしが、都近く住みて、變り果てし世の様を見る事を忍び得ざりけん、其年七月の末、久しく住みなれし往生院を跡にして、飄然と何處ともなく出で行きぬ。

第二十八

昨日は東關の下に轡並べし十萬騎、今日は西海の波に漂ふ三千餘人。強きに附く人の情なれば、世に落人の宿る蔭は無く、太宰府の一夜の夢に昔を忍ぶ違もあらで、緒方に追はれ、松浦に逼られ、九國の山野廣けれども、立ち止るべき足場もなし。去年は九重の雲に見し秋の月を、八重の汐路に打眺めつ、覺束なくも明かし暮らせし壽永二年。水島、室山の二戦に勝利を得しより、勢ひ漸く強く、頼朝、義仲の争ひの際に山陰、山陽を切り従へ、福原の舊

都まで攻上りしが、一の谷の一戦に源九郎が爲に脆くも打破られ、須磨の浦曲の朝風に、散り行く櫻の衰れを留めて、落ち行く先は、門司、赤間の元の海、六十餘州の半を領せし平家の一門、船を繋ぐべき渚だに無く、波のまにまに、行衛も知らぬ梶枕、高麗、契丹の雲の端までもとは思へども、流石忍ばれず。今は尾島の浦に錨を留めて、只すら最後の日を待てるぞ哀れなる。

* * * * *

壽永三年三月の末、夕暮近き頃、紀州高野山を上り行く二人の旅人ありけり。浮世を忍ぶ旅路なればにや、一人は深編笠に面を隠して、顔容知るに由無けれども、其の装束は世の常ならず、古錦襦の下衣に、紅梅蕪黄の浮文に張裏したる狩衣を着け、紫裾濃の袴腰、横幅廣く結び下けて、平塵の細靴、優に下け、摺皮の踏皮に同じ色の行纏穿ちしは、何れ由緒ある人の公達と思はれたり。他の一人は年の頃廿六七、前なる人の従者と覺しく、日に焼け色黒みたれども、眉秀いで眼涼しき優男、少し色剥けたる厚塗の立烏帽子に卯の花色の布衣を着け、黒塗の野太刀を佩きたり。旅慣れぬにや、將永の徒歩に疲れしにや、二人とも弱り果て

し如く、踏み締むる足に力なく青竹の杖に身を持たせて、主従相扶け、喘ぎく上り行く高野の山路、早や夕陽も名残を山の巔に留めて、崖の陰、森の下、恐ろしき迄に黒みたり。秘密の山に常夜の燈無ければ、あなたの木の根、こなたの岩角に膝を打ち足を挫きて、仆れんとする身を辛く支へ、主従手に手を取り合ひて、顔見合す毎に彌増る太息の數、春の山風身に染みて、入相の鐘の音に梵缶の響き幽なるも哀れなり。

十歩に小休、百歩に大憩、辛うじて猶ほ上り行けば、讀經の聲、振鈴の響、漸く繁くなりて老松古杉の木立を漏れて仄に見ゆる諸坊の燈、早や行先も遠からじと勇み勵みて行く程に、間も無く蓮生門を過ぎて主従御影堂の此方に立止りぬ。従者は近き邊の院に立寄りて何事か物問ふ様子なりしが、やがて元の所に立歸り、何やら主人に耳語けば、點頭きて尙も山深く上り行きぬ。

飛鉦地に落ちて嶮に生ひし古松の蔭、半立木を其儘に結びたる一個の庵室、夜毎の嵐に破れ寂びたる板間より、漏る燈の影暗く、香烟窓を迷ひ出で、心細き鈴の音、春ながら物さびたり。二人は此の庵室の前に立ち止まりしが、従者はやがて門に立ちよりて、「瀧口入道殿

の庵室は茲に非ずや。遙々訪ね來りし主従二人、こゝ開け給へ」と呼ばれば、内より燈提
 けて出來りたる一個の僧、「瀧口が庵は此處ながら、浮世の人にはるゞ訪はるゝ覺えはな
 きに」と言つ、訝しげなる顔色して門を開けば、編笠脱ぎつゝ、ツと通る件の旅人、僧は一
 目見るより打驚き、砌にひたと頭を附けて、「これはく」。

第二十九

世移り人失せぬれば、都は今故郷ならず、滿目舊山川、眺むる我も元の身なれども、變
 り果てし盛衰に、憂き事のみぞ多かる世は、嵯峨の里も樂しからず、高野山に上りて早や三
 年、山遠く谷深ければ、入りにし跡を訪ふ人としてあらざれば、松風ならで世に友もなき庵室
 に、夜に入りて訪れし其人を誰れと思ひきや、小松の三位中將維盛卿にて、それに従へるは
 足助二郎重景ならんとは。夢かとはかり驚きながら、扶け參らせて一間に招じ、身は遙に廣
 を隔て、拜伏しぬ。思ひ懸けぬ對面に左右の言葉もなく、先だつものは涙なり。瀧口つらつ
 ら御容姿を見上ぐれば、没落以來、幾その艱苦を忍び給ひけん、御顔復せ衰へ、青總の髮疎

かに、紅玉の膚色消え、平門第一の美男と唱はれし昔の様子、何ごとと疑はるゝばかり、年
 にもあらで老い給ひし御面に、故内府の佛あるも哀れなり。「こは現とも覺え候はぬものか
 な。扱も屋島をば何として遁れ出でさせ給ひけん。當今天が下は源氏の勢に充ちぬるに、そ
 も何地を指しての御旅路にて候やらん。維盛卿は涙を拭ひ、「さればとよ、一門没落の時は
 我も人並に都を立ち出でて西國に下りしが、行くも歸るも水の上、風に漂ふ波枕に此三年の
 春秋は安き夢とは無かりしぞや。或はよるべ無き門司の沖に、磯の千鳥とともに泣き明か
 し、或は須磨を追はれて明石の浦に昔人の風雅を羨み、重ね重ねし憂事の數、堪へ忍ぶ身に
 も忍び難きは、都に残せし妻子が事、波の上起居する身のせん術無ければ、此の年月は心
 にもなき疎遠に打過ぎつ。嗚や我を恨み居らんと思へば彌増す懐しさ。兎ても亡びんうたか
 たの身にしあれば、息ある内に、最愛しき者を見もし見られもせんと辛くも思ひ決め、重景
 一人伴ひ、夜に紛れて屋島を逃れ、數々の憂き目を見て、阿波の結城の浦より名も恐ろしき
 鳴門の沖を漕ぎ過ぎて、辛く此地までは來つるぞや。憐れと思へ瀧口。打ち萎れし御有様、
 重景も瀧口も只、袂を絞るばかりなり。瀧口、「優に哀れなる御述懐、覺えず法衣を沾し申

しぬ。然るにても如何なれば都へは行き給はで、此山には上り給ひし。維盛卿は太息吐き給ひ、「然ればなり、都に直に歸りたき心は山々なれども、熱思へば、斯かる體にて關東武士の充てる都の中に入らんは、捕はれに行くも同じこと、先には本三位の卿(重衡)の一の谷にて擒となり、生恥を京鎌倉に曝せしさへあるに、我れ平家の嫡流として名もなき武士の手にかゝらん事、如何にも口惜しく、妻子の愛は燃ゆるばかりに切なれども、心に心を争ひて辛く此山に上りしなり。高野に汝あること風の便に聞きしゆゑ、汝を頼みて戒を受け、様を變へ、其上にて心安く都にも入り、妻子にも遇はばやとこそ思ふなれ」。

瀧口は首を床に附けしまゝ、暫し泪に咽び居たりしが、「都は君が三代の故郷なるに、様を變へては御名も唱へられぬ世の變遷こそ是非なけれ。思へば故内府の恩顧の侍、其数を知らざる内に、世を捨てし瀧口の此期に及びて君の御役に立たん事、生前の面目此上や候べき。故内府の鴻恩に比へては高野の山も高からず、熊野の海も深からず、いづれ世に用なき此身なれば、よしや一命を召され候とも苦しからず。あゝ斯かる身は枯れても折れても野末の朽木、素より物の數ならず。只、金枝玉葉の御身として、定めなき世の波風に漂ひ給ふこと、

御痛はしう存じ候。言ひつゝ涙をはらくと流せば、維盛卿も重景も、昔の身の上思ひ出でて、泣くより外に言葉もなし。

第三十

二人の賓客を次の室にやすませて、瀧口は孤燈の下に只一人寢もやらず、つらく思廻らせば、痛はしきは維盛卿が身の上なり。誰れあらん小松殿の嫡男として、名門の跡を繼ぐべき御身なるに、天が下に此山ならで身を寄せ給ふ處なきまでに零落れさせ給ひしは、過世如何なる因縁あればにや。習ひもおおさぬ徒歩の旅に、知らぬ山川を遙るゝ彷徨ひ給ふさへあるに、玉の襖、錦の床に隙も風も厭はれし昔にひき換へて、露にも堪へぬかゝる破屋に一夜の宿を願ひ給ふ御可憐しさよ。變りし世は隨意ならで、指せる都には得も行き給はず、心にもあらぬ落髪を遂てだに、相見んと焦れ給ふ妻子の恩愛は如何に深かるべきぞ。御容さへ瘵れさせ給ひて、此年月の忍び給ひし憂事も思ひやらる。思ひ出せば治承の春、西八條の花見の宴に、櫻かざして青海波を舞ひ給ひし御姿、今尙ほ昨の如く覺ゆるに、脇を勤めし重景

さへ同じ落人となりて、都ならぬ高野の夜嵐に、昔の哀れを物語らんとは、怪しきまで奇しき縁なれ。あはれ、肩に懸けられし恩賜の御衣に一門の譽を擔ひ、並み居る人よりは深山木の楊梅と稱へられ、枯野の小松と歌はれし其時は、人も我も誰れかは今日あるを想ふべき。昔は夢か今は現か。十年にも足らぬ間に變り果てたる世の様を見るもの哉。

果しなき今昔の感慨に、瀧口は柱に凭りしまゝ、まばし茫然たりしが、不圖電の如く胸に感じて、想ひ起したる小松殿の言葉に、響みし眉動き、沈みたる眼閃めき、顔せし膝立て直して屹と衣の襟を搔合はせぬ。思へば思へば、情なき人を恨み詫びて様を變へんと思ひ決めつゝ、餘所ながら此世の告別に伺候せし時、世を捨つる我とも知り給はで、頼み置かれし維盛卿の御事、盛りと見えし世に衰へん世の末の事、愚なる我の思ひ料らん由もなければ少しも心に懸けざりしが、扱は斯からん後の今の事を仰せ置かれしよ。『少將は心弱き者、一朝事あらん時、妻子の愛に惹かされて未練の最後に一門の恥を暴さんも測られず、時頼、たのむは其方一人。幾度と無く繰返されし御仰、六波羅上下の武士より、我れ一人を擇ばれし御心の、我は只、忝さに前後をも辨へざりしが、今の維盛卿の有様、正に御遺言に適中せり。都を跡に

西國へ落ち給ひしさへ口惜しきに、屋島の浦に明日にも亡びん一門の人々を振り捨て、武士は櫻木、散りての後の名をも惜しみ給はで、妻子の愛にめ、しくも茲まで迷ひ來られし御心根、哀れは深からぬにはあらねども、平家の嫡流として未練の譏りは末代までも逃れ給はじ。斯くならん末を思ひ料らせ給ひたればこそ、故内府殿の扱こそ我に仰せ置かれしなれ。此處ぞ御恩の報じ處、情を殺し心を鬼にして、情なき諫言を進むるも、御身の爲め御家の爲め、さては過ぎ去り給ひし父君の御爲ぞや。世に埋木の花咲く事も無かりし我れ、圖らずも御恩の萬一を報ゆるの機會に遇ひしこそ、息ある内の面目なれ。あゝ然なり、然なりと點頭きしが、然るにても痛はしきは維盛卿、斯かる由ありとも知り給はで、情なき者よ、變りし世に心までがと、一圖に我を恨み給はん事の心苦しきよ。あゝ忠義の爲めとは言ひながら、君を恨ませ、辱しめて、仕たり顔なる我はそも何の因果ぞや。

義理と情の二岐かけて、瀧口が心はとつおいつ、外には見えぬ胸の嵐に亂脈打ちて、暫時思案に暮れ居しが、やゝありて、兩眼よりはらくと落涙し、思はず口走る絞るが如き一語『オ御許あれや、君。言ひつゝ、眼を閉ぢ、維盛卿の御寢間に向ひ岸破と打伏しぬ。』

折柄杉の妻戸を徐ろに押し開くる音す、瀧口首を擧げ、燈差し向けて何者と打見やれば、足助二郎重景なり。端なくは進まず、首を垂れて萎れて出でたる有様は仔細ありけ也。瀧口訝しげに、「足助殿には未だ御寝ならざるや」と問へば、重景太息吐き、「瀧口殿」、聲を忍ばせて、「重景改めて御邊に謝罪せねばならぬ事あり。」「何と仰せある」。

第三十一

何事と眉を擧むる瀧口を、重景は怯ろしげに打ち睨り、「重景、今更御邊と面合する面目も無けれども、我身にして我身にあらぬ今の我れ、逃れんに道も無く、厚かましくも先程よりの體たらく、御邊の目には嘘や厚顔とも鐵面とも見えつらん。維盛卿の前なれば心を明さん折も無く、暫しの間ながら御邊の顔見る毎に胸を裂かるゝ思ひありし、そは他事にもあらず、横笛が事」。言ひつゝ、瀧口が顔、竊むが如く見上ぐれば、默然として眼を閉ぢしまゝ、衣の袖の揺ぎも見せず。「世を捨てし御邊が清き心には、今は昔の恨みとて残らざるべけれ共、凡夫の悲しさは、一度犯せる悪事は善きにつけ悪しきにつけ、影の如く附き纏ひて、此の年

月の心苦しき、自業自得なれば誰れに向ひて憂を分たん術も無く、なせし罪に比べて只々我が苦しみの輕きを恨むのみ。喃、瀧口殿、最早や世に浮ぶ瀬も無き此身、今更惜しむべき譽も無ければ、誰れに恥づべき名もあらず、重景が一期の懺悔聞き給へ。御邊の可惜武士を捨て、世を遁れ給ひしも、扱は横笛が深草の里に果敢なき終りを遂けたりしも、起りを糺せば皆此の重景が所業にて候ぞや。瀧口は猶ほも默然として、聞いて驚く様も見えず。重景は語を續けて、「事の始めはくだしければ言はず、何れ若氣は春の駒、止めても止らぬ戀路をば行衛も知らず踏み迷ふて、瘦す憂身も誰れ故とこそ思ひけめ。我が心の萬一も酌みとらで、何處までもつれなき横笛、冷泉と云へる知れる老女を懸橋に様子を探れば、御身も疾くより心を寄する由。扱は横笛、我に難面きも御邊に義理を立つる爲と、心に嫉ましく思ひ、彼の老女を傳手に御邊が事、色々悪様に言ひなせし事、いかに戀路に迷ひし人の常とは言へ、今更我れながら心の程の怪しまるゝばかり。又夫れのみならず、御邊に横笛が事を思ひ切らせん爲め、潛かに御邊が父左衛門殿に、親實を上べに言ひ入れしこともあり、皆之れ重景ならぬ女色に心を奪はれし戀の奴の爲せし業、云ふも中々慚愧の至りにこそ。御邊が世を捨てしと

聞きて、あゝ許し給へ、六波羅の人々知るも知らぬも哀れと思はざるは無かりしに、同じ小松殿の御内に朝夕顔を見合せし朋輩の我れ、却て心の底に喜びしも戀てふ悪魔のなせる業。あはれ時こそ來りたれ、外に戀を争ふ人無ければ、横笛こそは我れに靡かめと、夜となく晝とも言はず掻口説きしに、思ひ懸けなや、横笛も亦程なく行衛えれずなりぬ。跡にて人の噂に聞けば、世を捨つるまで己れを慕ひし御邊の誠に感じ、其身も深草の邊に庵を結びて御邊が爲に節を守りしが、乙女心の憂に耐へ得で、秋をも待たず果敢なくなりしとかや。思ひし人は世を去りて、残る哀れは我れにのみ集まり、迷の夢醒めて、初めて覺る我身の罪、あゝ我れ微りせば、御邊も可惜武士を捨てじ、横笛も亦世を早うせじ、とても叶はぬ戀とは知らで、道ならぬ手段を用ひても望みを貰かんと務めし愚さよ。唯、我れありし爲め浮世の義理に明けては言はぬ互の心、底の流れの通ふに由なく、御邊と言ひ、横笛と言ひ、皆盛年の身を以て、或は墨染の衣に世を通れ、或は咲きもせぬ蕾のまゝに散り果てぬ、世の恨事何物も之に過ぐべうも覺えず。今宵端なく御邊に遇ひ、ありしにも似ぬ體を見るにつけ、皆是れ重景が爲せる業と思へば、いふせき庵に多年の行業にも若し知り給はば、嗚や我を恨み給ひけ

ん。——此期に及び多くは言はじ、只々御邊が許しを願ふのみ。慚愧と悲哀に情迫り聲さへうるみて、額の汗を拭ひ敢へず。

重景が事、斯くあらんとは豫てより略々察し知りし瀧口なれば、さして騒がず、只、横笛が事、端なく胸に浮びては、流石に色に忍びかねて、法衣の濡るゝを覺えず。打蕪れたる重景が様を見れば、今更憎む心も出でず、世にときめきし昔に思ひ比べて、哀れは一入深し。『若き時の過失は人毎に免れず、懺悔めきたる述懐は瀧口却て迷惑に存じ候ぞや。戀には脆き我れ人の心、など御邊一人の罪にてあるべき。言ふて還らぬ事は言はざらんには若かず、何事も過ぎし昔は恨みもなく喜びもなし。世に望みなき瀧口、今更何隔意の候べき、只々世にある御邊の行末永き忠勤こそ願はしけれ』。淡きこと水の如きは大人の心か、昔の仇を夢と見て、今の現に報ひんともせず、恨みず、亂れず、光風霽月の雅量は流石は世を觀じたる瀧口入道なり。

早ほのくくと明けなんす春の曉、峰の巔、空の雲ならで、まだ照り染めぬ旭影。霞に鎖せる八つの谷間に「夜」尙ほ彷徨ひて、梢を鳴らす清嵐に鳥の聲尙ほ眠れるが如し。遠近の僧院庵室に漸く聞ゆる經の聲、鈴の響、浮世離れし物音に曉の静けさ一入深し。まことや帝城を離れて二百里、郷里を去りて無人正、同じ土ながらさながら世を隔てたる高野山、眞言祕密の靈跡に感應の心も轉々澄みぬべし。

竹苑椒房の昔に變り、破れ頽れたる俗庵に如何なる夜をや過し給へる、露深き枕邊に夕の夢を残し置きて起出で給へる維盛卿。重景も共に立ち出でて、主や何處と打見やれば、此方の一間に瀧口入道、終夜思ひ煩ひて顔の色徒ならず、肅然として佛壇に向ひ、眼を閉ぢて祈念の體、心細くも立ち上る一縷の香煙に身を包ませて、爪繰る珠數の音訝えたり。佛壇の正面には故内府の靈位を安置しあるに、維盛卿も重景も、是れはとばかりに拜伏し、共に祈念を凝らしける。

聽て看經終りて後、維盛卿は瀧口に向ひ、「扱も殊勝の事を見るものよ、今廣き日の本に、淨蓮大禪門の御靈位を設けて、朝夕の廻向をなさんもの、瀧口、爾ならで外に其人ありとも

覺えざるぞ。思へば先君の被官内人、幾百人と其の數を知らざりしが、世の盛衰に隨れて、多くは身を浮草の西東、舊の主人に弓引くものさへある中に、世を捨て、さへ昔を忘れぬ爾が殊勝さよ。其れには反して、世に落人を見る影もなき今の我身、草葉の蔭より先君の嘿かし腑甲斐なき者と思ひ給はん。世に望みなき維盛が心にかゝるは此事一つ」。言ひつゝ、涙を拭ひ給ふ。

瀧口は默然として居たりしが、暫くありて屹と面を挙げ、襟を正して維盛が前に恭しく兩手を突き、「然ほど先君の事御心に懸けさせ給ふ程ならば、何とて斯かる落人にはならせ給ひしぞ」。意外の一言に維盛卿は膝押進めて「ナ何と言ふ」。『御驚きは然ることながら、御身の爲め、又御一門の爲め、御恨みの程を身一つに忍びて瀧口が申上ぐる事、一通り御聞きあれ。そも君は正しく平家の嫡流にてお在さすや。今や御一門の方々屋島の浦に在りて、生死を一にし、存亡を共にして、回復の事はぬまでも、押寄する源氏に最後の一矢を酬ひんと日夜肝膽を碎かるゝ事申すも中々の事に候へ。そも壽永の初め、指す敵の旗影も見で都を落ちさせ給ひしさへ平家末代の恥辱なるに、せめて此上は、一門の將士、御座船枕にして屍を

西海の波に浮べてこそ、天晴名門の最後、潔しとこそ申すべけれ。然るを君には宗族故舊を波濤の上に振捨て、妻子の情に迷はせられ、斯く見苦しき落人に成らせ給ひしぞ心外千萬なる。明日にも屋島没落の曉に、御一門残らず雄々しき最後を遂げ給ひけん時、君一人は如何にならせ給ふ御心に候や。若し又關東の手に捕はれ給ふ事のあらんには、君こそは妻子の愛に一門の義を捨て、死すべき命を卑怯にも遁れ給ひしと世の口々に嘲られて、京鎌倉に立つ浮名をば君には風やいづこと聞き給はんずる御心に候や。申すも恐れある事ながら、御父重盛卿は智仁勇の三徳を具へられし古今の明器、敵も味方も共に景慕する所なるに、君には其の正嫡と生れ給ひて、先君の譽を傷けん事、口惜しくは思さずや。本三位の卿の嫡となりて京鎌倉に恥を曝せしこと、君には口惜しう見え給ふほどならば、何とて無官の大夫が健氣なる討死を譽とは思ひ給はぬ。あはれ君、先君の御事、一門の恥辱となる由を思ひ給はば、願くは一刻も早く屋島に歸り給へ、瀧口、君を宿し參らする庵も候はず。あゝ斯くつれなく待遇し參らするも、故内府が御恩の萬分の一に答へん瀧口が微衷、詮する處、君の御爲を思へばなり。御恨みのほどもさこそと思ひ遣らるれども、今は言ひ解かん術も無し。何事も申

さず、只々屋島に歸らせ給ひ、御一門と生死を共にし給へ。思ます、憚らず、涙ながらに諫むる瀧口入道。維盛卿は至極の道理に面目なけに差し俯き狩衣の御袖を絞りかねしが、言葉も無く、ツと次の室に立入り給ふ。跡見送りて瀧口は、其の儘岸破と伏して男泣きに泣き沈みぬ。

第二十三

よもすがら恩義と情の岐蒼に立ちて、何れをそれと決め難し瀧口が思ひ極めたる直諫に、さすがに御身の上を恥らひ給ひてや、言葉も無く一間に入りし維盛卿、吁々思へば君が馬前の水つぎ執りて、大儀ぞの一聲を此上なき譽と人も思ひ我れも誇りし日もありしに、如何に末の世とは言ひながら、露忍ぶ木蔭も無く彷徨ひ給へる今の痛はしきに、快き一夜の宿も得せず、面のあたり主を恥しめて、忠義顔なる我はそも如何なる因果ぞや。末望みなき落人故の此つれなさと我を恨み給はんことのうたてさよ。あはれ故内府在天の靈も照覽あれ、血を吐くばかりの瀧口が胸の思ひ、聊か二十餘年の御恩に酬ゆるの寸志にて候ぞや。

松杉暗き山中なれば、傾き易き夕日の影、はや今日の春も暮れなんす。姿ばかりは墨染にして、君が行末を嶮しき山路に思ひ較べつ、溪間の泉を関伽桶に汲取りて立ち歸る瀧口入道、庵の中を見れば、維盛卿も重景も、何處に行きしか、影も無し。扱は我が諫めを納れ給ひて屋島に歸られしか、然るにても一言の我に御告知なき訝しさよ。四邊を見廻せば不圖眼にとまる經机の上にある薄色の折紙、取り上げ見れば維盛卿の筆と覺しく、水莖の跡鮮やかに走り書せる二首の和歌、

かへるべき梢はあれどいかにせん

風をいのちの身にしあなれば

濱千鳥入りにし跡をあらせねば

潮のひる間に尋ねてもみよ

哀れ、御身を落葉と觀じ給ひて元の枝をば屋島とは見給ひけん、入りにし跡を何處とも知らせぬ濱千鳥、潮千の磯に何を尋ねよとや。——扱はとばかり瀧口は、折紙の面を凝視めつゝ、暫時茫然として居たりしが、何思ひけん、豫じめ秘藏せし昔の名残の小鍛冶の鞘巻、狼狽し

く取出して衣の袖に隠し持ち、麓の方に急ぎける。

路傍の家に維盛卿が事それとなしに尋ねれば、狩衣着し侍二人、麓の方に下りしは早や程過ぎし前の事なりと答ふるに、愈々足を早め、走るが如く山を下りて、路すがら人に問へば、尋ねる人は和歌の浦さして急ぎ行きしと言ふ。瀧口胸愈々轟き、氣も半亂れて飛ぶが如く濱邊をさして走り行く。雲に聳ゆる高野の山よりは、眼下に瞰下す和歌の浦も、歩めば遠き十里の郷路、元より一刻半晌の途ならず。日は既に暮れ果て、朧けながら照り渡る彌生半の春の夜の月、天地を鎖す青紗の幕は、雲か烟か、將た霞か、風雅のすさびならで、生死の境に争へる身のけに一刻千金のタかな。夢路を辿る心地して、瀧口は夜もすがら馳せて辛く着ける和歌の浦。見渡せば海原遠く烟籠めて、月影ならで物もなく、濱千鳥聲絶えて、浦吹く風に音澄める磯馴松、波の響のみいと冴えたり。入りにし人の跡もやと、此處彼處彷徨へば、とある岸邊の大なる松の幹を削りて、夜目にも著き數行の文字、月の光に立寄り見れば、南無三寶。『祖父太政大臣平朝臣清盛公法名淨海、親父小松の内大臣左大將重盛公法名淨蓮、三位中將維盛年二十七歳、壽永三年三月十八日和歌の浦に入水す、従者足助二郎重景二十五歳

殉死す。墨痕淋漓として乾かざれども、波靜かにして水に哀れの痕も残らず。瀧口は、あ
はやと計り松の根元に伏轉び、「許し給へ」と言ふも切なる涙聲、哀れを返す何處の花ぞ、行
衛も知らず二片三片、誘ふ春風は情か無情か。

* * * * *

次の日の朝、和歌の浦の漁夫、磯邊に来て見れば、松の根元に腹掻切りて死せる一個の僧
あり。流石汚すに忍びでや、墨染の衣は傍らの松枝に打ち懸けて、身に纏へるは練布の白衣、
脚下に綿津見の淵を置いて、又持つ手に毛程の筋の亂れも見せず、血汐の糊に塗れたる朱満
の鞘巻逆手に握りて、膝も頼さず端坐せる姿は、何れ名ある武士の果ならん。

嗚呼是れ、戀に望みを失ひて、世を捨てし身の世に捨てられず、主家の運命を影に負ふて
二十六年を盛衰の波に漂はせし、齋藤瀧口時頼が、まこと浮世の最後なりけり。

(明治二十七年二月頃)

感

想

流 砂

此一篇は佛國の小説大家ピクトル・ユーゴー氏の筆に係るものにして、其敘事の勁健なる、其意匠の偉拔なる、通讀一遍、奇氣紙面に溢るゝを覺ゆ。余愛讀措く能はず、戯れに之を譯して以て貴誌に投ず。只、恨む、文辭拙劣、原文の金玉をして瓦礫とならしめ、ユーゴー氏を誦ゆるの甚しきを。

退潮の時に當りて海岸より遙に離れたる濱邊を歩行する人——旅客又は漁人——が、不意に其歩行に或困難を覺ゆるは、ブリタニー若しくはスコットランドの海岸に於て聞々ある事實なり。彼れの脚下にある土質は恰も瀝青の如く、彼れの靴底は之に固着せるなり、これ最早や其土質は砂にあらず、これ實に膠の如くなれるなり。海岸は全く乾燥せり。然れ共彼れが其歩を運ぶ毎に、其足趾を擧ぐるや否や、其跡に水を充^みせる彼れの靴の摸型を殘すなり。

然れども其眼は何等の異狀をも認め得ず、茫々たる海邊は平滑なること鏡の如く、閑靜なること夜の如く、(砂は皆一様の外觀を呈す)、何物も何れの處が堅牢なるか將^はたらざるか

を區別し得ず。織砂の樂しげなる雲は絶えず旅客の足の上に亂飛せり。旅客は其路を求めて岸邊の方に進み行き、陸上に近寄らんと務めたり。彼は少しも憂ふる所なし、——何物に向つて憂ふべき歟——只、彼は足の重さが其歩む歩數に随つて漸く増加する如く感ずるのみ。

忽然として彼は沈み入り、彼は二三寸沈み入り、蓋し彼は其正しき路上に在らざるなり。彼は其確かなる方向を執らんが爲に留れり、同時に彼は其足を監視せり、彼れの足は消え失せり、砂の之を掩へるなり。彼は其兩足を砂中より引き拔けり。如斯すること數次、彼れの歩は爲に一所を追跡するに過ぎず、彼は後を振り回れり、砂は其脚蹠を掩没せり。彼は其身を引出して左側に投じたり——。砂は其脚の半を没し去れり。彼は其體を右側に投じたり——。砂は其脛部に上り來れり。

此時彼は名狀すべからざる恐れを以て、其身の誤つて流砂の中に陥れることを想起せり。又彼れの足下には魚類の泳ぎ得る外、何物も何人も決して歩むべからざる恐るべき物質の存在せることを初めて想起せり。彼は彼れの荷物を投げ出せり、彼は恰も危難に遭へる船舶の如く其身を輕うせり、然れども時既に遅し、砂は最早や彼れの膝の上にある。

彼は叫べり、彼は彼れの帽子と手巾を振り上げて救ひを求めたり——。砂は次第々々に彼を没し來れり。若し岸にして破壊するあらば、若し陸にして遠隔するあらば、若し砂堤にして薄弱なるあらば、若し勇氣ある救手に際會する無ければ、彼れの事は全く終れるなり。彼れの運命は將に封印せらるべし。

ア、彼は此恐ろしき埋葬に藉没せられたり——。埋葬、永くして確實なる、人力の左右すべからざる、其死を緩め或は急にすべからざる、幾多の時限の間苦しまざるべからざる、幾多の時限の間死する能はざる埋葬、——埋葬、其身は直立し其動作は自由にして且つ其體は充分に健康なる彼が其力を盡す毎に叫びの聲を擧ぐる毎に、少しづつ、漸々彼れを引沈むる、其沈むや恰も免るべからざる自然の勢ひに抵抗したるの罰として其身を没せらるゝ如く見ゆる埋葬——、埋葬、彼が地平線、樹木、青野を眺むる間に、原中の村落より立上る煙、海上の船舶に掛れる帆を眺むる間に、快よけに舞ひつ歌ひつある鳥を眺むる間に、日光を眺むる間に、蒼空を眺むる間に、徐ろに彼れを地中に沈むる埋葬！。

此奇怪なる墓地は今は一の潮となりて、其波動は一個の生活せる人に向つて地底より起り

來れり、各分秒は彼れの爲には無慈悲なる埋葬者なり。此憫れむべき犠牲は踞坐せんと試みたり、横臥せんと試みたり、然れ共其一舉一動は只益速に彼れを埋るあるのみ。彼は慟哭せり、哀願せり、雲に叫べり、彼は其双手を握めり、失望せり。

見る／＼彼は腰深の砂中に沈み入り。砂は彼れの胸に達せり——。今や彼は只一個の半身像に過ぎざるなり。彼は高く其兩腕を掲げ、悲しげなる呻きを發し、其爪を以て海岸を攫み、此軟かなる鞘裏より其身を引き出さんが爲に、彼れの双臂の上に寄り掛り、狂氣の如く飲泣せり。砂は上れり、砂は彼れの肩に達したり、砂は彼れの頸に達したり、今や見るべきものは只獨り彼れの頭のみ。

彼れの口は叫べり、砂は之を充たせり——。沈然、彼れの眼は猶ほ睜視せり。彼は之を閉ぢ寒きぬ——。暗夜、彼れの額は次第に滅殺せり、終に纒かなる毛髪は砂上に振り亂れ、一個の首は流砂の表面に突出し、動き……振り……遂に沈み失せり。嗟吁、不運なる人の最後！。

(明治二十三年五月)

吾 妹 の 墓

人はそも何物ぞや、渠の勞作を要する時は、渠の精力は渠を見棄つるなり、設令ひ渠は一度快樂の潮に泳ぐとも、早晚悲哀の流に立たざるを得ず。設令ひ其の希望は不滅なりとするも、其身は直ちに冷やかなる黄土に歸らざるべからず。——ゲーテ

あ、吾妹や、吾妹や、菩提樹の影暗き處、耆闍窟の道幽かなる畔、人天三有の累を逃れて緣覺四諦の法輪をや轉ぜる。一章の幻質、脱するに途なく、毘尼の法席、陪するに由なき、哀れ此身は一彈指、壯士午日の夢の間に、輪廻に迷ふぞ恨なる。

ありし昔を尋ねれば、空に歸れど其影は、いとも定かに、うつり見ゆ。籬に咲ける白菊の、花も其名に打連れて、妹が笑顔を遺すなり。結ほる胸の此恨み、解くる涙の一ふしは、吾亡妹によき手向。いでやいで、心ならずも、「思ふこと心に協ふ身なりせば、秋の哀れを深く知らまし」。

* * * * *

思ふにまかせぬ我夢は、たどりくつて茲いづこ。

青葉隠れの一林、時鳥、泣音を茲に停めてより、誰が染めたりし緑の陰、空低き月影は、木立を漏れて、夜半にや忍べる。葉末の露にのみ、残むの佛ぞ映れる。縹渺一條の煙、雲かあらぬか、まだ朝風に消えやらで、尙ほ小川の岸に搖曳く。裳裾を濡らす露をも厭はで、蟬の小川の丸木橋、渡りぐるしき歩みをば、只一すぢに思ひなす、我身茲へは何の爲、野路の景色に迷へるか。露の干ぬ間の姫百合を、手打らん爲に來れるか。あゝ吾、吾、吾。清き流の水面は、映れる吾の面影に、悲哀の波を寄するなり。あはれ、あなたの一丘は、いとしき——いとしき妹の墓なれば。想ふ、青苔墓上斷腸の人、青苔墓下不歸の客、相對し相思ふ、幾年月の夜毎ぞや。墓畔の荒草烟に咽んで葉漸く細く、塔下の寒苔涙に潤ひて色漸く淡きも、吾身のみなど曠劫不滅の迷を解脱するに術なきや。峰の松風身に浸みて、無常を悟る心には、此世は假の宿なり、未來ぞ眞の樂土なる。衆縁相因り、四大相扶くれども、形神常に相背く。空なれや、吾等の樂しみ、色つきたる罔雨の、往きては復へる夢現境、念々電光一刹那、一轉息絶ゆれば、卽是來生。——悟り果てても悟られぬ、こゝ一段の不還界、涙ある身ぞ是非もなき。

見渡せばく、膝をまくす夏草は、眠れる妹が胸の上に、陰黒きまで生茂り、ありし昔の面影は、いづこぞ、尋ぬ由もなし。薔薇にも色香なき唇は、今は閉ぢられて——今や永久閉ぢられて、眞珠を欺く双の眼は、濕りたる土の塞ぐなり。濕りたる土は天を閉ぢ、濕りたる土は宇宙を掩ひ、あゝ茲に吾妹は、重き、重き眠に就けるなり。

那の美しき額には、不死の望みぞ輝きにき、那の緑なす黒髪には、不滅の色ぞ顯れにき。暗をも照らす其の笑は、此世の悲哀をば露止めず、妙なる聲の響には、天上の樂を移せるなり。天女の佛はありながら、地上に生れしぞ恨なる。不死の望みも今は早や、不滅の色も今は早や、果てなき黄土に迷ふらめ。松風凄き夜半の月のみ、墓上を照らす光變らず。あゝ、茲に吾妹は、重き重き眠に就けるなり。

木葉は秋に散りぬるも、又來ん春に萌え出なん、など單獨り吾妹は、覺めぬ眠に就きしぞや。彼の青山は誰が爲に長へなる、彼の江水は誰が爲に窮りなき。孤墳、江山、見來れば之れ如何なる比較ぞや、情無き無言の嘲り、「悠久」は只、恨を益すあるのみ。哀れ夢とは露知

らで、消えにし春の色香をば、梢の霜に求むなる秋の蝴蝶と吾身とは、同じ夢路をたどるなり。

あゝ吾妹や、吾妹や、昔時爾ありし時、天地の間、吾に耦ありき。勞れる胸は爾の爲に憩ひ、傷める心は爾の爲に和らぎ、悲める情は爾の爲に喜び、憂ふる思は爾の爲に笑へり。秋を吹寄する嵐さへ、哀れを飛ばす落葉さへ、爾ある吾には春風、春花と擬ふも爾のへなり。

汝去りし後、天の何れに笑ある、地の何こに春やある。望なく、樂なく、塊然立てる我身には、宇宙は虚空に等しきなり。答なき妹が墓より、見ゆるは只、一の暗黒のみ。嗚呼逝けるも心足らざる乎、残れるもの情餘りある乎。轍穿ち雀飛び、途遙かにして命異り。「思ふ事心に協ふ世なりせば、秋の哀」を知れる身の、春に笑はん術もがな。

(明治二十四年)

戀情論

幼より佚游放樂の生を送り、浮風靡俗の間に人と爲りたる者は、「戀」の話を以て悉く詩人小説家の空想なりとし、一笑に附するを常とす。然れども之れ人情を解せざる者の言のみ。余は人間天性の上に於ける幾多の觀察によりて、其の然らざるを認むるなり。設令身は紛々たる世事の間にあり、冷然として心なきこと枯木の如く、淡然として情なきこと死灰の如きも、人間固有の情性に至つては決して消却し去りたるにあらず、一團の情火は尙ほ炎々として其の胸奥に隠在し、之に觸るゝに一點の星火を以てせば、奔騰暴發、其身を亡ほし、其心を傷る者、比々皆然り。余は彼の傷心の婦人に於てか之を見る。然れども余は之を以て吾人男子の爲に危険なる情性となす者に非ず、只、彼の可憐なる幾多の好少女を騙りて、苦頭墓蔭の客とならしむるに至つては、余の固く信じて疑はざる所なり。

夫れ男子は、素志氣高聳、意情快活なるを以て、奮つて身を社會の奔流に投じ、世事糾紛の間に處して自己の慾望を愈せんとするは勢ひの自然なり。戀情の如きは唯に其の壯時の一修飾に過ぎざるのみ。其の望む所は名譽にあり、幸福にあり、財産勢力にあり、事成らずんば世上を攪盡して猶ほ已まざるなり。然れども婦人の一生は愛情の歴史なり、其心は即ち其

の世界なり、故に其の苦しむや必ず心に於てし、其の楽しむや亦必ず心に於てす、其の立命の地を争ひ、安樂の境を覓むるもの亦心を出でず。一旦情相合するや、其の精神を擧げ、其の身體を擧げて一に愛情の犠牲となす、萬一事失敗せんか、身神喪落、形影共に見るべからず、之れ素より其の所なるのみ。

愛情の失望は男子をして激切な痛苦を感せしめ、爲に其の溫柔なる感情を傷け、多少粗放險暴に流れしむるの恐れあるも、職業の變化するに隨ひ、境遇の徙移するに隨ひ、自ら銳意新境地を切開するを務め、又昔時の哀情を顧みざるに至る。蓋し男子の心は内に伏せずして常に外に向ふ、之れ其の愛情を缺けるが爲に非ずして、外界の刺撃、内部の功名心と相待つて其の然るを致すのみ。

之に反して婦人の生活は着實なる生活なり、孤索なる生活なり、沈憂なる生活なり。渠は社會の人よりは寧ろ感情と思想との伴侶なり。若し此伴侶にして悲哀の媒介となるあらば、渠れ將た何を以てか其心を慰藉せんとするや。渠の一生は只、男子の愛を求めて永く之を失はざらんことを務むるにあり。若し不幸にして望みを愛情に失はば、其心は恰も孤城重圍に

陥りたるが如く、荒涼寂莫、永く歡笑の期を失ひ、空しく昔日の夢に咽ぶらんのみ。

試に見よ、清輝星の如き双眸、之が爲に一朝朦然として光を失ひたるもの、夫れ幾何ぞや。一笑人を殺すの紅頬、之が爲に蒼然として肉落ち色衰へたるもの、其れ幾何ぞや。婉妍、花の如き芳春の兒女、之が爲に空しく北邙一片の煙と化したるもの、實に數ふるに遑あらざるなり。嗚呼鳩射られて其箭を覆ふ、箭の其身を殺すを知らざるなり。婦人も亦然り、設令心傷れ情破るゝも、其の苦痛を忍び、深く秘して人に示さず。故に婦人の戀するや、常に怯羞なり、沈黙なり。幸にして其の戀情を遂ぐるも、渠は只、獨り自ら楽しむのみ。萬一其の戀に失敗せんか、渠は其の耐ゆべからざるの悲しみを胸臆の幽處に潛め、煦々撫抑して只、其外に顯はれんことを之れ恐る。是の時に當りて渠のあらゆる希望は全く其の縁端を絶ちたるなり。人生の快樂は全く其の終りを告げたるなり。其身を安んずるの地盤は已に破壊せられたるなり。夫の眠は人をして一切の世事を忘却せしむるの樂境なり、然るに今や愁夢曼々として眠は只、其神を勞するあるのみ。斯の如くにして其の内軀は漸く衰弱し、遂に微細なる外界の刺撃の爲に斃るゝに至る。之を哭する者、唯、昨日綽約たる紅顔兒、抑、如何にして一

朝冷灰枯骨となりたるかを驚くのみ。試に其死の所以を問へば必ずや答へん、嚴冬の冷氣之れが因をなせるなり、偶然の小疵之れが素となりたるなりと。然れども誰か知らん、内に心性の病ありて深く其の肺肝に浸徹し、漸く其の精力を殺盡し、遂に倏忽の間、渠をして溘焉異物とならしめたるを。

渠は恰も玉樹の春風に傲るが如し、其の形貌は綽約たるも、其の枝葉は莊麗なるも、蟲は已に其の木髓を食ひ盡せるなり。故に吾人は屢芳葩漸く香ばしからんとする時、忽焉として其の凋落するを見るなり。

嗚呼、零葉春半に散り、枯枝薰風に折る、空しく暴風雷震を前日に尋ぬる者、抑、何等の痴ぞや、戀情の失望只、之を致すのみ。人若し吾人の言を疑はば、乞ふ之を北邙山上の芳魂に問へ。

櫻牛曰、此一篇はワシントン・アービング氏の『プロークハート』の一節を補譯したるものなり。男女哀情の相違を論じて悉せりと謂つべし。只、恐る、余が筆、譯文に翻はす、ア氏を評するの甚しきを。

(明治二十四年頃)

故郷論

余、平生故郷を思ふ毎に、未だ曾て悲極まり涙潸然として下らずんばあらざるなり。顧みて其故を思ふに、余自ら之を知らず、唯、心奕々として傷む所あるが如く、惻々として含む所あるが如く、哀情曼々として抑ゆべからざる思あるを覺ゆるのみ。余、平素聊か傲骨鐵腸を以て自ら居る者なり、世途の輻輳失意の如き、余甚だ爲に兒女の憂をなすを慚つ。獨り此懷郷の情に至つては終に之を絶つ能はず、否、絶つに忍びざるなり。願ふに世の情の人を動かす者、一にして足らず、然れども其の感情、深且つ大なる豈斯の如きものあらんや。

故郷の人を動かすもの實に斯の如く夫れ大なり。古より故郷を懷慕し、舊里に滲々たるの情溢れて詩となり歌となりしもの實に幾百萬篇の多きに達せしも亦怪しむに足らざるなり。彼の逐客萬里に桑梓を思ひ、征夫塞上に歸るを思ふの詩の如き、粉飾綺麗徒らに巧を弄し美を衒ふの文字に比して、遙に眞摯刻實なる感情を起さしむるも亦怪しむに足らざるなり。願

ふに世間文字あるもの、實に千百人中の一二のみ、而して猶ほ且つ斯の如し。思ひ内に結ばれて發するに由なく、空しく煩悶苦楚せし者、夫れ幾何なるべきや。思ふて茲に至れば、吾人は故郷が人心を感動する勢力の實に深大なるを驚嘆せずんばあらざるなり。

故郷は一大勢力なり。人にして苟も普通の情性を具ふる者は、到底其の羈絆を脱する能はざるなり。之を以て古來恬澹自ら喜び、豪宕世に誇る所謂山澤世外の士と雖も、其の故郷に對しては猶ほ縈譚戀々の情に堪へず、甘んじて兒女の媚態を學びしもの滔々皆然り。抑、何ぞ、何が故に然るか、之れ誠に言ひ難きなり。何となれば、故郷の吾人を感動するは一種の「インスピレーション」にして、吾人は只、能く感動するも、其の感動する所以を知らず、吾人は只、能く戀慕するも、其の戀慕する所以を知らざればなり。試に想へ、夫の遊子故郷に歸り閨門に入り、漸く舊廬を瞻望し、童僕門に迎へ弟妹路に待つ時に當りては、其の快樂果して如何ぞや。曾て同胞故舊と共に相提携して嬉遊したる跡を尋ね、一石一木漸く其の舊時を想起するの時に當つて、其の感慨果して如何ぞや。仰いで青山を眺むれば一面舊知に笑ひ、俯して綠水に臨めば閑流我れに意あるに似たり。榆柳長じたるを見ては桓將軍の鞭を揮

雪之感

ひ、衛字傾きたるを仰ぎては陳思王の嘆を思ふが如き、抑、何等の情致ぞや。然りと雖も、斯の如きものは鴻鵠の鎖尾、故郷の爲に言ふに足らざるもののみ。若し夫れ其の神祕なる快樂に至つては、幽邃微妙、思ふべくして言ふべからず、言ふべくして解すべからざるの所にあり。之れ余が故郷の感情は「インスピレーション」なりと謂ふ所以なり。

嗚呼余は此滿腹の誠意を捧けて故郷を愛す。余は身寧ろ蒲人漁父となるも、永く此一片故郷を愛するの念慮を失はざらんことを祈るものなり。已に故郷あり、故郷を愛するの心あらば、設令ひ身は江湖に落魄し、關閑流離、又之れを省みるの人なきに至るも、至親至愛なる故郷の天地は常に余の爲に笑ひ、余の爲に歌はん。故郷の青山に臥し、故郷の綠水を掬し、以て天年を送るを得ば一生の儂事終れり。安んぞ又錦衣車馬、世上に翔翔するを望まんや。

(明治二十四年頃)

雪 中 梅

雪と霜とにうづもりて
見るに影なき梅が枝は、
けにも吾身のうらみぞと、
誘ふ春風身にまみて、
咲かすば花も散りはせじ。
落花の風にうちむかひ
浮世をかこつ身の哀れ。

今様三首

予性音楽を好む。隣家に笛を善くするものあり、明月の夜毎に弄せざることなし。獨り松下に立ちて之を聴けば、緩急切徐の音につれて、思ひはいつしか天半に翻り、身のいづこにあるやを覺えず。傾ぶく月影に驚きて、やうやく伏床につけば、流風餘韻尙ほ夢

を揺りて寝ねられず。即ち燈を挑けて左の今様を歌ひぬ。昔ながらの夜風、哀れをはびて、須磨の浦曲の春の花、嵯峨野の奥の秋の月、身は早や六百年の昔にかへりぬ。

敦 盛

須磨の浦曲の朝風に
ぬしはふかれて消えはてぬ、
残る青葉の笛のみは
恨を千代にひけとてや。

忠 度

末はけぶりの波路をば
かねて漕ぐ身とまりながら、
鎧の袖の藻鹽草

沈めかねしぞ哀れなる。

小 督

昔を去るのぶ琴の音ぞ

あられぬ中のいのちなれ。

月影さむく雁かなし、

七百年の嵯峨の秋。

(明治二十四年頃)

愛

あだにもれがふ天なる神

愛の火をやどす術なきや

暮れゆく年に冷ゆる胸は

愛を失なへるこゝろには

死は傷るべきものあらず

(バイロン)

嗚呼愛乎、愛乎、吾耳能く爾を見ず、吾筆安ぞ爾を盡さんや。聞く、昔者「ゴルゴン」の眼光は能く其視る所のものを化して石とならしめたりと。愛若し眼あらば、其注ぐ所のもの必ずや溶けて水とならん。

吾人は能く自然の靈活なるを観る、天地の大にして限りなき、幽冥の遼として極りなき、吾れ能く收めて吾囊裡のものとなし、放つて吾詩中の料となす。然れども一度爾に遇へば、吾眼は爲に盲し、吾耳は爲に聾し、吾口は爲に啞となり、吾れ只、膏臙として爲す所を知らざるなり。想ふに區々たる文字は斯かる高尚なる境地に達する能はず、吾れ只、人と共に驚嘆して已むの外なからん乎。吁、冀くは夢にだも天女の双翼に附し、長風萬里「パフオス」宮裏の流韻を捕へて「ヅ井ーナス」袖中の情を窺ふを得ん。

愛の生命は無限なり、始あることなく終あることなし。愛の存在は不定なり、有らざる所なく無からざる所なし。然れども悲しい哉、人は唯、一線詩の流に依りて其清高なる光の反射

するを瞥見し得るのみ。試みに其源流に溯れば、アペニンの山青き處、コモの湖^{みどり}緑なる邊、愛は三天詩人の筆に托して、初めて一點の微光を天心に放ちたりき。「吾れ生れてより天の光は九度び一點に注ぎ、吾れは其處に愛の化身を認めたり」と叫びしは抑も何人ぞや。天を仰いで長嘆、「神よ吾れに満面之れに對するの勇氣を與へよ」と叫びたるは抑も何人ぞや。吾人は疑ふ、彼のダンテのビートリスに於ける、ボカチオのマリヤに於ける、ペトラークのローラに於けるの愛は、即ち彼等が「デバインコメデー」、「フェアメッタ」、「カンゾニア」を生じたるの情に非ざる乎。其足、地に附して其目、未だ天に達せず、其目漸く天に達して其耳未だ地に徹せざるの前、彼等の清らかなる心を貫き、其涯世の進路を照したるものは實に此愛の光なり。今日彼等が半神の詩聖となりて名譽の夜に眠ることを得たるものは、安んぞ愛の爲に非ざるなきを得んや。吾人は嘗に其然るを信するのみならず、彼等が歐洲文學の鼻祖としてチヨースーを提起してより六百年の間、文學をして高潔なる天と混濁なる地とを結合するを得せしめたるものは實に愛に外ならざるなり。

吾人をして岐路に走らしむる更に一步ならしめんか、彼の武門的氣風の盛んなる時に當り

て、悲しくも文學の命脈を一髪の間に繋ぎたる所謂「ロマンス」は、何が故に世に起りしか。當時の所謂武士なるもの、風雲に梳^{くし}り雨露に沐浴して衆を以て功名を争ひたるものは決して俸祿の爲にあらず、利慾の爲にあらず、多くは鋒鈍尺寸の前に當つて紅顏の佳人笑^まを含んで之を誘ふものありしに因るに非ずや。又文學の世界に一種異様な光彩を加へたる所謂厭世の詩人は、何が故にダンテの如く地獄の門に立ち、神が神聖なる手を以て其額に畫きたる「希望」なる文字を好んで拂ひ落したりしや。彼等の多くは人生を失ふに先^まつて愛を失ひたりき。希望を捨つるに先^まつて愛を捨てたりき。彼等の眼中には、萬物、愛の爲に生じ、愛の爲に美なり。彼等は一命を托して愛の掌中に歸したる也。其れ唯、愛を失ふ、之を以て彼等は之と共に光明を失へり、希望を失へり、轂穿ち雀飛びぬ、今や只、塊然として悲哀の大海に沈むの外なきのみ。彼等が暗黒の中に發揮せる鬼火は、即ち彼等の眼に残れる死せる愛の閃雨のみ。

愛は實に詩人の生命也。愛の外に眞詩なく、詩の外に眞愛なし。愛は嘗に之を得たる者をして不滅ならしむるのみならず、之を失ひたる者をして亦能く不滅ならしむ。人世の憐れむ

べき、満面以て其光に對する能はず、僅に長芒の餘影を求めて以て滔天の恵となす、豈悲しからずや。愛なるもの素と定名なく定形なし、古來哲人達士が六合の理を究め、宇宙の道を盡して猶ほ且つ飽かず、生平缺焉として中心痛む所あるが如く、一塊の祕密、言はんと欲して言ふ能はず、聞かんと欲して聞く能はず、呻吟苦楚、空しく墓中に齋らしたるものは實に此愛に外ならざるなり。之に聲を與へ、之に形を附し、此一段の幽冥を照破し得るの詩人あらば、是れ即ち永遠の呼吸を一攫して横に天心を騎りたる者なり。詩人の能事茲に至つて終らん。然れども蜉蝣旦夕の智、天地無究の靈を測る能はず、古より未だ此境地に達したる者あらざるを如何せんや。獨のゲーテ能く愛を説く。カライル、其著「淮亭郎」を評して曰く、古來幾千年の間、世界は一の解すべからざる祕密の中に迷ひたり、之に聲と生命とを與へたるものは、古往今來ゲーテ一人のみ、淮亭郎は即ち此幽玄なる祕密の叫びに外ならざるなりと。吾れ讀過一遍、神舞ひ魂飛び、方に「セラフ」の翼に御して九霄を凌ぎたるの思あり。然れども一物の微尚ほ未だ憐憫たらざるものあるを免れず。思ふて茲に至れば、吾れ毎に巻を掩ふて號泣せずんばあらざるなり。嗚呼、天は何が故に獨り其の靈妙を露はすを忌むなる

乎。將た吾人遂に永く此祕密の外に迷はざるを得ざるなる乎。其れ唯迷ふ、之を以て吾人は徒らに心を悩め身を苦しめ、空しく蝴蝶の翼を張つて九萬里を渡らんとするなり。吁五十の春秋短きにあらず、而して清爽僅に一日の安を求むるに由なし、抑、人生を奈何せんや。吾人は素より天國の愛を移して地上に植うるの空想なるを知る、而も猶ほ依々として其零葉飄葩を求めて之を揣摩するもの、豈人情に非ずや。蓋し愛は人をして怯懦ならしむ。試に見よ、人の愛を求むるや銳意勃然、夢寐の間尚ほ奕々として忘る、能はず、以爲く、願くは一度び之に遇ひて中心の思を訴ふるを得んと。然れども一旦其愛する所のものに遇へば、躊躇逸巡して敢て仰ぎ見ること能はざるは何が故ぞ。淮亭郎の所謂「予は何故に空禮虚節に拘泥して、而して渠女の足下に俯して之を抱擁することを敢てせざりしや」とは、之れ其實情を露はしたるものならずや。愛は又人をして勇敢ならしむ。乞ふサラコザの女軍を見よ、平素驚臯の聲に戦慄し、「死」の名を聞いて色を失ふが如き綽約たる處女が、一旦事あるや、其長袖を断ちて劍鞘を束ね、琴絃を切りて柳條を張り、鋒鋌を排し砲烟を冒し、マルスの足も戦くの地に立ち、ミネルバの歩を以て決然死屍を踏みて恐れざるものは何が爲ぞ、執れか愛か

感銘せる婉柔なる勇氣に非ざらんや。愛は又人をして剛毅ならしめ、又人をして無情ならしむ。愛を求むるの人は、美色も之を誘ふを得ず、威武も之を屈するを得ず、渠は此嚙亮たる魔語の中に人生一切の希望の盡く包含せらるゝを見ればなり。

愛は凡ての罪を洗ひ、凡ての汚れを清め、凡ての惡を雪ぎ、凡ての禍を救ふ。愛は猶ほ春風の如きなり。其吹き來る所、山は綠に、水は清く、其花を附け、鳥は其歌を唱ふ。其來るや四圍の萬象、化して天國となる。其去るや、世界を舉げて悲哀の地となし了るなり。人は言ふ、「美」は能く愁を變じて樂となし、悲を變じて喜となす。然れども見よ、一度望みを愛に失ひたる者にありては、美は嘗に其愁ひを慰め得ざるのみならず、却て無限の感憤を起さしむるを常とす。所謂「美」なるものは、愛を除いて又美あらざればなり。美なるものは、只、愛の眼孔より映じ來るの彩色にて、一度愛を失はんか、傾國の美人も洞然たる骸骨のみ。胎蕩たる煙景も寂寞たる窮野のみ。古人生れて有情の身を悲しみしものが爲なり。想ふて茲に至れば、愛の情味乾燥、身を舉げて骨と肉とのみ、世に愛する者なく愛せらるゝ者なく、日に權利義務を口にして一生を匆忙の間に送る滔々たる半器械的の人物は又何等の多幸ぞや。

愛は高妙なる説教者なり、聖人の道遙かならざるに非ず、哲人の理深からざるに非ず、然れども其人を感ずること、遂に愛の一閃光にだも如かざるなり。世事萬重の雲霧を排し、人間最高の哲理たる所謂物の哀れなるものは、實に愛の教ゆる所に非ずや。眉間去來の間の愛光は世界の真相を照し了るなり。誰か謂ふ、愛は人を迷はしむと。冥きが如くして明なるは愛の妙道なり、迷ふが如くして悟るは愛の靈理なり。

嗚呼、愛乎、愛乎。思ひ去り思ひ來れば、吾人は只、爾の渺茫として愈、測るべからざるを覺ゆるのみ。吾人は素より千萬言を連ぬるも、爾の微光が吾人を感動したる萬一をも顯はす能はざるを知る。然れども猶ほ尺寸手を投じて敢て蒼海を探らんとするもの、實に哀れむべき故ありて存すればなり。嗚呼、愛乎、愛乎。古來幾多の罪惡、幾多の恥辱、爾の名によりて行はれたり。人の汚れたる心は遂に爾の高潔なる光を容るゝ能はざる乎。爾は吾人の生命なり、烝烝たる生靈、爾を求めて得ず、獨り其心を傷りたる者幾何ぞや。心已に傷れたり、何等の悖徳か得て行ふべからざらん。何等の不義か得て行ふべからざらん。憎惡何物ぞ、怨恨何物ぞ、吾人は不幸にして爾の神聖なる名の其背後に蹲踞するを見るなり。吁、爾の名は遂に小人

俗子の爲に誤られたらんとす、今日眞に爾を知る者、果して幾何かある。爾の爲に生じて爾を得ず、斯の如くんば吾人は寧ろ蒼海を踏んで「トリトン」笛聲を聞かんのみ。

(明治二十五年一月)

傷心錄

現ならぬ現

こしかた行末の憂きことを數ふれば、古へ人が鳴の羽がきに寢られぬ夜半をかこちしも、けに理りと覺ゆるぞかし。檐滴の響ききりに枕に音づれて夢結び難き一夜、幾聲の鶉啼暗を縫ふて行衛もあらぬ我がこゝろ、いつしか現ならぬ現に迷ひて、あやしき思ひ雲の如く湧き出でぬ。思へば雪折竹に本來の面目を悟る眼もなく、ひぢをきつて西來意を察する才もなき我身、花に眠るも草にふすも、同じ一時と思ひはせて、空しき望にやゝもすれば天地を翔むす鳩鶯の笑となるぞうたてきや。されど賤がまがきの紅一輪、給孤の園に咲ける祇樹の花と見

るべき法もあれど、つらく思ひ廻らせば、世事何物か迷にあらざるべきや。枕邊已に夢と共に去りにし我心、醒後尙ほ夢と共に還らず、夜雨蕭々として涙徒らに零々、あはれほしや會心微笑の友、花を拈つて不解の解をなすもの。

かぎりなき空のあなた

あはれ此の薄筋き空冥をつらぬきて、かぎりなき空のあなたに行かましかば、我が生いかに樂しかりなむや。夢か現か、我はそこに時と無常の境を脱して、かはらぬ縁の樂園を認むるなり。幽情化して石立ち、怨風結んで塚青き千年萬年の恨、まこと有盡身軀の命ならば、半世の劫を血に染むる此願、此望み、さてはあやしき此涙、そもやいづこよりして來れるぞ。世に汚れしか、我が眼、天にひける妙なる樂も、地に降りては情なき嵐と化するなる乎。天に匂へる美しき薔薇も、地に咲きては忌はしき薔と變する乎。見渡せば光絶えざる幾千の日月、長への春にかゝやきて、そよふく風も香ばしき命をや運ばむ。されど夢ならでは越えがたき萬頃の怒濤、天を掠め地を震はして、我等が途を遮るなり。歸去乎、歸去乎。歸りて其の故

に安んずるもの、所謂天を樂しむもの乎、去つて而して悲しむもの、所謂世を厭ふもの乎。そも望みとは夢の謂乎。はた夢とは望みの謂乎。さるにても無懐の域に入り得ざる凡夫の吾れ、あだなるまことに魂のみぞ驚かれぬる。

傷心の魂鬼

口もて言ふ望み、魂にのみ夢みる吾等こそ果敢なけれ。日と月とは驚ける丸の如く、人と世とは浮べる塵の如し。うき世と云ひ、勞生と云ふ、孰れか希望の綱につながれて、やがてこむ樂しき日に待つあるに非ざるべき。されど樂しき日の常に古にのみ來れるを誰か知るや。望の門にたどり行く吾等、却て之に背いて馳せつゝあるを知らずや。搖籃を天地とせる嬰兒には、望はめぐれる獨樂の中にありなむ。情に絆され戀にやつるゝ紅顔の子女、落花の風に向ひて、其身にたぐふ悲しみあるを思はず。花に酔ひ、蝶に狂ふ暮春の情、あはれ幾條楊柳、多少の啼痕を沾さざるはなし。夢の昔にあやしくも今の命をつなぐ頰齡暮年の身に至りては、進んで合ふこと能はず、退いて忘るゝこと能はず。昔日歌舞の地に衰殘の黃花を擁す

る身には、望なるものは徒らに傷心の魔鬼にあらざる乎、非乎。
誰人ぞ、かゝる望みを我心に植ゑし者は。天か、地か、人か、鬼か、迷へる夢か、將た悟れる現か。天涯渺として問へども答なし。はかなき世のならはしにおくるゝ身こそかへすゝも惜しまるれ。

墓中の人

吁、我が傷める眼には、世界は大なる墳墓の如く見ゆるなり。墓上に歌へる人を賢しと見ずば、そもや半百の命を如何すべき。「愛」は仰ぐに疲れて地に俯しぬ。白楊樹下、青塚相累るところ、見るところ何物なるべきぞ。渠れ未だ天女を夢みし處、白骨をみとむるを圖らざりき。哀れ其の太息と共に消え去る影の搖曳として恨を惹くの長さ。黯然として感咽すれば、身は石の如く固まり、心は氷の如く冷え、我はいつしか墓中の人となりけり。

(明治二十六年六月)

亡弟良太病中書翰の首に書す

おもへば天分淺き吾等はらからの因縁や。あはれうき世とは誰が言ひ初めけん、けふの末ありとも露ゑらで、弟と生まれ兄と生まれ、二十餘年の春秋のおなじ哀をくみし身の、百年かけし情のほづな、はた何時の世にかは絶えぬべき。あゝ多く言はじ、廣きあめつちに、吾とおなじく打てる唯一の胸、今はやうせぬれば、つらに離れ群を失ひて、かぎりえれぬ大空の風のまに／＼ゆくへもえらぬ雁や、今の我身に似たりとも見つべき。残れる文どもかいあつめて燈の下にくりかへし、人には見えぬまほろしに、我身ばかりの現をよせて、返らぬ昔志のぶもよしなしや。吁々吾亡弟、今はたいづこに宿るらん。いづれうき世は來る因、また來ん世こそくれ／＼も慕はるれ。

(明治二十八年一月)

わがそでの記

Wenn man an ihr Gerat geht,
Sei du um fo treuer;
Und ist keine Seele zu Tode betriibt,
So greife Seier!

世をうきものとはたが言ひそめし。想へば袖ふたつには包みかねしわがこころ、うたてや年をへし長きねざめの友となりぬ。はつ夏の月いと哀れなる夜半、われともなしに起きいでて、簾のつま引き上ぐれば、落るは露か、雨か。秋ならぬ風に桐ひとは散りぬ。

里にては今ほねなましものを、うとましの身の程や、心も遠き田舎の里に、夕なみ千鳥あはれに泣きわたり、物さびしき空にたぐひて、峰の松風こゝろと共に行衛もえらすこぶかくも吹き合はすかな。

さらば、残むのともし火かい上げて、人には見えぬわがそでの幾とせをゑるさなむや。心むづかしうもつれたれば、太息のみぞいやまさりける。

おと、しの暮、われ日光に遊びて病を獲てしかば、月のあひだは床に就き、歳のなかばを旅にすごしぬ。かくて病はいえぬ。

まことに病は親しむべき友にてはあらざりき。沈みもだえたるころに、人生は其の憂鬱なる一面をもて迫るなり。樂しき、光ある世界はわれを去りて、悲しき暗き天地は、たより無き身をつむなり。涙をかくせし皮一重の、力無くうすれゆけば、泣くねをまぎらす笑だに心にまかせず。色あさましう衰へて、肉落ち、骨たてるかほばせに、幽かにあやしきひかりをうかぶるさま、はたこれ美はしとは言ひ難し。なべての人のうとみきらへる中に、限りなきふたつの世を敵として戦へる、病める人のころは、洵に哀れむべきものぞかし。

われ病にかゝりて、こゝにまことの人生を見そめき。あだ波たてる世の常にかけはなれて、こゝに靜かなる寂しきまことの世相を觀じそめき。利に走り名にあこがるゝともがらの外に、眞の友情の貴とむべきことを覺えそめき。あだに過せし幾とせの、偽り多くつみ深きを想ひて、こゝに青春の移ろひやすく、勝事のとこしへならざるを嘆きそめにき。

かくてわれ、家にはなれ、わが戀しき人々にはなれ、是の黙思を友に、身獨りにして東海

のほとりにさすらひぬ。冬のはじめなりければ、風いたく身にきみき。

相摸なる國府津の里にやどりし一夜、われあやしき思ひにうたれて、小夜更くるまで泣きくひしき。波の音も、松風も、わが耳なれしには、寂しながらにあやしとも聞えざりしに、いとほだ寒き枕のもとに涙のみは熱かりし。是の夕、都なる人にとて薄墨の色にあはれを籠めし幾尋の文は、封じもあへずやりすてられしが、われは今にいたるまで自ら其の何の故なるを知らざるなり。

夜深くして夢に其の人を見き。月の光は氷の如く冴えわたたりて、そよとの風の音もなく、死せる如き天地の間に、わが其の人はわれをながめてたゞすみき。されど其おもては鉛の如く青白く、手にもてる薔薇の花は見るかけもなう枯れ凋みにき。

熱海のふた月は、まことに樂しきあはれ深き冬の暮らしなりし。

よそならば吹雪にとぢられて、日かけもうすき冬の眞なかも、名にし負ふ暖地なれば、こ

ちふく風もさむからず。むつきはじめの梅が香は、はやくも春をつけそめて、野邊のやけあとの縁なすは、人の心もときめくころか。とまやどもに岩海苔のかをりせるもをかく、蘆のやに心ほそく立のほる煙ものどかなりや。

海原とほく見わたせば、相摸、安房の山々、雲かかすみのすがたおもしろく、大鳥がねにたつけぶりの、春風にたなびけるに、水や空とも分ちかねたり。沖の小島と誰がよみたりし、はつ鳥わたり漕ぐふなうたの、寄る浪ごとに聞ゆるも床しく、魚見が崎のこなたより、渚をつたふて、砂白く松青きほとり、濱千鳥のむれとぶさまをかしようや。うしろには日金、十國の山々を負ひて、前には天空海濶の間に、一灣の春を擁する豆南の風光は、筆にはなかくに及びがたし。

國府津の里にやどりし次の日、われ病をやしなふべく是の地に客となりぬ。

われに業ありき、今や之を捨てぬ。われに友ありき、今やこれに離れぬ。されど行李の裡に「はいね」集を收めたり。わが業は尙こゝにあり、吾友はなほこゝにあり。されど「はいね」はわが爲には不幸なる友なりき。

如何なる星の下に生れけむ、われや世にも心よわき者なるかな。暗にこがるるわが胸は、風にも雨にも心して、果敢なき思をこらすなり。花や採るべく、月や望むべし。わが思ひには形なきを奈何にすべき。戀か、あらず。望か、あらず。あはれ「はいね」はわが爲にを語りき。

われやまさなき人に物の哀れを知りそめき、思へば葉末の露のいとほかなき終りなりし。月影のまどかなる望も、かつては其中に寫りしが、風そよぐ旦の野邊に跡も無く、もよ夜のひじのはしがきに、君やいのちとかちしも、思へばあだなる夢なりき。かくて、吾がこゝろはとこしへに癒えざるべく傷つけられき。わがこの思ひを誰にか語るべき。月の夕、雨のあした、われ「はいね」を抱きて共に泣きしこと幾たびか。

かのうるはしき風景に遇ふごとに、われは還らぬ昔を忍ぶなり。山のかたち、水のすがたは、わが心にさゝやきて、吾れは言ひがたき哀れを覺ゆるなり。人知れずまほる袂に、われはいくその思をつゝみしか。あゝ魚見が崎よ、錦の浦よ、われ爾のために幾痕の涙を流せしか。

●月あかき一夜、われひとり浪打ぎはに佇みき。濱千鳥聲絶えて、浦風すめるそなれ松、浪の音のみいとさえたり。夢の如き水けぶりは、山の端白くとちこめて、空には星の影まれなり。われ岸邊の松にうちもたれて、ふるさと遠く思ひかへしぬ。

想へばはるけくも來つるものかな。わが父母にわかれ、わが兄弟にそむきて、われやひとり何の爲に是の地には漂泊よへる。わが命をわけし弟は、われに先ちて死にたり、われを愛せし姉上も、またかへらぬべくゆき給へり、わが誓ひてし人は永くわれにそむきぬ。われや何の爲に獨り此世にはとまれれる。山青く水白く、幾千よろづの是の大塊に、人や生る、何の因、何の縁ぞ。花飛び葉落ち、風吹き鳥鳴く。合ふや柳因、別る、や絮果、何れ終りはおなじ流轉の世に、人や何を望みの五十年のいのちぞも。

月冴え波まづかにして、まことにまめやかなる夕なりき。おろかなるわれは爲すこともなう、小夜更くるまでたちつくしき。

またのゆふべ、われ「はいね」を携へて磯邊の丘のこだかきにのほりぬ。夕日は山のあなたにかたぶきて、半天の曇は残むの光に色づきたり。大島山の夕けぶりは、薄むらさきにた

なびきて、山光水色、入日とともに黒みゆくにつれ、目もはるかなる帆かけの空に入るを、わが心ゆくへも知らずなりぬべう、恍然としてうちまもりぬ。わが手は思はず「はいね」にふれて、わがめでよめる「望みなき人」は開かれぬ。

想へば、望や、戀や、残りなうやれば、吾れはわだつみの情なく打ちよせたらむ屍のごと、是の荒れすさびたる、冷やかなる磯邊に横はるなり。吾れの前には海原あり、吾がうしろには苦しみと悲しみとあり、かのなやましげに覺束なくも空行く雲は、わが一生にも似たるかな。浪のよる見、鳥のなく聞けば、流石にすぎし年の忍ばれて、忘れし夢の今更にくりかへさるゝなり。靜なれ浪よ、鳥よ、わが此世のいのちは早く已に往きにしを知らざるか。われは卷をとち面を掩ひぬ。

見わたせば、日は名残なくくれば、里には燈火かやけり。山も鳥も限りなく小さく遠きこちして、脚下にひく浪の碎くる音も、程はるかにきこえ、身はややく是の世にはなれて、奈落の底にも沈まむず覺えたり。われは心細さに得たへで、急ぎ歸り、きぬひき被ぎて臥しき。

熱海にゆきてより越えて數日、吾れ「はいね」の外に故人を得たり。都なる吾が友嘲風來りたづねぬ。

嘲風は京都の人、吾れと共に大學に入りて、哲學を脩めたり。かれは宗教哲學に志し、吾れは美學と文明史に力めたり。かれが顯脫の才を以て、われ魯鈍の質に配せむは、もとよりふさはしからじ。されど嘲風われを知り、われ亦嘲風を知り、われはかれに於て百年の知己を得たりしなり。そのころのかれは、今のわれと同じく妻なかりし。されば山嶺水涯、憂を紓べ神を養ふに於て、彼れと吾れとは多く其の行をともにしたりき。吾れ病みて床にあれば、かれ朝夕われを顧みき。われ旅に病を養へば、かれ三亭の路を遠しとせずしてわれをたづね。わが嘲風に負ふところ何をもてこたへむや。

嘲風來りて、われ「はいね」に背むくこと幾日。嘲風わが爲に學室を言はず。われ嘲風の爲に烟霞を説く。月のゆふべ、伊豆山の古堂に嘯き、花のあした、茂木の山莊におとづる。都には得がたき樂なりき。

嘲風「ぐりるばるつゑる」が悲曲「さつほお」の一卷を携へたり。

熱海より南のかた、にしきの浦をつたふて網代のみなとに連る所の一角、之を魚見が崎と名く。嶄然海を抜くこと一百丈、斷崖直に下りて斧もてけづりたらむが如し。ある日の夕、われ嘲風と共にこゝに上りて「さつほお」を読む。是の女詩人が入水せしと傳ふる「り、か、で、あ」の岩は、是の魚見がさきのそばにも似たらむかと思ひたればなり。

あ、「さつほお」よ。なが往にし日の幾千とせのあとに、われあることをなは知るや。「れすびあ」の事はふりたるまゝに知らねども、われはなが名をきけば新しき哀れを覺ゆるなり。世にをなごの哀れは多かれども、思ひはいづれひとつ魂にうつる戀路の影とかや。己れもひとも得まらぬ思ひに心をやぶりて、一山おろしに跡も無き東岱前後のけふりと立ちのほる、あへかなる人の數は、あはれ、何人の罪なるか。おもへばまゝならぬ世なりけり。偽り多き世なりけり。

あ、「さつほお」、汝はたぐひ無き詩人なりき。其奏つる琴にはうつし世ならぬ響を宿し、其歌ふ歌には天上の聲ありき。「へらす」の人々は、なを詩神の列に加へて「おりゆむぶ」のやしろに祭りにき。されど其の最後の幸は汝にあらざりき。

「さつほお」は人の子なりき。人の子として戀てふものに憧れき。まことなき人はかれを愛し、まことなき愛はかれを惱ましき。あはれかれが望みたる幸福は、人間のものにてはあらざりし。かつてまことを誓ひてし人を抱けば、胸に蛇ありてかれを死ぬべうかみぬ。不信うち、虚偽みなざる世に、かれ泣いて悲しめども時すてにおそし。「ふあおん」はかれを欺き、「みれつた」はかれをうらざりぬ。

かれ乃ち夜叉となりて匕首をとれり。かれは人の子なりければなり。されど事果さざりき。嗔志の炎胸に燃えて、かれ將に悪魔とならむとするとき、天上の光かれが胸にかゝりて、かれは是の世の人に非ざりき。かくてかれが最後の跡は「りかでいあ」の巖頭にのこれりき。

あ、偽信天をひたす是の濁世に、われはうた「さつほお」を悲しむの情にたへざるなり。「さつほお」ゆいて幾千年、星うつり物かはれども、世のいつはりぞ今もなほ昔の如くなる。すまじきものは戀なりけり。

世にくるしきことは深なれど、神かけて望をおきしその人の、まさなうも卑しきさがを表はせるを見むほど苦しきはあらずかし。わが戀人の偽りを見むよりは、むしろわが身の死にたらむかた、いかにほかに幸なるべきぞ。「さつほお」の死や晩かりし。

日は西にかたぶきて、海づらひろくかがやきわたる。われは思に沈みて、がけの上に坐しぬ。見わたすかぎりのあなたより、靜にゆるやかなるうねりの岩ちかくうち寄するさまは、われに一種のおごそかなる感情を起さしめぬ。何處よりも無くわが耳ちかくさやくものあり。起ちて脚底をみおろせば、名にし負ふ魚見が崎の深淵は、暗々としておろちの口を開きたらむ如し。われは慄然として覺えず巻を落したりき。

空には三日月の光あり。われ天を仰いで嘆息するもの多時。これよりわれは永く「さつほお」を讀まざりき。

われかつて友なる詩人に問ひけらく、おん身が麗はしきことばもて歌ひよめりしかの美はしき乙女はいかにせし。おん身の眼にはなど光無きぞ。友の答へはまことに哀れなりき。いなとよ、かの光こそ人の信と共に失せしなれ。胸にはのほの消えたれば、うたひし歌は

かへらぬ戀の灰なるよ。かれは「さつほお」にはあらざりき。

十國峠の登臨はこよなう壯快なる遊びなりし。是の峠は函嶺より天城につらなる、所謂富士火山脈の一峰にて、いたゞきに上れば、關の東西より豆州の沖かけて、十國五島をながめ得べしとぞ云ふなる。ある日の空はれわたりたるに、われ嘲風とこゝにあそびき。

山のいただきは熱海より五十丁をいでざれば、いたう高しと言ひがたし。されど相駿二州にまたがりて、北は足柄、函根、富士より、南は天城、神並より大島、三宅の山々をのぞみ、西は江の浦、まづ浦を眼下に見おろし、名にし負ふ田子の浦つたひに、清見が關より三保の松原かけて、はるかに遠江なるおまへが崎にいたるまで。東はまなづるが崎のあなた、小田原、こふづ、こゆるぎの磯べにそふて、江のしま、鎌倉の山々より、田越、三崎のはてにいたるまで、さがみ灘をつゝみてかすかに安房、かづさの遠雷をのぞむ。形物の壯大、たぐうべきものなし。

ことに美はしきは、江の浦より清水にいたるまでの田子の浦のけしきなりけらし。富士の

裾野を縫へる小松原の濃きみどりなるが、かむばら、興津わたり、淡きむらさきにうすれゆるるさまなむど、心ゆくばかりうれしく、天つ乙女のあまくだりけむ、三保のまつ原の春がすみにかすめるが、此世ならず見ゆるも床し。仰けば高き富士がねの千古の姿は、言ふもおろかや。あゝ誰がつくりなしけむ自然のうるはしさよ。如何なれば人のみぞかくはけがれたる。

函根の一峰に雲起りぬ。はじめは膚寸の大きなりしが、谷ひらけ風加はりて漸くひろがり、はては八峰の全面を掩ひて、暮然として西の方にたなびきぬ。愛鷹のみねにかゝるころ、富士おろしにさからひたるにや、雲行忽ち天に向ひて劍拔萬丈、二山の間に白雲の壁を築けり。其頂き山風に散じて満天を覆ひ、濛々として咫尺をわきまへず。われは衣襟をあはせて凝眸多し、嘲風杖を揮て天を劃し、快哉を絶叫すること三たび。まばらくに於て、そら晴れて函嶺の崔巍、美岳の清容もとの如し。満天の雲霧われそのいづこにゆきたるやを知らず。
あゝ天地風雲多し、人間なにぞ涕涙のまけきや。

嘲風われと居ること二旬、かれ事をもて都にかへり、われ復た「はいね」と残りぬ。

• わが隣室に少女あり、旅窓のつれづれを慰めむとて、われに水仙花を送れり。われうつわに水さして、朝夕にこれを養ひしが、幾くもならずして萎みき。

水仙花、水仙花、など凋みたる。わがこころさしの足らずてか。なが思ふことの残ればか。お、おろかや、思の根に生ふればこそ、色も香もあるなれ。などあだびとの手にやしなはるべき。などあだびとの爲にかたちつくるべき。

水仙花、水仙花、世はにぎり、人はけがれたり。なが生ひさかふべき野邊には是の世ならぬ露ありや。われにはうらみあり、ひとにはわらひあり。世には恥なるもの無し。神のみくにの遠ければ、悔ひ改めむすべも知らず。あ、われや汝にたぐうべきか。

哀れなる水仙花は、聲なくして終に凋み果てにき。

彌生のはじめ、われ熱海を去りて、清見が關の古跡をとひぬ。

松風遠く吹き合せて、波の音も幽なる物思ひまさる夕べなりき。われはひとり宿を立ちい

でて、三保の松原にあそぶ。入日の影はくもにのみ残りて、月未だ上らず。田子の浦曲の夕なぎに、千鳥の聲もいとまれなり。江尻、まみづをはやすぎて、龍華寺の輪塔を右手に見つ。袂にさむき山おろしに、入相の鐘を吹きおくりて、はつ春の哀れ一しほ深くや。三保にたどりつけるころは、月やうやく上り、清見瀆の水煙は關路はるかにたてこめて、富士の高根に雪の色まろし。見わたせば一帶の松林、木ぶかくも生ひ繁るかな。木立のふるへる月のあかりに、残むの雪の色さえて、杜の下道香かなる、霞に落つる影も無し。波の音やうやく近くして、われは羽衣の松にそふて立ちぬ。

羽衣の松は、わが年久しく思ひこがれしものなりき。よしされば、こよひ月とともに立ちあかさむかな。

松は早く枯れて、幹のやれたるが残り。そのもとにゆかりを誌せる石ぶみありしが、月の光おほろにして見えわかず。あはれ波の音と松風のみぞ、今も昔にかはらざりけめ。

• われは夜もすがら松のこかけに泣きくらしき。そのなにゆるなるを覚えざりき。頼りなき身のたゞひとり、するがなる三保の松原に泣きあかすよと思へば、われは涙のながるゝを忍

びあたはざりしなり。吾れ泣けばとて、誰か哀れと見るべきぞ。われ笑へばとて、誰か樂し
と見るべきぞ。ひろき天地の間に、わが胸の琴は群をはなれし雁がねの、たぐひなき寂しき
響すなり。われはたかく思ひて覺えず號哭しき。

想ふむかし、われにもあまつ乙女ありき。されど其の乙女はまことあるものには非ざり
し。かくてあだなる思ひに吾が胸はやぶられき、いえざるべう傷けられき。よろづのさいは
ひはかへらざるべう吾れを去りき。

月は半天にのほりて、地には人のけはひだにあらず。あゝ月よ、長へに其歩みを止めよか
し。永久の夜の是の世界を覆ひつゝめよかし。風よ吹け、波よくだけよ。松は其ひびきをな
らせよかし。かくて人間の聲を天籟の中に埋められよかし。

夜まづかにして、わが聲は遠く松原のあなたにひびきわたれり。されども月にうつれる吾
影はひとつなりき。

是の夜、夢に天女を見しが、かれ羽を持たざりき。そのまろき百合の如き指もてわが胸を
抑へしとき、われはことばなく泣きくづをれて、このまゝ露となりても解けよかしと願ひぬ。

されどわが耳にさゝやけるかれが言葉は、われを咄へるものなりき。さめてのち、われ天女
の名を問はざりしを悔みぬ。

清見が關の幾夜はかゝる思ひにあげたりき。彌生もなかばすぎて、花やこの世の樂しき時
を、われはまたあてなき旅にうきみやつしぬ。あるは靜浦のほとりにさすらひて、櫻がさ
まの遺韻をたづね、あるは伊豆の山にわけ入りて、修禪寺に薄倅將軍の墓をとふらひ、ゆき
ゆきてうづきのはじめ、湘南に入りて田越の里に客となりぬ。あゝわれいづこにわが満足の
地を求むべきか。

嘲風、芥舟、都より來り訪ふ。われ又「はいね」の外に友を得たり。薄暮潮に乗じて海に
漕ぐ。嘲風船をとりて立ち、われ舳によりて「はいね」を讀む、芥舟、舳をたゝいて是れに和
す。されど三たりの感ずるところ、相同じきを得べきか。

半歳の漂浪に病いえたれども、わが心のきすはいつしか新しき痛みを感じそめぬ。われつ
とめて笑へり、人はその笑の如何ばかり苦しきかをあらざるなり。

飛陽つなきがたく、流光さへかたし。嘲風、佳耦をむかへて室に芬蘭のほひあり。われ残燈にむかひ、孤影蕭然として今も尙ほ「はいね」を讀む。

Einsam klag' ich meine Leiden

Im vertrauten Schoss der Nacht;

Frohe Menschen muss ich meiden,

Fliehen schen, wo Freude lacht.

Einsam fliessen meine Thränen,

Fliesen immer, fliesen still,

Doch des Herzens brennend, Sehnen

Keine Thräne löschen will.

は夏のみやかなる夕、相摸なる田越の里にて。

(明治三十年六月)

自殺論

行ひ志と違ひて望を前途に喪ふ時、或は世事の非なるを慨きて憤懣悲憤の情に勝へざる時、或は垢を含み嘲を忍びて世に立つ能はざる時、人往々自ら天命を裁して其の生を絶つ。洵に悲しむべき現象なり。廉恥を尙び氣概に富める吾國人の間には殊に此の現象の繁きを見る。

自殺は必ずしも悪しきことに非ず、随分時と場合によりては、却て生あるを悔ゆるも及ばざることあるべき也。されど苟も人生一切の義務を抛却し、斷絶して、尙ほ且つ其の罪惡たるを免れ得むが爲には、其の制約として如何なる事情を須要とすべきかを考へざるべからず。一時の氣勢に驅られ、前後の分別無く、一向に死を急ぐが如きは、深く戒慎すべし。又斯の如き自殺に對しては、社會は區々たる憐憫の私情を捨て、公義公德の名によりて、斷々乎として最も嚴重なる制裁を加へざるべからず。

然らば如何なる場合に於て、自殺は道德上の罪惡たるを免るべきか。

基督教徒、若しくは基督教的倫理學者は自殺を以て神に對する義務を缺くものと説く。是の如き説は一笑にだも値せず。元來所謂神たるもの一の迷信ならば、是の妄想の假設物に對して、實在者たる人間が何等の義務を有すべき筈無ければ也。よし假りに是の如き妄想を眞なりと許すも、吾人自ら神の所生たる吾人の生命に關係するは不敬の所爲なりとの自殺を難する同じ理由によりて、自生をも罪惡とせざるを得ざるべし。人は衣食住によりて自己の生命を繼續し、疾病あれば藥餌醫療を加ふ、之れ即ち神の支配せる生命に干涉するものに非ずや。もし生活を自然の動機なりと謂はば、均しく自殺をも然りと謂ふことに於て百千の例證立地に辯ずべし。

又自殺は自己に對するの義務を缺くと説くものあり。然れども自己に對する義務とは所詮自家撞着の概念ならずや。一切他を離れて自己なるもの、倫理學上果して何等の意義を有し得べき乎。由來義務とは對他の概念なり。吾人が自己を修むるの義務ありと思惟するは、之れ自己が他に對する義務を遂行するの必要より起れるもの、苟も他に對して何等義務を有すること無くば、自己は全く道德の世界を離れたる一自然物に外ならざるべし。是の時に當り

ては、自己に對する義務と云ふが如きは全く無意義の文字ならずや。

故に自殺が道德上の價值を有する唯一の制約は、對他の義務より生ずる關係に存すべきこととは勿論、更にそが罪惡と爲り得る條件も、爲り得ざる條件も、共に茲に存すべきこと明らかし。

吾人の生活は所詮義務の連鎖なり。家にありては父子、兄弟、夫妻、主僕たり。社會國家に立ちては公民、臣下たり。其他、師資、友朋、隣保、親戚に至るまで、分に應じて各、其の盡すべき義務を有せざるなし。一身を以て萬境に對す、其の遂行すべき業務は生を累ぬるも足れりとせざる也。もし吾人の生活にして一定の歳時方處に制限せられず、其の能力はた圓滿ならましかば、吾人希はくは平等博愛を以て實際の主義とせむ。而も有盡有漏の身神には素より是の事あるを得ず、是に於てか義務の大小に隨つて行爲に先後と輕重との差別あり。是に於てか道德は直觀のみを以て完きを得ず、良心は教育を須要とし、道德的生活の一部は考察的生活となるに至る。夫の自殺と云ふものにして、若し一切義務の商量上、自己生存の利益を認めざる健全なる意識に本づくものならむには、之れ實に罪惡として批難すべきもの

に非ざるのみならず、却て一個の道德的行爲として是認せらるべきものたり。

けに人は如何なる場合に於ても其の生命を維持すべき義務あるに非ず。若し世界中の何人も我が存在の價値を認めず、却て我が死滅によりて幸福を感じるが如き場合に於て、吾れは是のあらゆる苦痛を忍びて尙ほ且つ是の世に生存らへざるべからざるか。是の時に當りて自殺は決して何人に對する義務をも缺如するものに非ず。されば一の罪惡に非ずして、單に一個の不幸なる生靈の不幸なる最後に過ぎざるべし。基督を賣りたる後、イスカリオテのユダは何が爲に長へに生存せざるべからざるか。

若し人あり、一切義務の商量上、自己の死は自己の生よりも却て國家社會に有益なることを確認し、而して是の確認に本づきて自殺を決行したりとせば、是れ實に志士仁人の行爲として賞讃せらるべきなり。世には怯懦を以て一切の自殺を嘲罵する者あり。如何にも夫の失戀に泣き、不遇に泣き、自己消化器の不良に原因する一般感覺の不快を以て、厚顔にも社會人生の缺陷に歸し、鬱悶憂憤の餘り、一死塵に救濟の道を求め得たるが如き婦女子の輩は、實に薄志弱行の甚しきものにして、當然怯懦卑屈を批難せらるべき者たり。然れどもあらゆる

自殺は必ずしも然らざる也。且つ夫れ人は死すべき時に死せざれば、却て其の生あるを悔ゆることあり。想ふに世間當に死すべくして而して死し得ざるもの、果して幾何あるべきぞ。自殺を卑怯なりとするものは、翻つて自殺をだに爲し得ざる卑怯漢の更に數多きを考へよ。吾人は淫を隠いて生きるものが、操を立て、死するものよりも幾何か勇敢なるやを知る能はず。夫の徒らに社會國家の禍となりて、而も尙ほ其の蠢爾たる生命を維持する輩をして、自力によりて爲し得べき最高なる道德的行爲の何物なるかを覺悟せしむるは、少くとも彼等の志操を鞭撻し、遷善力行の道に就かしむるに於て必要ならずとせざる也。

然れども、死は之を再びすべからず。吾人は一方に於ては生命の絶對的に貴重なるものに非ざるを信じ、他方に於ては自殺の必ずしも倫理に反かざることを斷言するを憚らず。然れども吾人は同時に、世人が是の一大事件の決行に對して如何に至大の責任を帯ぶるかを自覺し、其の措置の極めて慎重、極めて公明なるべきを勧告す。人生行爲中、尤も醜陋なるものの一は、失心の死なり、狂亂の死なり、卑怯の死なり。或は償ふべからざるの罪過を犯し、或は義務の重荷に堪へず、或は私情に刺戟せられ、一死以て現世の繁累を脱せむとするが如き

は、社會國家の倫理上許すべからざるの大罪惡たり。死を以て一切罪過に對するの辯解なりと思惟し、更に一層重大永欠の罪過を加ふる所以なるを知らざるもの、其の愚や則ち憫れむべしと雖も、其の罪や恕すべからず。社會は其の私情に驅られて公義を顧みず、婦女子の涕涙に咽びて大丈夫の制裁を加へず、彼れ死せり、其の罪恕るすべしと云ふ。あゝ、是の如くして誤つて風を成さば、耐持堅忍、以て最後の義務を遂行するの美德は却て怯懦として誹詆せられむ。我が邦人、由來死を輕んず、國家の強力は實に是の死を輕んずるの士風に歸因するもの多しと雖も、以て平時の則となすに足らず。吾人は是の死を恐れざる氣質の中、更に義務を重んずるの習性を剛致せむことを欲す。夫の慷慨氣を負ひ、謂はれなくして匕首を弄するの輩に向つては、社會は須らく相當の制裁を加へざるべからざる也。

(明治三十年十月)

厚積薄發

久屈の中に信じて至足の後に用ひ、既溢の餘に流れて持滿の末に溢す。學者説を爲すの道當に是の如くなるべきなり。吾人年少、學尚ほ淺し、未だ是の境地に達せざるを慚づ。願ふに世上吾人と感を同うするもの尠からざらむ。希くは俱に共に一向精進して敢て懈らざらむ。所謂游及餘地斤を運して風を成す。是の如くにして初めて能くせむのみ。

(明治三十年十月)

冷鐵のひびき

公德は私情を没せざるべからず、大義まゝ親を滅す。理を談じて冷刻鐵の如きものを以て一概に無情漢となす勿れ。冷えたる鐵にも、打てば美妙なる響あり。

(明治三十年十月)

送年の辭

歳將に暮れなむとす。春風面を吹いて人亦將に既に老いむとす。古往今來、是の如くにして世と人と相共に流轉す。茲に歳末に對して、年々歳々同一の感慨を忍ぶ能はず、亦已むを得ざらむ乎。

嗚呼歳將に暮れなむとす。吾人は古の詩人と共に人事畢竟流水の鏤刻なりと觀すべき乎。吾が鬢邊尙ほ幸にして綠なり、前途幾春秋、而も行藏大に失して、事業意の如くならず、つらつら往を以て來を測るに、一生是れ何爲るものぞや。杯を舉げて新春を迎へむと欲するも、尙ほ願みて流年を送るの情に堪へざる也。嗚呼人事畢竟流水の鏤刻なる乎。時は限り無く轉じ、生死の蒼漸く忙はしからむとす。悠々五千年の歴史にして初めて今日あるを想はば、吾れ安んぞ吾が生の短くして我が事の晦きを恨まむや。逝けよ、明治三十年、國家の建築に一片の瓦を具し、人道の織文に一縷の絲を獻すれば、爾と吾人と、其の天分に於て又遺憾なし

と謂ふべき也、非乎。以て送年の辭となす。

(明治三十年十二月)

決するを欲せざる疑問

團洲、大阪の一興行二萬五千金。今の小説家の原稿料一頁五十錢。俳優貴きか、小説家賤しきか、抑、社會、人に報ふるの道を盡さざるか。

吾れの決するを好まざる疑問也。

(明治三十一年一月)

たそがれの辭

(一葉舟を讀みて)

吾れパースが詩を讀み、「天上のメリーに」と題する一篇に到る毎に、未だ會て卷を掩ふて哀哭せずんばあらざるなり。――

あはれ曉の星の光ぞ心無き、

我がメリーの昔の今更に忍ばる、哉。

嗚呼メリーよ、世を去りしいとしのものよ、

今は何處の空にお在するぞ。

汝の戀人が斯くもやつれし姿を如何に見るらむや、

其の戀人の胸を引き裂ける歎きの聲を如何に聞くらむや。

歌は是の數行に初まりぬ。彼はアイル河のほとり、綠深き夏の杜影に、命を限りの永き別

れとも知らずして、行末かけて盡きぬ名残を惜みたり。

風香はしく、鳥の聲聞ゆ、美はしき菫花は咲き匂ひて、水の流れに歌ありき。二人は左右の手に聖書を取り交はし、神の御名によりて永遠の愛情を誓ひたり。かくてパースがメリーに與へたる聖書には、自ら筆を取りて、利未記十九章の「汝等わが名を指して偽り誓ふべからず、また汝の神の名を汚すべからず」と云へる語と、馬太傳第五章の「古の人に告げて偽りの誓を立つること勿れ、汝が誓ふ所は必ず主に遂ぐべし」と云へる語を書き記し、互に涙ながらに其の手を握りたりき。されど是の誓を遂ぐべき時は、遂に二人の間に來らざりき。メリーは幾も無く是の世の人ならずなりぬ。年毎に夏の綠は濃うなりまさり、アイルの河のほとりには、風香はしく、鳥長へに歌へり。失戀に心を傷りたる憐れなる詩人は、幾度か是の永訣の地にさすらひて、懐舊の涙に咽びしが、忘れがたなき思ひに、胸は常に新たなる痛みを覚えぬ。水流れて底深み、年経ちて哀しき増されり。彼れが短き生涯の終りの半は、メリーが爲めに堪へがたき哀悼を示せる生ける墓標なりしなり。

彼れは娶れり。されど楽しき人生は歸らざるべう彼れを去りぬ。其の妻なる人の記録によ

れば、メリーの死より三週年に當る或日の夕べ、彼は何事をか思ひ悩みたらむ如く、其の蒼白き顔には涙さへ流れたるが見ゆ。妻問へども物言はず、靜に一室に垂れこめて其の夜を泣き明しぬ。曉早く庭園に出でけるを、妻なる人の窺ひしに、秋の夜寒に秋の草葉の露ふみしだき、悄然天上を仰ぎ見て長嘆息せるもの多時、家に入り直ちに紙筆を命じて書き綴りしは、即ちこゝに謂へる「天上のメリーに」の一篇なりきと傳ふ。

吾れをして他を言ふものと爲す勿れ、藤村が「一葉舟」を讀みて、先づ我が胸に浮びたるはバーンスが是の詩篇なりき。あゝ希くは我れにその何故なるかを問ふ勿れ。そもく斯く思はしむるは、讀む人の心なる乎、讀まるゝ人の情なる乎。世には往々文字を解するの道、一にして足らざる事ある也。

されば「一葉舟」の吾れに於けるや、藤村の意を得たと得ざると、吾れに於て亦何爲るものぞ。希くは暫く吾れをしてバーンスの詩を觀るの眼をもてそを讀ましめよ。あゝ斯く思はしむるは讀む人の心なる乎、讀まるゝ人の情なる乎、吾れは知らず、唯、如何なれば、我心を動かすことの、かくはあやしうもむつかしきや。

にこりをいでゝさくはなに

にほひありとなあやしみそ、

光は高き花がめに

戀の嫉妬もあるものを。

命運をよそにかげろふの

きゆるためしぞなきといへ。

あまりに薄き縁こそ

友のこのよのいのちなれ。

水際にさけるあやめよりも白き花瓶は、是の友のたくみより出でこしを、如何なれば戀のねたみありとは呷ちけむ。あまりに薄きえにしをば、友が是の世のいのちぞとは、そも何のころぞや。

をとめこゝろをふら珠の

藏とは友の見てしかど、

寶の胸をひらくべき

戀の鍵だになかりしか。

眞珠の藏にも喩ふべき、乙女の心を開くべき鍵は、友不幸にして有たざりき。昔しエルテルの悲みには、戀すべき時はありしかど、戀すべき人はあらざりき。戀すべき人はありしかど、戀すべき道はあらざりき。彼れの胸の小暗き隅には、ねたみの蛇蟠まりて、或時は友なる戀人の胸にまつはりき。今や乙女の胸は鎖されて、そを開くべき鍵もなし。あゝ果して戀無かりし乎、戀する人の無かりし乎、將た又戀する道のあらざりし乎。

あひみてのちは、とこしへの。

わかれとなりし世のなごり、

かなしきゆめと思ひしを、

われや忘れじ夏の夜半。

あはれなる蘇國の詩人もまたかく歌ひにき。友とは誰ぞや、誰か是れを言ふに忍びむや。

あゝあゝ清き白雪の、

つもりもあへず消ゆること、

なつかしかりし友の身は、

われを残して失せにけり。

失戀の詩人バーンスもまた斯く歌ひにき。友とは誰ぞや、誰か是れを言ふに忍びむや。

想へば白磁花瓶の一賦、まことに解し難し。されど世に解し得たらむ人だにあらば、涙は彼れにとりて貴しと謂ふべからむ。さるにても、哀れ深きは『哀縁』の一篇なるか。

童子釣を江畔に垂れて落花の情になやむ。花物言ひて人怪します、人、心をよせて花去り難し。事既に甚だ奇なり。

ひそかに汝の姿をうかがふに、この世に止ること暫くもせず、さけば落ち、落つれば流れ、何をか慕ひ、何をか追ふらむ。こゝろみにわが寂しき心をもて、汝の上に載することを好まずや。さらば汝はわれと共に流れ、われは汝と共に流れむ。

花はおぢたる氣色なく、人は捨てがたき思あり。かくて『長途の草の枕を詫びて、心の友にめぐり逢ひたらむやうに』、花と人と、一つの水に流れけり。

あはれむかしより盲目と傳へたるえにしのほども果敢なしや。かの花は瀬に乗りたりと覺しく、する／＼と流れ行きけるが、忽ち「うづまき」方うろくづのうちにからまり、あはれげに廻り居るにぞ、見れば眼も昏むばかりにて、いかにもして再び水に浮べむものと、岩づたひに水に下りしが、今やさしのばしたる右の手の、もろくもかの花にとどかむとせしとき、古昔幾百年のさびに滑りて、童子は花と共に沈みぬ。

けに哀れなるえにしならずや。柵しがらみけはしき流れには、いくその悲しみをや留めけむ。いのちの外の命を夢むる花の心には、させる悟りのあるべくもあらず、はかなき誓ひに、もよとせの恨を残すこそ、うたてけれ。そも恨みと見るは心なき人のこゝろなる乎。希くは彼れを許して泣かしめよ。人生の望みは、何れか葉末の露に宿れる月影にたとふべからざる。風そよぐあしたの野邊に跡もなき、けに陽炎かげろうの定めなきさだめを如何にすべき。良しさらば、暫く吾れをして「一葉舟」を讀ましめよ。

あゝ吾れ何事を言ひたる乎。讀む人の心乎、讀まるゝ人の情乎、吾れ知らず。あゝ吾れ狂せしに非ざる乎、非乎。

(明治三十一年七月)

秋色

立田姫の織りなせる錦とはたが言ひ初めにけむ、秋の色には血あり、涙あり、怒りあり、嘲りあるを。

たとへば社稷の傾危に際して、讒奸いざな色を失ひ、便佞立つに處なく、忠良獨り易「安」方からざるにも較ぶべきか。平明の世には見がたき人の弱點も、かゝる時こそ著るしくも現はるるなれ。さはれ秋は自然にのみあるべきやは。

(明治三十一年十月)

歳暮

愚なるは人の心なりけり。是の歳晩に際して又も同一の感慨を繰り返さむとは。

人に生死あり、國に興亡あり、流轉の卷、日に忙はしくして、昨今の是非長へに新なり。憐れなる人の悲み、泣き、喜び、勇み、躍り、仆れ、争ひ、狂へる間に、是の一切の法界を載せ、聲無くして運り行く「時」の如何に大いなるよ。蜉蝣の生を享けて盈尺の地に展轉し、各、其の可憐なる希望の爲に煩悶する吾等、一念是に至れば覺えず惻然たらずむばあらず。是に於て乎、人間ありてより最も古き疑問は、更に新たなる意義を以て吾等の前に提供せらるゝ也、あはれ人は何處より來り、何處にか行かむとする。あゝ誰かそを吾人に教へ得べきぞ。

明治三十一年將に暮れなむとす、世界と日本と吾等とは、是の一歳によりて何物を永遠の中に寄與し得たるべき乎。嗚呼誰かそを吾等に告げ得べきぞ。

年來り年往き、人生れ人死す、柳因絮果年々是の如し。吾等は何の望む所ありて是の限り無き單調を反復せむとする乎。歳晩に臨みて吾等の讀者と共に考ふべきは是の一事のみ。

(明治三十一年十二月)

死と永生

死は生きとし生けるもの免るべからざる運命なり。夫れ唯、免るべからざる運命なり、故に又避くべからざる問題也。されど世に生を惜しむ人はあれども、死を惜しむ人は少く、生に就て慮る人はあれども、死に就て考ふる人は稀なり、訝しからずや。

如何にして生くべき乎、是れ人生の大いなる疑問也。然れど如何にして死すべき乎は、更に大いなる疑問には非ざるべき乎。吾等は歴史を讀みて大いなる宗教の起るを見たり、されど宗教とは、生きむが爲の教に非ずして、死せむが爲の悟り也。釋迦は人生の四苦に感じて解脱の途を説きぬ。耶穌は同胞の宿罪を贖ふて永生の道を開きぬ。解脱や、永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の説ける哲學の旨趣も亦是れに外ならざる也。天地人生の理法を明にするは、人をして安心立命の地を得せしむるにあり。安心立命とは、所詮は死を安からしむるの謂に非ずや。道德は現世の爲にのみ存するものにあらず、名譽の不朽を思

ひ、事業の永遠を言はば、是れ即ち死後の世界を言ふなり。あはれ其生を見て其死を見ざる者は、人生の根本を遺れたり。死は凡ての物の終りにして、又凡ての物の初めなれば也。されば人々死を考へよ、死を考ふるは即ち人生の目的を考ふる也、如何にして生すべき乎の問題は、即ち如何にして死すべき乎の問題也。死を考ふるは死滅を考ふるに非ずして永生を考ふる也。死は人生の究竟なるが故に、永生は人生の目的也。

夫の生死の優劣を争ひ、人生の價値を疑ふものは愚なる哉。吾等は生を知る、未だ死を知らず、如何ぞ其の優劣を知らむや、人生の價値は絶対なり、他に比すべきものなし。厭世と謂ひ、樂天と謂ふ、吾等其の何の意なるを知らず。吾等は唯、人生の實在せるを知るのみ。

されば吾等は生きざるべからず。永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり、されど吾等は死を超絶して其の永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得む乎、人生究竟の問題茲に集まる。

世に神に禱りて永生を求むるものあり、佛に願ふものは人生の倏忽を歎きて涅槃の寂莫を求む。されど形體を離れて魂魄無きを如何にすべき。其の墳墓を壯大にし、金を鏤め、石に

刻して、名の後世に傳はらむことを求むるものあり、されど時は凡ての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して墓標獨り全きを得べきや、否や。是の如きは永生の道に非ざるなり。

まことの永生は名によりて生くるに非ずして、事によりて生くる也。儒教の存する所、今尚ほ孔子あらざるは無く、佛寺の建つところ、到る處に釋迦あり、耶穌は十字架にかゝれりと雖も、今尚ほ基督教徒の命也。楠公の史蹟に感激する者、胸には楠公其人の生命あり。蒸汽機關の動く所には、ワットの血液あり。電氣の線のかゝる所は、即ちフランクリンが永生の地にあらずや。まことの永生は、時と共に深さを加へ、人と共に廣さを加ふ。されば一人の精神は、千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々汨々として遂に世界を動かさずば已まざるべし。十九世紀の文明は、是の如き幾多永生の結果に外ならざるなり。

我が少年諸子よ、諸子も曾て死を考へしことありや。其の年の弱きを以て早しとする勿れ。死を思はずして生きたる。獨り其の生の完からむを

の死をして恨み無からしめんと欲せずして、道を歩むなり。死を思ふは即ち永生を思ふ

なり、而して最も好く是の問題を解釋したるものは哲人傑士なり。

(明治三十二年八月)

一飽の時

明月一灣、風露千里、吾れ友と共に大江に泛ぶ、神思搖蕩して那邊に在るを覺えず、是の人生の須臾を以て夫の天地の悠久に較ぶれば、安んぞ百年の永歎を抱きて一飽の時無きを恨みんや。

(明治三十二年九月)

秋

(簞々録の一節)

年はなかばを過ぎて野に秋風わたる。あせべき色は漸くあせて、常磐樹の色のみ黒くなり

まさり、零つべき葉は漸く零ちて、擔打つ雨の音悲し。あはれ何處の蝶ぞ、やがては來べき身の果てを、寄すべき花は無しと知らずや。
寂しき哉、秋の色や。澄み渡れる大ぞらに、鳥は翼を收めて高く翔らず、蕭殺の氣は天地に充ちて、萬づのもの、其の呼吸に痛みあるを覺えぬ。
是れ詩人の泣くべき時、哲學者の考ふべき時、宗教家の悟るべき時、志士の義憤を漏らすべき時、凡ての人が自己の濁情を洗きて自然の洗禮を受くべき時。
秋には悲みあり、されどまた大いなる慰藉と教訓とあり。

(明治三十二年九月)

無題集

秋

日は傾き、鐘の音は遠きよりいたる。吾が心隠としておだやかならず。去つて高欄に、愁思形なくして雲の如く湧く。あゝ浪の音が、松

風か、幽かに鳴き渡るかもめの聲か。——わが思ひを解かむもの、たゞ人間のひゞきならじ。

○ 一夜雲低うして、水、天に連る。わが思ひ茫として往かむところを知らず。磯波ちかく歩みわたれば、うたあり、おのづから口に上る。あゝ吾れも亦詩人たり得べけむよ、人間もし這個の意をうつす文字あらば。

○ たゞ一語、以てわがこの思ひをあらはさむすべもがな。かくて海風蓬々として吹き渡るの日、希くは衣を千仞の岡に振ひて、ながく天邊に嘯かなむ、——わが胸のいかばかりやすかるべき。

○ われは想ふ、死はそれ冷かなる夜の如き乎、生はそれあつくるしき晝の如き乎。吾れ病みて死なむとせし時、胸のひゞきのいとゞ安らけきを覺えき。

○ 夕日の空に眺め入りて、われ時久しくも水のほとりに坐しぬ。海原とほく幽かなるひゞきのわが胸にさゝやけり。吾れ杖をとりて砂中に書けば、打ち寄する浪に跡も無く消えうせぬ。かくて日は暮れぬ。

○ 秋深うして萬山黄ばみ落つ。あゝ天地もまた物質の外に求むるところあるか。半夜耳をそばだつれば、野に悲しき聲す。

○ 人は曰ふ、山河のうるはしきを見よと。知らずや、人生の恨みむすほれて、この胸に痛みあるもの、何の違ありてか自然の美をたゞへむ。

○ 言ふまじく、憶ふまじき過立の、たゞ夢に入るこそ是非なけれ。人よ怪しまざれ、この世にしてうるはしきもの、何れか夢にあらざらむや。

(明治三十三年秋)

○ 歳は更^{あらた}まりぬ、春風おもてを吹けども人の老ゆるを如何にせむ。われは夫れ詩人と共に唱はむ乎。酒あり飲むべし、書は焚くべし、人生焉ぞ愁緒の多きに勝へむ。

○ かつて波打際を歩みし時、われ顧みて嘆息しぬ。あはれ、磯波たかく打ちよせて、吾がこしかたの忽ち痕もなう洗はれつるよ。人生の事業にも似たらすや。

○ 詩つくらむとて吾れ幾度か筆とりぬ。筆とるたびに吾が胸の咽ぶが如く苦しきを覚えぬ。あゝ、おもひは長く、筆は短かし。吾れはそれこの黙思を懐^{いだ}いて眠らむかな。うるはしきもの夢ばかりなる世こそうたてけれ。

○ 歌ふ能はずむば、吾れそれ嘯かむか。人間よし友朋無きも、山河尙ほ響を返さなむ。

○ 吾れはわが聲にひゞきあるを喜ぶ。結ほれたる胸の、爲めに破れざらむを得なければなり。

○ 月あかき一夜、われ身獨りにして東海のほとりにさすらひぬ。閑^{まじ}遠なる浪の音幽かなるにつれて、わが心のあへぐが如きこそ怪しけれ。吾れは磯邊の岩によりて夜ふくるまで立ちつくしぬ。かへりみて自ら何の故なるやを知らざるなり。

○ 友の千里の外にあるもの、遙に驛情を寄せて曰へらく、故國とほくして人の知るなし、この孤獨を如何と。われ答へて曰へらく、あゝ友よ、漫りに孤獨を言ふを已めよ、その鼓動を共にする胸は、この世に幾ばくもあらずかし。面して笑ふもの百萬人ありとても、吾れに於て瓦礫にひとしからむ。

○ 雲いろくの夕暮の空に、飛ぶ鳥のゆくへも知らずまぎれ入るこそうらやましけれ。吾れ

は幾度か願ひぬ、この思ひを胸にして、吾がむくろの露となりても溶けよかし、かくて天風に散じて、かの限りなきみ空に吹きわたたりてむ。

(明治三十四年一月)

世と馬

世に爲すあらむと欲して世に接することを憂ふるものは、猶ほ馬を御せむと欲して馬に乗ることを避くるものの如き也。畢竟彼等は彼等の爲すべき事を覺らざるものと謂ふべし。

(明治三十二年十一月)

清見寺の鐘聲

夜半のねざめに鐘の音ひききぬ。おもへばわれは清見寺のふもにさすらへる身ぞ。ゆかしの鐘の音や。

この鐘きかむとて、われ六とせの春秋をあだにくらしき。うれたくもたのしき、今のわが身かな。いざやおもひのまゝに聴きあかむ。

秋深うして萬山きばみ落つ。枕をそばだつれば野に悲しき聲す。あはれ鐘の音、わづらひの胸にも思へとや、この世ならぬひききを、われいかにきくべき。怪しきかな、物おもふとしもあらなくに、いつしかわが頬に涙ながれぬ。

間どほなる鐘の音はそのはじめの響きを終りぬ。われは枕によりて消ゆるひききのゆくへもえらす思ひ入りぬ。

第二の鐘聲起りぬ。夜はいよくゝまめやかにして、ひききはいよくゝ冴えたり。山をかす

め海をわたり、一たびは高く、一たびはひくく、絶えむとしてまたつゞき、沈まむとしてはまたうかぶ。天地の律呂か、自然の呼吸か、隠としていためるところあるが如し。想へばわづらひはわが上のみにはあらざりけるよ。あやしきかな、わが胸は鐘のひゞきと共にあへぐが如く波うちぬ。

おもひにたへで、われは戸をおしあけて磯ちかく歩みよりぬ。十日あまりの月あかき夜半なりき。三保の入江にけぶり立ち、有波の山かけおほろにして見えわかず、袖師・清水の長汀夢の如くかすみたり。世にもうるはしきけしきかな。われは磯邊の石に打ちよりて、こしかた遠く思ひかへしぬ。

おもへば、はや六歳のむかしとなりぬ。われ身にわづらひありて、まばらく此地に客たりき。清見寺の鐘の音に送り迎へられし夕べあしたの幾そたび、三保の松原になきあかし、月あかき一夜は、けに見はてぬ夢の恨めしきふし多かりき。

六とせは流水の如く去りて、人は春ごとに老いぬ。清見瀉の風光むかしながらにして幾度となく夜半の夢に入れど、身世匆忙として俄に風騒の客たり難し。われ常にこれを恨みとし

き。

この恨み、果さるべき日は遂に來りぬ。こぞの秋、われ思はずも病にかゝりて東海のほとりにさすらひ、こゝに身を清見瀉の山水に寄せて、晴夜の鐘に多年のおもひをのべむとす。あゝ思ひきや、西土はるかに往くべかりし身の、こゝに病軀を故山にとめて山河の契りをはたさむとは。奇しくもあざなはれたるわが運命かな。

鐘の音はわがおもひを追うて幾度びかひゞきぬ。

うるはしきかな、山や水や、偽りなく、そねみなく、憎みなく、争ひなし。人は生死のちまたに迷ひ、世は興亡のわだちを廻る。山や、水や、かはるところなきなり。おもへば恥かしきわが身かな。こゝに恨みある身の病を養へばとて、千年の齡、もとより保つべくもあらず、やがて哀れは夢のたゞちに消えて知る人もなき枯骨となりはてなむす。われは薄倅兒、數ならぬ身の世にながらへてまた何の爲すところぞ。さるに、をしむまじき命のなほ捨てがてに、こゝに漂浪の旦暮をかさぬこそ、おろかにもまた哀れならずや。

鐘の音はまたいくたびかひゞきわたりぬ。わがおもひいよく深うなりつ。

夜はいたく更けぬ。山と水と寂莫として地に横はり、星と月と寂莫として天にかゝれり。うるはしの極みかな。願くは月よ傾かざれ、星よ沈まざれ、永久の夜の、この世の聲色を掩ひつゝめよかし。されどわれには禱るべき言葉なかりき。

最後の鐘聲おこりぬ。餘音とほくわたりて、到るところに咏嘆のひゞきをとゞめぬ。うれし
の鐘の音や、人間の言の葉に上りがたきわがいくそのおもひ、この鐘ならで誰か言ひとか
む。

* * * * *

年を越えてわれ都にかへりぬ。わが思ひまた胸にむすほれつ。夜半のねざめに清見寺の鐘聲またきくべからず。われは今に於ても幾たびか思ひぬ。唱一語以てわがこの思ひを言ひあらはさむすべもがな。かくて月あかき一夜、海風に向ひて長く嘯かなむ、わが胸のいかばかり軽かるべき。

(明治三十四年五月)

思ひ出の記

如何ならむ野の末なりとも、都のわづらはしきよりはと思ひたちて、過ぎし秋の暮れより吾れ居を湘南の涯りにさだめぬ。訪ひくる人もさすがに稀なれば、世を外なるすまゐる、わびしくもまた長閑なりし。

鳴立つ澤のほとりなるわが宿より、相摸灘の眺めいとひろやかなり。東は平塚、茅が崎の汀をつたうて江の島、鎌倉の浦々より、三浦半島の斷續を髣髴の間に認むべく、晴れわたる空には、安房館山あたりの山、遙にその間にながめらる。西は小磯、小田原のあなた、足柄、函根より伊豆の連山をたどりて、遠く稻取のみさきまで、色おもしろう薄れゆくさま、山のすがたまたあるまじくうるはしし。南は遠洋の煙波をうけて、大島山青螺の如く横はり、ゆくへもえらす立つ煙の、色さまぐのたゞすまる、心ゆくばかりなり。

心を傷ましむるかな、見渡すかぎりのながめは、一としてわが曾遊の地ならざるはなし。

今は病ある身の、心にまかせぬ事多きこそうたてけれ。夕べに空にながめ入りて、こしかた遠く思ひ起せば、今のわが身にひきくらべて、悲しきことのいひまらず湧き出づるに、いつしか涙の流るゝを覺えず。あゝいかにうるはしく天に輝かけばとて、終りには地に沈むべき日ぞ。青春人にありて幾時ぞや、けに見はてぬ夢の惜しみてもかひなきは、わが十年の過去なりき。

今のわれはおもはぬ地にさすらひの人となりて、いたづらに曾遊の山河を望める身ぞ。秋く来て冬來り、小篋が末に霰たばしる、あはれ飄零のわが身にも似たるかな。萬山黄ばみ落ちて野に悲風あり。かゝる時にこそ思ひある身の哀れは知らるゝなれ。

憶へば、はや八年の昔とはなりけるよ、足柄の奥にゆきくれて、豊原のなにがしが風騒の跡をたづねしは。春まさきに暮れなむとして、竹の下道そことしも見えわかず、十日あまりの月影に、曾我野の原もおほろにして、やうやく國府津の里にたどりつきしは、あはれにもまた興深かりし旅なりき。その折つれだちし友は、わが幼少よりの知己にて、この世ながく離れじとこそは願ひしが、今や身世處を異にして天涯相見るに由なし。わがみぢかき命の中に

また相見む折の幾度かあるべき。おもへばはかなき人の遭逢かな。山河の姿とこしへにかはらざるは、はかなき人に物思へとや。

足柄の嶺、函根の山より、伊豆の浦つたひに、わが思ひいよくはるかなり。眞鶴が崎の盡くるあたりは、熱海のかたなるべし。

あゝ熱海、われには如何になつかしき土地なるよ。春ごとにわれは老いて、六歳は且暮の如くたちぬれども、熱海にくらし、三月のみこそ、いかばかり長く覺えしか。かの時は今のわれの如く、身にも心にもわづらひあるわれなりき。一卷のハイネ集を且暮の友として、うきことまけき此世をば泣きくらさむと、あはれにも思ひさだめてき。今にして思へば、かゝる咏歎の中にわがいひまらぬ幸ひはありたりしなり。わが孤獨を慰めむとて、わが友嘲風、都よりたづね來りき。あゝいかなる歡びを以て、われはわが友を擁きしぞや。雨のあした、月の夕べ、語りもし、語られもせしこの世のうさのかすくに、われやいくその涙をそよぎたりけむ。友はまことに情ある人なれば心よわきわれに咏嘆のたのしみを禁めざりき。ある日、魚見が崎の斷崖に上り、共にグリルバルツエルがサツボの悲曲を誦みて、たのみがた

き世の事、人の上の、古も今もかはりなきを想ひ、人生の悲哀と、こしへに盡きざるをかこち、あはれかゝる斷崖の上より、希臘の女詩人はその最後の救ひを求めけむよと語り合ひし時、われは崖下千尺の杳冥に見惚れて、慄然として目さめたるが如きを覺えたりき。かくてわれは友に語りき、サッポアの死や遅かりしと。あゝこの日、いかに樂しかりしよ。わが薄倖の生涯にも、なほかゝる福祉はありけるよ。思ひ出だすだに、わが胸の物狂はしうと、ろくこそ怪しけれ。

うるはしき日は夢の如く消え去りて、我が思ひのみぞ獨り老いにける。嘲風今は西の方歌洲に去りて、際遇われと同じからず、たゞ會遊の興會、さすがに忘しがたくてや、この春のはじめの文に、今宵は君を熱海におとづれし日ぞなど書き送りけるこそ懐かしけれ。今や世にふたりなき友の、天涯はるかにわかれ住みて、互に孤獨の生を送らむは、まことに悲しからずや。

見渡せば沖の小島と詠まれけむ、初島わたり漕ぐ船の、行衛は網代、伊東の方なるべし。南、天城の高嶺峨々として豆南の天を限るところ、またこれわが會遊の跡ならずや。二歳前

の冬の最中のことなりしが、われ函根を踏え、三島、修善寺よりこの山ふかく分け入りて下田の港に泊り、白濱、稻取の浦をつたうて半島の東岸を繞りたりき。名たゝる險難の土地とて、もとより車馬の便りに乏しく、三十餘里の惡路を物ともせず歩みしは、けにわれながら健氣なりき。さるにても人の身の頼み難きことよ、二歳後の今のわれはいかなる態ぞ。且夕の保生に心を勞して、遣悶の酒また多く用ふべからず、浪々として懶怠の月日を送る、おろかにもまた憐れならずや。あゝわれ何時の日かまた登攀の壯遊を試み得べき。

江の島、鎌倉の山水はいふまでもなくわが舊年の知己なり。わけて田越の里にあかしくらし、幾春秋こそ心ゆくばかり偲ばるれ。田越川のほとりに六代御前の古墳あり、われこゝに佇回して、哀れなる平家の末路をおもひうかべしことそも幾度なりけむ。このうたかたの生涯に、われ多く望むところ無し、たゞ數ならぬ身のなほ願ひ得べくむば、わが末路の願くは平家の如くうるはしかれ。われはかゝる思ひにかきくれて、星合の空に七百年のむかしをたどりたりき。

三浦半島のつくるところ、地低うして海に沈み、房南の山脊としてその上に浮ぶ。あゝか